

淨土

八
月
號



昭和十年七月廿日印刷納本
昭和十年八月一日發行

第一卷第四號

十七

法然上人鑽仰會發行

中村 辨康 師著 (新刊)

法然上人の信仰生活

四六判一三〇頁
高雅上品な装幀
御影寫眞入
定價三十錢(送料四錢)

法然上人の辿り給ひし信仰の道こそ、われらがしるべなり。

著者の言葉——精魂をつからしめて求めに求めた三十年の求道生活とその當時のあらゆる階級の人達を魅し盡した四十年の信仰生活とが何んなに近代人の胸を突くかを振りかへつて見たと思ふ。

それが形に現はれてゐやうとゐまいと、信仰を求め宗教に憧れるのは人間本來の姿である。古來宗教界の巨人と仰がれる聖者は悉くこの人間本來の姿を最も輝かしく明瞭に示した人間精神の鏡であり、また萬人の中に潜む信仰心に迷りの路を與へ、その萌芽に開花の時を與へた慈雨である。故に若しそれ等巨人の信仰生活の内部を覗ふことが出来るなら、我々は日常無意識の中に捨てゝ省みなかつた生活の瓦礫の中に、突如燦然として輝く向上の珠玉を見出すのに快を恣にし、貧しくも思はれた己れの生活が如何に豊富な内容に充されてゐるかを再發見して驚嘆を禁じ得まい。

法然上人の巨大にして無双なる求道生活、信仰生活の迹を慕ひ、その法悦にひたらんとするも時に現代生活の汚濁を洗ひ清め清淨なる人間本來の姿に立返らんがために外ならぬ。

發行所

法然上人鑽仰會

稻津紀三著

中論と他力信仰

佛教哲學の根本たる中の思想を解明すると共に、それによる他力の信の徹底を説く……新進學者による新田開拓の名著。

松岡讓著

釋尊の生活

「今後の佛傳は佛傳文學たらざるべからず」と喝破しつつ、將來の佛傳及佛傳文學に多大の示唆を與へたる必讀の名篇。

眞野正順著

勝鬘經

釋尊が勝鬘夫人に説いた教法を、清新なる感覺を以て昭和の婦人に與へんとするもの、經典の再検討・全卷興味津々。

◎既刊分……

『佛教聖典を語る』 山邊習學・『阿含經』 友松圓諦・『華嚴經』 宮島資夫・『觀無量壽經』 佐藤春夫・『維摩經』 武者小路實篤・『觀音經』 法華經 岡本かの子・『涅槃經』 藤秀環・『一枚起清文・數異鈔』 倉田百三・『立正安國論』 室伏高信
△近刊： 菊池寛『弘法大師の宗教、十住心論』・三木清『起信論』・高神聖昇『般若經』・中村吉藏『道元禪師の宗教、正法眼藏』

上質コート紙平均三頁以上・四六判總布兩人・二冊定價一圓五十錢
申込金五十錢最後卷分中に充當。(内容見本贈呈)

翁久允著

定價一圓五十錢。送十錢。

印度佛
跡を觀る

佛跡地圖四葉
佛跡寫真廿葉
1 印度まで 2 カ
ルカツタを中心に
3 印度の旭日と
落日 4 王舍城の
感懷 5 成道の靈
地 佛陀伽耶へ 6
初轉法輪の聖地鹿
野苑 7 涅槃の靈
地 8 ルンビニ園
9 祇園精舍へ

明快！ 繪を見るやうな巡禮記。 佛教徒
は一人残らず讀め！ 行文流麗・着想清新

岡本かの子著

菊判三百十二錢
定價一圓卅錢・送十二錢

佛
教
讀
本

潑刺！生きた明朗佛敎の出現！
まわりくどい因襲の殻をカナグリ捨て、新鮮味横
溢、現代人の實生活にビタリと添つた。政治に、
經濟に、商工農業に、家庭に、戀愛に、あらゆる
生活情勢に解決を與へる！

▽全七十五課・一課々々悉く生活の指導原理となる
▽各種學校團體より大量注文殺到・既に十四版！

發行所

十ノ七園公芝區芝市京東
番一七四九一京東替振

社 版 出 東 大



浄土 八月號 目次

・表紙・扉

・目次カット

論説頭 偉なる我が法然上人 博士 望月信亨(二)

信仰 日本精神の基礎 眞野正順(一九)

隨島の話 佐藤惣之助(八)

筆 お經を聞いて 高村光太郎(五八)

法然上人をめぐる人々(三)

西へ向く騎士 鶴田湛泉(一二)

上人を 思ふ 人間學の立場から 三木清 (五六)

信仰相談 中村 辨 康(五四)

涼味 念 佛 群 像 大野法道(三八)

齋藤實盛の亡靈を救ふ・藝州嚴島の先
明院わが身を忘れて人を救ふ



とくしゅう大衆小説

諸傳記

獨身醫師の生涯

(小島一 繪)

山中峯太郎 (二六)

往生繪卷

幻住記

(青柳喜兵衛 繪)

十一谷義三郎 (六〇)

諸

國

綺

譚

編輯部 (五〇)

與次翁と三狐、頼まぬ使者、不思議な志の餅

子どもごろ

大木三太郎

銀貨 (七) お使ひ (四九)

の も み よ

聖者を描く文學

中里介山

(四二)

行誡上人自畫讃 (四二) 笑話・八月の行事 (五〇)

往生と云ふこと

一枚起請文講義

中村辨康

(七〇)

はくらい漫畫集

編輯後記 (八〇)

淨土 八月號

(第一卷 第四號)

信仰讀本

淨土宗 中村辨康 著 定價 十二錢 送料 二錢 版製 上 頁六 四六

發行數ヶ月にして一萬部を賣り
盡した近來の記録的名著！

——明快平易な信仰への手引——

誰れでもが安易な氣持で讀める明るい佛教信仰書の出現は、惱み多き現代人が等しく望んで止まないものである。

この書を読む者は佛の教へが醸し出す限りなく溫い慈雨によつて、ともすればとげ／＼しくなり勝ちな己れの氣分、暗くなり勝ちな思想が何時の間にか解け去つて行き光明に面しつゝあるのを感じずにはおられない。

内 容

- | | |
|-----|----------|
| 第一章 | 悟りと救ひ |
| 第二章 | 宗教と人間の望み |
| 第三章 | 信する心持 |
| 第四章 | 信仰の本尊 |
| 第五章 | 信仰を得る迄 |

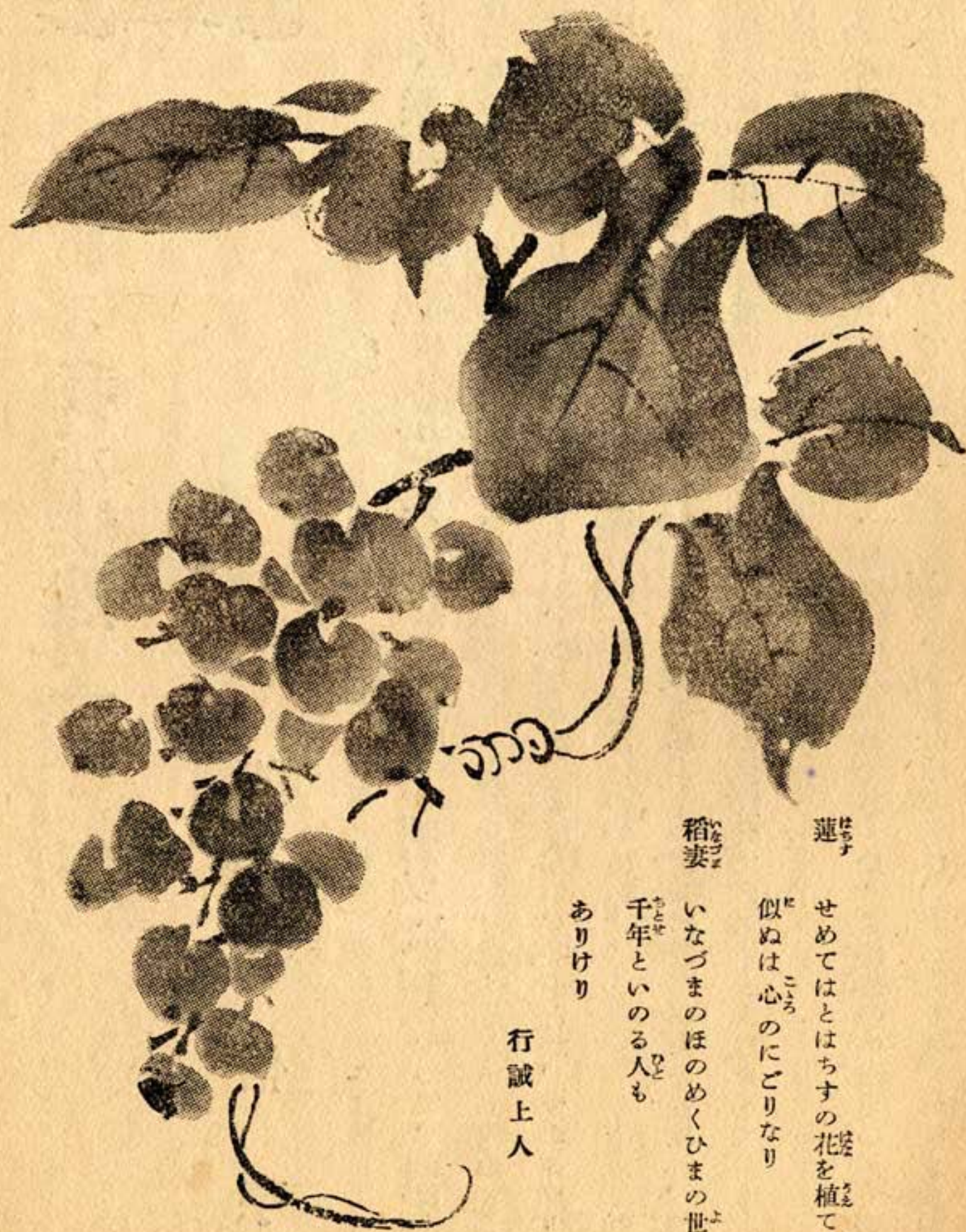
著者の平易明快、深淵なる教義を何人にもうながせる名講義は既に定評あるところ。

雑誌『淨土』に創刊號以來連載せる『一枚起請文講義』の愛讀者はこの書によつて更に著者の信仰論に耳を傾ける必要がある。

發行所 増上寺出版部

◇ 會 仰 鑽 人 上 然 法 ◇ 所 次 取

淨 土 八 月 號



蓮はちす

せめてはとはちすの花はなを植うゑてみれど
似にぬは心こころのにこりなり

稻妻いなづま

いなづまのほのめくひまの世よの中なかを
千ちとせ年といのる人ひとも

ありけり

行誠上人



偉なる我が法然上人

望月 信亨

昔から偉人といはれ、英雄豪傑と稱せられたものも少くないが、然し唯一時花々しい仕事をやつて、歴史上に其名を留めると云ふ丈けのものが多く、當代の人心を支配し、且つ後世に至るまでも感化を與へるといふ程のものは少い。其點になると宗教の教祖、派祖などいふ人は格別なもので、釋尊とか、基督とか、孔子とか、マホメツトなどいふ人は、古來幾千萬人の精神を支配し指導し、今も尙崇拜の的となつてゐるのである。

日本に於ても多數の宗教家があり、宗派の開山開祖も澤山ある。皆それ／＼の意味に於て偉人と云はれ、崇拜されて居るが、其中法然上人は日本佛教の改革者であり、日本の國民的宗教の建設者であると云ふ點に於て最も其の偉大であることが認められる。

法然上人の誕生は長承二年四月七日で、平安朝の終り、源平時代の初めであつた。其時代の佛教といふものは、大體に於て御祈禱佛教であつて、之を大にしては國家の爲に祈禱し、旱魃には雨乞ひ、雨が降り過ぎれば止風雨、病氣には延命、難産には安産の御祈りと云ふ風に、何事に就ても御祈禱が行はれた。是れは日本佛教の最初からの傾向で

あつて、主として藥師經、金光經の信仰から起つたのである。法隆寺の藥師如來は用明天皇の御病氣、釋迦如來は聖德太子の御病氣平癒の爲に造られ又藥師寺は天智天皇の御病氣の爲に建てられたもので、共に藥師經の信仰であり、又四天王寺、東大寺等は金光明經の信仰から建てられたので、即ち金光明經を讀誦すれば國家が平安になると云ふことから起つた。平安朝になつて傳教は比叡山を根據として天臺宗、弘法は眞言宗を開いたが、是れ亦國家平安の祈禱を主としたもので、叡山は鎮護國家の道場、東寺は教王護國寺と名けられたのであつた。

斯様に佛教を信仰すれば國家が平安になると云ふので、皇室に於かせられて先づ第一に御信仰になり、それから息災延命が出来ると云ふので、貴族達も信仰し、寺領俸祿は給せられ、僧位僧官は設けられ、所謂寺は官寺、僧侶は官僧と云ふ有様であつた。其結果佛教は自然官僚式になり、又貴族的になり、且つ多くの寺領を賜つた所から漸次其勢力が増大し、寺同志の間に勢力争ひが起り、遂に戦争をする様にも成つた。其中で最も勢力のあつたのは、奈良では興福寺、京都では比叡山であつて僧兵を蓄へて常に横暴を恣にし、朝廷に對しても何か願ひ事があり、又は氣に入らぬことがあると、比叡山では其れが神意であると云ふ意味で、日吉山王の神輿を擔いで嗷訴する。興福寺では春日神社の神木を擔いで京都へ出かけるといふ始末で、朝廷でも實に持餘されたものである。白河天皇は朕の意の如くならざるものは、鴨川の水と、双六の賽と、山法師だと仰せられたといふことであるが、此御言葉から見ても、當時比叡山の山法師が如何に横暴であつたかを察し得るのである。

法然上人の誕生は即ち此の時代であつて、上人は父の遺言によつて出家し、十五歳の時比叡山に登られたのであるが、田舎に居られた時には、比叡山と云へば當時日本佛教の中心、鎮護國家の大道場と謳はれた處であるから、立派な靈域であらうと子供心に憧がれて居られたのであるが、さて實際に其山に登つて實情に接して見ると、餘りに豫

想に反して腐敗墮落が甚しいので、大いに失望し、是れは眞の佛教ではない、却つて國家の爲に害のあるものだと思へられた。それから又祈禱をして果して病氣が治り、災難が攘はれたにしても、それは唯形の上の救で心の上の救でない。のみならず生者必滅であるから、人間と生れた以上は必ず死ななければならぬ。死後の問題は如何にすべきであらうか。

上人は若年ながら聰明であつたから、直に此點に著眼し、眞の佛道修行せんが爲に、十八歳の時に黒谷に隠遁し、寂空を師匠として眞劍に學問を始め、それから南都などにも行かれて學者を訪問し、又一切經を五遍迄も讀まれ、巖然頭角をあらはし、智慧第一の法然房、深廣の法然房と呼ばれるに至つた。處が其時代の佛教は、一體に自力聖道門といはれた佛教であつて、即ち戒法を持して、すべての煩惱慾望を制し、心を澄まして坐禪觀法を行ひ、自分で悟りを開いて成佛すると云ふのであるから、智慧第一の法然房にも其修行が容易でない。たとひ又自分には其の修行が出来るにしても、一般の民衆には其の能力もなく、又時間もない。佛教と云ふものは一般民衆の信仰となるものでなければならぬ。即ち一般民衆の誰れにでも理解され、誰れにでもが修行の出来るものでなければならぬ。學問をせねばならぬの、煩惱慾望を制せねばならぬのとすれば、それは一般大衆的のものでなく、特權階級の宗教にすぎないことになる。特に世が末になつて、惡人罪人が日を迫うて多くなる時代であるから、其等の人々も悉く皆救はれる教へでなくてはならぬ。自分の問題であると同時に亦一般民衆の問題である。斯様な考から上人は更に其銳利な眼で聖教を御覽になり、いろ／＼煩悶憂慮された結果、遂に四十三歳の時に至り、善導の觀經疏を見られて、始めて發見されたのが本願の念佛であつた。此念佛は別に學問も要らず、坐禪觀法も要らず、唯心に助け給へと思ひて口に名號を稱するのみで救はれるのであるから、如何なる人にも行ふことが出来る。又念佛には如何なる罪でも滅す力が

あるから、是れが即ち佛の大慈大悲のあらはれであり、これが眞の佛教であり、一般大衆の佛教であるとして、上人は飛立つ様に喜ばれたのであつた。

上人は此念佛が見出された時、振返つて過去を見、實に感慨に堪へぬものがあつた。是迄は智慧第一の法然房であつたが、學問や智慧では信仰に入る事が出来ぬ、學問の行詰り、智慧の行詰り、思索の行詰りを自ら痛切に感ぜられ



た。淨土門に歸してから、愚痴の法然房、十惡の法然房となり、智者の振舞をせず、一文不知の愚鈍の身になして尼入道の無知の輩に同じうして、唯一向に念佛する身となられたのである。

斯くて上人の進路が開けて來たから、京都に下つて一般民衆の爲に其の信仰を傳へられると、救世主のあらはれとして、我も我もと上人の庵室へつめかけ、御弟子も次第に殖え、九條兼實公を始め、公卿達も其教化に浴し、武士では熊谷直真、平重衡、宇都宮彌三郎などがあり、又鎌倉の尼將軍政子なども書面を以て教を乞ふといふ有様で、新宗の勢は旭日昇天の觀があつた。處が此の有様を見て比叡山や南都の僧達が黙つて居る筈もない。法然の新宗は諸宗を滅すものであり國家を亂すものであるなど、いろ／＼の個條を列べて念佛の禁止、上人の處刑を朝廷に嗾訴したので、遂に七十五歳の時、淨土宗は禁止となり、上人は流罪となり、弟子の住蓮、安樂は死刑に處せられることになつた。後四年を経て、上人は勅免を蒙り、建暦二年八十歳を以て、釋尊は四月八日誕生八十入滅、上人は四月七日降誕八十入滅で、實に奇しき因縁といふべきである。迫害は唯生前に於てだけでなく、滅後十五年目には比叡山から大谷の墳墓を發きに來ると云ふの

で、宇都宮彌三郎入道などが上人の遺骸を嵯峨に移すと云ふ騒ぎまで起つた。宗教の改革者の迫害を蒙つた事實は、基督にもルーテルにも又日蓮等にも見るのであるが、然し死後其の墳墓まで發かれるといふことは他に類似がない。然し一旦民衆の上に植ゑ付けられた新宗教の芽生えは、抑れば抑へる程却て反撥して、潜行的に深く人心の奥底に喰ひ込み、念佛は遂に國民的大宗教となつて、八百年後の今日迄日本國民の思想を支配し、指導しつゝあるのである。法然上人は普通に淨土宗の開山と云はれてゐるが、然し今日の七千ヶ寺餘りの淨土宗の開山といふ譯では決してない。上人は所謂念佛の元祖であつて、今日の淨土宗は勿論、眞宗も時宗も凡べて念佛を申す宗旨は、皆上人を元祖とするのである。選擇集の中に上人が自ら淨土宗を立てると云つて居られるのは、聖道門に對する淨土門の意味であつて、今日の所謂淨土宗だけを指したのではない、親鸞上人を眞宗の開山とするのに對して、法然上人を淨土宗の開山とし、同格に取扱ふ様なことは元より妥當でない。上人は要するに日本に於ける念佛の元祖であり、日本の國民的宗教の開祖であり、同時に亦舊佛教の改革者である。此點に於て上人の偉大さが始めて認められる。又上人が一たび佛教改革の急先鋒として立たれたので、其後鎌倉時代には續々として新宗が勃興し、幸ひ平安の舊佛教は漸次壊滅して日本佛教の形勢は全く一變するのである。歴史を繙く者は能く此點を注意せなければならぬ所である。

南無と思ひ阿彌陀佛といふほかは

いふこともなし思ふこともなし（行誡上人）

子もい

銀貨

静夫君は庭でコリーと遊んでゐる。静夫君も犬になる。コリーの背中に噛み付くと、相手は一層激しく静夫君にむしやぶり付く。二匹の可愛い動物が一塊になつて庭中を轉げ廻る。カステラ焼の鍋のやうに燃くなつてゐる芝生の上を……。

その時縁側から、お母さんが静夫君を呼ぶ。

『すまないけど、ほら、あのポストの立つてゐる四ツ角の高橋のおちさんのお家までお使ひに行つてくれない、山田さんがいらつしやるから直ぐ来て下さい』

ところが、静夫君はこれからコリーを連れて、池の向ふの深林地帯へ探検に出かけて大冒険をやる

うと思ひ立つたところだから、何時ものやうに素直でない。

『僕、いや！』

お母さんの聲は直ぐ高くなる。

『静夫！ 行つてらつしやい！』

命令だ。静夫君はまだ『はい！』

とは云はない。——でも仕方が無い行つて来ようか。

と、お客に來た他のおばさんが

『坊ちゃん、良い子ね、さ、これをあげるから行つて来て頂戴ね。』

と云ひ乍ら掌に乗せたものを差出した。五十錢銀貨だ。——静夫君は急に腹が立つた。——五十錢銀貨なんか欲しくないや。いやだ

から行かないんだ。こんなものが欲しくて行かないんじやないや。

『厭！ 僕、コリーと

遊んでゐるの。』

『まあ——とお母さんはあきれたやうな顔をした——強情ね、どうして何時ものやうにはいと云はなのの。』

『だつて、厭なんだもの。』

とう／＼お母さんは本當に怒つて仕舞ふ。

『行つてらつしやいと云ふのに、解らないのですか。』

——そりや解つてゐる。でもかうなつたら行かれやしない——お母さんは庭へ降りて来て、子供の肩をつかんでゆすぶる。静夫君は泣出す。それでも行かうとは云はない。

『いやだ！ いやだ！』

コリーは途方にくれて、静夫君の足元でく／＼鼻をならしてゐる。お母さんは『強情な子』と云ひ乍らお尻をぽん／＼ぶつた。いやだ、行くものか、僕、銀



貨なんか欲しくないんだ——。

お母さんは終ひにあきれ返つて子供の顔を見てゐるばかりだ。

静夫君は泣きじやくりながら、臺所の方へ廻つて行く。尻つぽを垂れたコリーが後からお伴する。

——銀貨出すなんて、馬鹿！

でも、お母さんが怒つて困つたな——。静夫君はしやがんで、コリーの頭を撫でながら、お母さんの恐い顔を思ひ出す。

『どうして、あゝ強情なんでしよう』と座敷でお客様に話してゐるお母さんの聲が聞えて来る。

(大木三太郎)

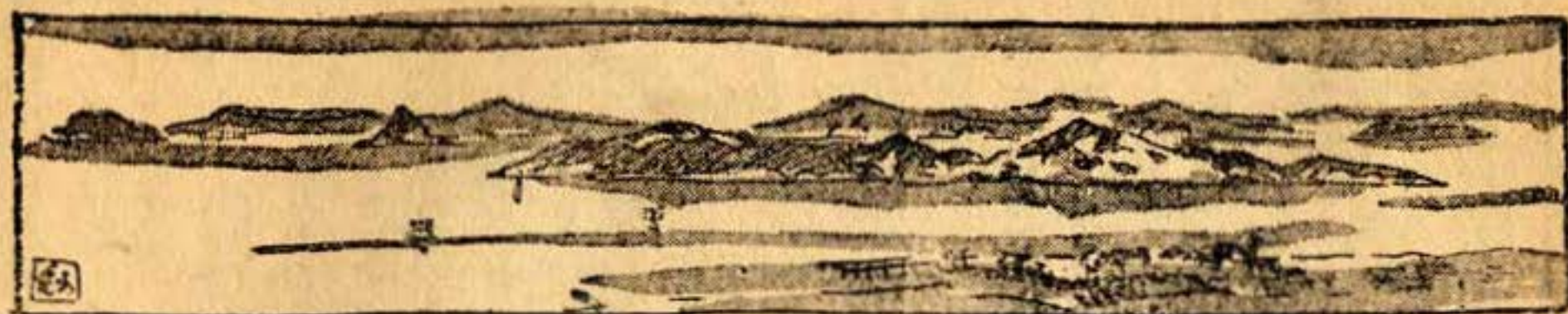
文學博士 矢吹慶輝著
金孝敬 朝鮮語譯

覺聖法然

定價 九十錢
送料 六錢

東京市芝區芝公園明照會館内

「覺聖法然」刊行會

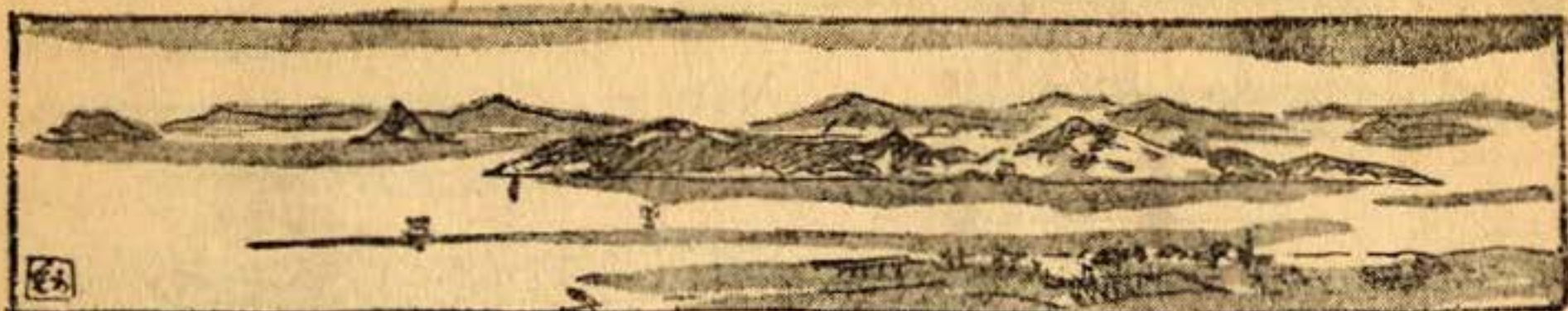


島の話

佐々木 久

いつも夏になると山の旅が賑ふやうになるが、海の旅はあまり盛んでない。これはふしぎな現象だと思つてゐる。人は避暑として海岸へよく行くが、海岸は暑くつて避暑にはならない。ほんとうに暑さを避けるなら一千米突以上の山がよい。それでなければ片田舎のお寺などを借りるのがよいと思つてゐる。さなくば島だ、殊にとび離れた島の生活がのんきでよい。僕はいつも夏になるとどこか飛び離れた島へ行つて見たいと思つてゐる。大島なぞも一部は騒々しいが、泉津の方へ行つてしまふととてもものんきでよい。八丈島もよし、小笠原島まで行つてもよし、新島でもよし、近いところにこんなものんびりとしたところがあるのに、何故人はあまり出掛けないのかふしぎである。尤も船でゆくには船酔いといふものがあるし、島は浪の音が強いし、蠅や蚤が多いからいやだといふ人もあるが、思ひきつて行つてしまふと、島の生活ほどブリミチーブで亦ロマンチックな味のするものはないといふことが解る。

風が強くて海の荒れる日は困るが、島の木深い家にゐれば大概は山にゐるのと同じである。但し夜は退屈だといふ人もあるが、それには島の酒でも飲んで、古老の話でも聴くことである。事實、島の生活は天象と密接であるから朝焼けでも夕焼けでも、天気でも雨でも甚しく變化がある。雨には全く退屈する。その代り上天氣の風の日は街や山には見られない味がある。暗夜のつゞく時は少々淋しいが、月夜がつゞくと島ほどいいものはないやうに思へ

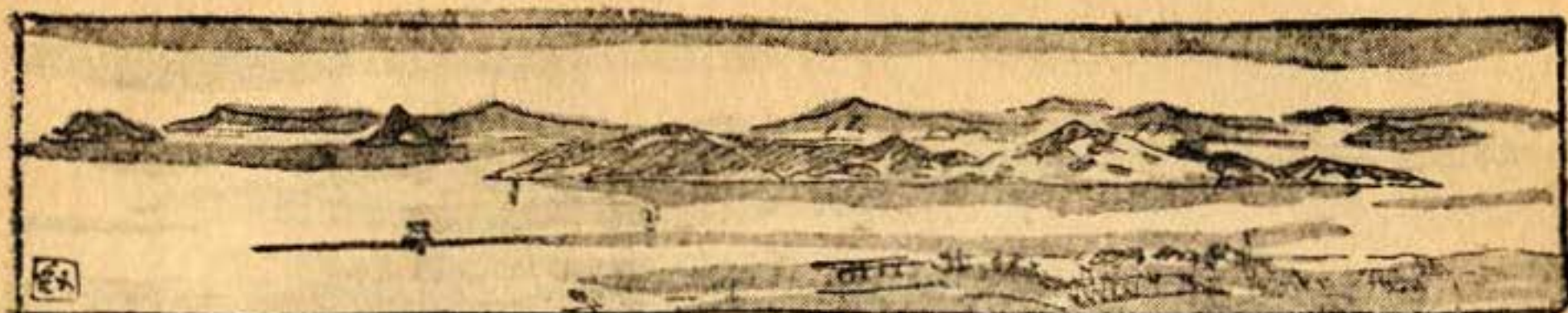


る。「いつも月夜に米のめし」と昔の百姓がいつた。全く「いつも月夜で島の夏」といふたいほどである。大島のすぐ傍にある利島へ行くと全く山の生活と同じである。島が兜のやうに海からそり立つてゐて、平らな海岸といふものがなく、いきなり山であるから、船が着くとハシケを山から綱で卸す、そして又下船した人に乗せもとのやうに山へ引上げる。そして坂路を登ると上の方に村があつて、漁をするより鰯を飼つてゐる。夏も鰯がよく啼いて霧が深く、夜明けなぞは一千米突の山のやうに涼しいのである。更によいのは新島の向ふにある式根島である。新島から漁船に乗せて貰ふと四十分ぐらいで着く。まるで地つゞきのやうな氣がするが、凡てが變つてくる。決して同じやうな島といふものはないからふしぎである。地味が變ると生活條件も變る。こゝは明治になつて拓かれただけあつて、まだ原始林の面影があるし、近く天然の動物園にしやうなんて話があるほどのんびりしてゐる。大島や利島や新島と違つて、とてつもない絶壁がないから、島の四方に海岸をもつてゐる。磯釣りなぞに出掛けるには持つて來いで南風が吹けば北の方で、東風が吹けば西の方へ風を避けて釣りが出来るのだから有難い。それに島の中央には樺の原始林があつて、その中の家々では全く浪の音が聞えない。夏は百合が咲いて青い葡萄が實つてゐる。

その南方の磯にちよつと他に類のないジナタ温泉といふのがある。のんびりした麥畑の中を通つて行くと、突如、二枚の扉を立つたやうな石の谿がある。そこを下りると石峽の間からすぐ海へつゞくところに温泉が湧いてゐる。温泉といつても全く無人境の野天の温泉で、石の絶壁の間から段々になつて海へつゞいてゐるのである。潮があげてくるとぬるくなつて、上の方が熱くなる。であるから潮時によつて、



式根島の海岸

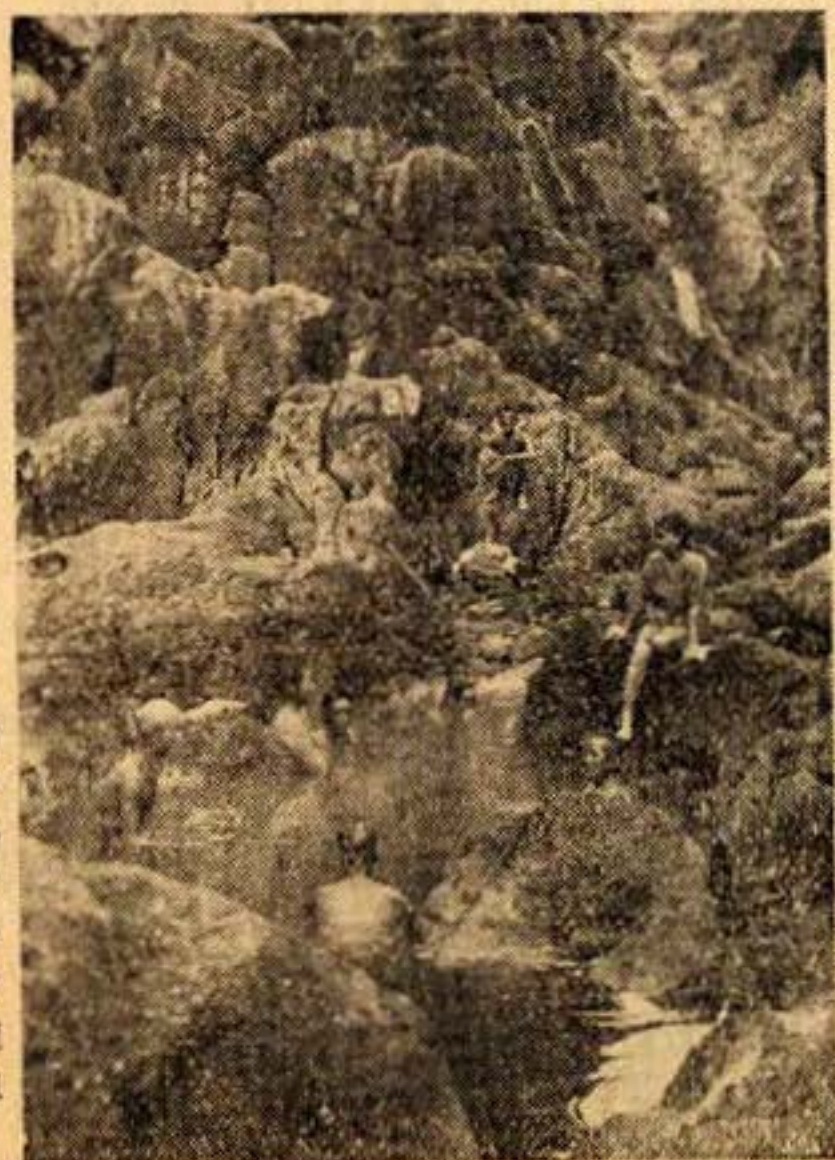


上の方か下の方か、適度のところへはいるやうになつてゐる。それも只天然の岩と岩の間であるし、脱衣場もないから、そこらへ着物をぬいで勝手にとび込むだけである。顔を洗つてぶるんとやると、沖の水平線が眉に迫つてくる。風のある日は白い怒濤が外の大岩を越してくる。温泉へはいつてから岩へよち登つて三間もある竿をふり廻してゐると鰐哥魚（方言、カシカメ）の一尺以上の奴が釣れる。何しろ大洋の潮とつゞいてゐて、大きな岩が二つばかり浪を防いでゐるばかりである。

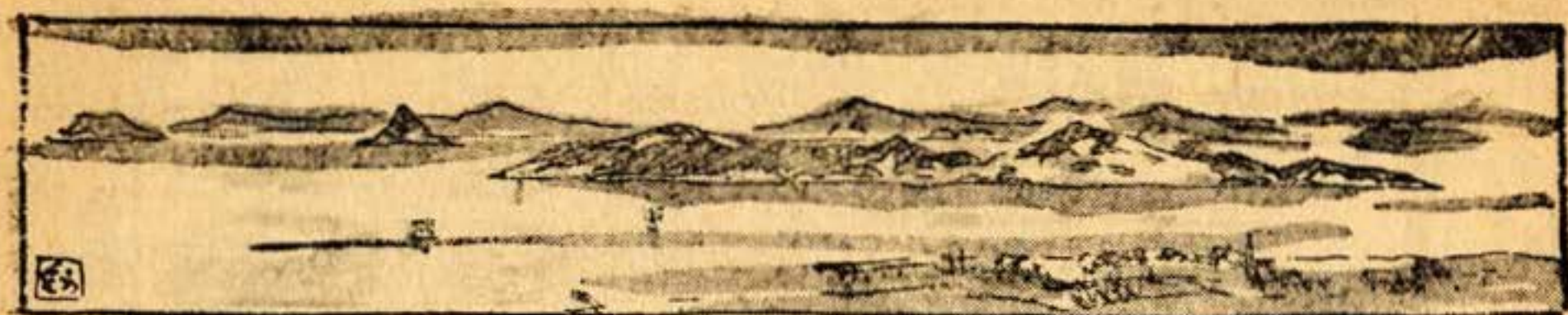
夕方、畑の仕事を終つた島の男女がそろ／＼と谿へ下りて来て、海に向つて温泉に浸る。島ぶしを唄ふ。髪の毛の長い娘が髪を洗つてゐる。そこへ十三日ぐらいの月が海からお化粧してあがつてくる時などは、全く原始的な美しい繪である。僕もかなり多くの温泉にはいつたことがあるが、このジナタ温泉とアルプスの鎗温泉は天下の奇観だと思つてゐる。鎗は海拔四千呎、こゝは海拔といふたいが〇呎、大洋の水平線と平均なのである。

それから海上一時間、西南に神津島がある。恐らく平安朝あたりの文化を入れた點では七島の内が一番古い島ではないかと思ふ。名からして神津島、天上山といふ二千呎の山があつて神寂びてゐる。大島、新島よりも小さいがなか／＼富める島で、酒も造つてゐるし、電燈もあるし、郵便局も小學校もお寺もある。それに口碑なぞも甚しく古いし、民謡はどうしても徳川以前のものである。節が悠長でどこやら雅味があつて、江戸時代よりもずっと古い京訛りといったものが傳はつてゐる。

この島でのんきに島芋をたべてゐるととても安上りで、都會に喘いてゐる人なぞが何故行かないのかふしぎである。尤も島では女がよく働くから、なまじの労働者なぞかなはない。島の女は二三十貫のものを平氣で頭へ乗せる。その故か猫背の女といふものは一人もゐない。みんなびんとし



式根島ジナタ温泉



よい體格をしてゐる。新島の女は天秤棒で大の男を二人ぐらい擔ぐ、子供を三四人も盥に入れて頭で運ぶ。この島では多西風が吹くと船着が悪くなるので、三浦灣といふ方へ船がつく、そうすると険しい坂路を十町も物を運搬するので、米一俵を頭へのせてそこを女が往來する。

以上は先づ近い島々の話であるが、西下して瀬戸内海から玄海方面、或は薩摩から臺灣へかけて五十有餘の島々なぞがあるのに、何故學生なぞ島巡りをやらないかふしぎである。瀬戸内の愛媛、廣島、山口各縣にはキャンプに適した公園のやうな島が無数にある。更に沖繩へ行くと無人島が澤山ある。尤も風土病サマラリヤの蚊があるのには困るが、今でも鬼界ヶ島から屋久島、奄美大島から徳島の島、それから琉球本土、宮古、八重山諸島となると、こんどは風俗言語の上から見てもエキゾチックになる。石垣島の向ふの與那國島などは今でも古への女護ヶ島の面影があるといふのは嘘ではない。僕は琉球本土からトガシキ島、アカ島といふのに行つたり、宮古から八重山へかけて臺灣まで歩いて見たが、島といふものがいかに共通の生活や苦しみも悲しみも同じやうにしてゐるかをなつかしく思つた。今年もし暇と金があつたら、僕は五島列島から壹岐對島の方へ行つて見たく思つてゐる。山の雑誌や案内はたくさんあるのに、島の案内はまるで知られてゐない。二三年前「島」といふ雑誌が出たが、やつぱり「山」ほど賣れないと見えて廢刊してしまつた。これは甚だ残念なことだと思ふ。島に生れてゐる僕等が島を知らないのは、ちよつと矛盾してゐる。殊に都會にゐる僕等は、せめて夏の休暇中でものんきな島へでも行つて、古い生活を探ねたり、大きい自然に打つかつて、思ひきり思慮を深め、智を鋭くし、又充分健康をとり入れて、太陽に焦げて來たいと思ふ。そんな意味から山もよし野もよしだが、島の研究、島の生活もあつてよい。もつと各方面の人や學生なぞが、どんく島へ行つて、せめて夏だけでも明朗な純日本の原始生活を見習ふのも悪くはなからうと思ふ。

柴の戸にあけくれかゝるしら雲を

いつむらさきの色にみなさん

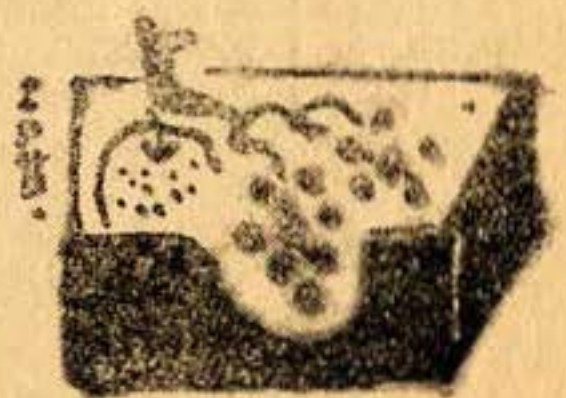
(法然上人)

法然上人をめぐる人々 (三)

西へ向く騎士

—— 熊谷入道蓮生房 ——

鶴田湛泉



争亂の現し世

熊谷次郎直實は、浮世のことは、フツツリと、いま、思ひ切つてしまつた。想へば、永い夢ではあつた。悲しみも、歡ばしさも、そのひと巻に收められた繪巻ではあつた。大きな力と力との争亂の、つい世に流され果てた泡沫の生ではあつた。

その、浮きつ沈みつの半生の想起に、直實はしばし眼を閉ぢて了ふ。臉にうつる此の世は、ただ淺間しい人間の利慾と鬭争との血みどろな姿でしかなかつた。

一 生ひたちの記

—— 彼は、桓武帝十一代の後裔 平次郎大夫直貞を父とし、成木太夫久下權守の妹を母として、同族相食む亂濁の世に悲運な子と

して生れた。父は、事あつて、子の太郎直正俊利共々武州熊谷に配流せられ、氏を熊谷と改めたが、やがての後、平忠盛のため殺害せられをはつた。時に、保延五年、直實二歳。東西も分かぬこの幼な兒は、父兄の流刑に取殘されて、權守の手に養育せられて居り、すんでに害せらるべき處を、母方の叔父たち何れも平家の一族故に、清盛の弟、經盛に助命を乞ふて、血統だけは取止めることを得た。若くして既に豪力と武勇の程を知られたらしく、熊を取りひし、いだ話なども傳へられてゐる。

二條帝平治元年の所謂「平治の亂」には、直實二十二歳で、義朝の嫡子、鎌倉悪源太義平の手に屬して、郁芳門を守り、又、悪右衛門督信賴の一黨待賢門に破ると見るや、直ちに馳せ參じて重盛の軍を追ひ散らした、彼の惡源太を初めとし、鎌田兵衛、佐々木源三、三浦荒次郎、齋藤實盛、平山武者所季重、金子十郎等々の、世にい

ふ所の郁芳門の十七騎の一員として、あまねく武名を擧げた。その悪源太も、後には都に誅せられ、直實も暫し隠忍の日を送つたが、久下權守直光らの侮蔑に耐へかね、走つて新中納言知盛卿に仕へる身となり、高倉帝の治承四年八月二十三日の石橋山の合戦には、四十三歳で東へ下つて、大庭景親以下平家被官の輩三千餘騎の精兵中の隨一として頼朝の軍を破つたのであつたが、直情の彼には故主の弟頼朝の破れ去る姿は直視出来なかつたであらう、多年仕官の知盛の恩義は此の一戦で果した譯だから、再び熊谷の住人となつて頼朝の御家人に加はつた。そして早くも同年十一月四日の常陸の佐竹冠者秀義の討伐には、舊友平山季重と共に先陣をかけ多くの首級を擧げて殊功を顯はし、その功に依て、翌壽永元年六月五日、父の舊領の所知を許され、直光の押領は停止せられた。



熊谷直實畫像

二 一の谷嘆きの名笛

それから、平家にとつて悲しい没落の、直實にとつても心つらい、安徳帝元暦元年二月七日一の谷の合戦のことが思ひ出される。木曾義仲を討つ宇治川の戦ひも心進まぬものであつたが「日本一の剛の者よ」と頼朝から名譽な讃辭をあびせかけられた彼として、天晴な戦功を立てたかつたが武運がなかつた。十六歳の我が子小次郎直家と共に橋桁を渡り、敵の郎等共多く射落したのであつたが、先陣は佐々木高綱のためしてやられてしまつた。たゞ若冠の小次郎が、平山季重、佐々木定綱、澁谷重助の三者に負けじと、父の身を案じて、つき従つた純情には泣かされるものがあつた。それに比すると、一の谷の戦ひは武士のつらさの限りでしかなかつた。

もつとも、平山季重らと一の坂戸口に抜がけの先陣を爭つた時は、派手であつた。「一の谷の先陣ぞ。日本第一の剛の者ぞ。」と叫んで、小次郎と共に互にかばひ合ひ乍ら、漸くのことに誘ひ出された越中次郎兵衛尉盛嗣、悪七兵衛景清ら逸雄の二十三騎と闘つた時よ室山水島の軍に高名な流石の越中の次郎兵衛めも畏れて組まなかつた許りか、苛つた悪七兵衛めが既に組まんずとしたものを無理に制して「あれ程のふて癪」にかかつて死ぬのは馬鹿々々しいなんぞと申しさる居つた。それにしても小次郎めが小脇を射られて手負つたには、我が身のことよりも吃驚させられたが……。



それを思ふと、我が手に討たれ、懸て送り返された敦盛殿の頸、遺物を御覽じられた修理大夫經盛卿の御嘆きの程も目に映るやうだ。御覺悟の程の御返書は賜つたが……。幼い我が身を助けられ参らせた恩人たる經盛卿の若殿を、我が手につけねばならなかつた我が身の不運。何是なればあの時武功を争つてあの殿を呼び返らせ奉つたことぞ。それを小次郎と同年といふ若冠で、盛嗣景清さへも畏れ避けた我が名乗り名に、憶せもせず、心を決して駒を返した

見事な面魂。此の軍陣中に「小枝笛」とかいふ名だたる漢竹の節切を腰にした風流。何たる、情なの戰場ぞ。恩愛に泣き乍ら背かねばならぬとは、如何に武門の習とこそ申せ！……

——直實は、いまでもそれを想ふとただ涙を拭ふのみであつた。

三 戦塵收まりて

その時から、浮世には愛憎がつきた。戦塵の垢を落した彼は、もとより平家の血族ゆへに戦功に比して何程の恩賞もなかつたこと等

それ程に口惜しくもない。義經にさへ何程の酬ゆることなく不和となれば、之を討つさへ憚らぬ頼朝ではないか。しかし、今度の久下直光との領境争に就ての愈々この擧句の昨冬建久三年十一月廿五日早旦の御前對決の時の口惜しさ。五十五年剛直を以て通つた直實が、文弱の直光に比して口不手なのは當然ではないか。さるを口前のみ信ぜられうとする將軍家には、此の永い直實の血縁に反いての忠誠を、抑も何と御覽じらるるにや「日本第一の剛の者よ」なぞと宣はせられしは口先許りの一時好がらせであつたのか。「ええい、浮世の事は兼て思ひ切つたわれらだ。如何にもなれ」と、自ら鬚を切りその儘營中より奔つて惹き止めらるる儘に伊豆の走湯山に籠つた。驚いた將軍家の使が八方に飛んで彼の遁世を止めやうとした爲め、住僧の専光房が引止むるに従つて上洛こそ思ひ止まつて、いまかやうに、武州熊谷に引退して蟄居はすれ、専光房の手から遁世の所存を誌した書札を殿に送進せしめた如くに一時の鬱憤ゆへの出家ではない。境界争ひのことも處置はついたれ、かゝることと思ひ止まるべき仔細ではないのだ。無慙や、泣いて斬らねばならなかつた命の親の息敦盛殿の菩提のためでもあり、名譽と利慾の爲には同族相争つて顧みぬ此の浮世に生きる我が身の救はれようためでもあるのだ。それにしても走湯山に都より下向した尼公（妙眞尼なるべし）の話では法然房の教が鎌原の火のやうに人達の心に擴つて、その庵は救ひを求むる人々でいつも一杯だといふことだ。何にしても

やはり都へ上りたいものだ。そうだ、今宵にも出發しやう。昨臘ここに蟄居したのは昨日のやうなのに、もう三月にもなつてしまつた。……

西へ向く騎士

一 春たけなは

走湯山から箱根路にかけて、春は既に深かつた。路には野莓、薔薇の花が咲いて、蓮華草や馬酔木の色とりも美しくかつた。

その一日、走湯山の僧房の庭に咲く沈丁花の香りに心残して、曉闇の春の山路を、逸る駒足を制しつつ、西へ向つて駆けさせてゆく一騎があつた。入道の姿形ながら、律律しい眉宇には思ひつめた一徹の氣性が迸り、眼の色にも鬼神も拉ぐ勇氣の程がうかがはれた。駒は小丈ながら太く逞しい栗毛の逸物。これぞ權太栗毛てふ愛馬に跨る熊谷直實の都へ急ぐ旅姿とは見受けられた。

まことに、それから暫くした日にちの後、駒を門前につないで、吉水の庵に法然房を訪れたのは、正しく彼であつた。都に上つて、先づ澄憲や聖覺を訪うて後生菩提の事を問ふた彼は、ここでも自分の行く先が吉水の御坊の外にないことを教へられたのであつた。

いま、引見を許されて、法然上人の前に固く畏つて聴問する、大柄な此の坂東の荒入道は、何としたことか、急に大聲を擧げて泣

き出したではないか。驚かれた上人が、やゝあつて、「何事に泣き給ふぞ」とたゞすと、

「手足をも切り、命をも捨ててこそ、後生は助からんずるところ、承るだらうと思つてましたところ、ただ念佛さへ申せば往生はするぞと、容易く仰せを伺つて、あまりにうれしくて、なかれまする。」

と言つて、又一しきり、大の男が嗚咽にむせぶのであつた。事實、直實は、手足も切り命も捨てても厭はぬつもりであつた。傳へ聞く文覺の荒行程にても、もとより一筋に思ひつめた今、何程の苦みとも思へなかつた。否、救が許されねば所詮は甲斐のない命、自ら斷ち切つてもとさへ思ひ込んで、澄憲の庵の庭石で小刀を砌いでたづさへた程であつたのだ。それが、飽氣ない程やすやすと解決せられてしまつた、張りつめた心が一時にせきを切つて歡ばしさを泣いたのも無理はない。

直實の前に、今や、漸く春は和かであつた。見渡せば、心にくい程、春たけなはの都の風光であつた。戰場に於て死生の嘆かはしさの中を往來したよりも、何と今の生死を超越出來た心境であらう。身を物の具に打ちかためて功名を互に争つた花々しさよりも、之はまた紙衣の僧形の何と落付のある歡喜の生活ではないか。生くるも死ぬるも、阿彌陀ほとけに任せつる今は——。

いにしへの鎧にまさる紙衣は

風のいる矢もとをらざりけり

約束の念佛は申して候よ

やらうやらじは彌陀のはからひ

彼は、その後高野の知識院にのぼつた時、いつか、かやうに口吟むでもみるのだつた。

二 西に背かず

かうして建久四年三月、五十六歳で、直實は念佛門に入り一向専修の徒輩となつて久しく上人に仕へたてまつつた。上人の出歩きにも、よくお供して藤乍ら守護の誠を盡した。

ある時はかやうなこともあつた。上人が月輪殿に参向せられた折、入道も御供して、庭の沓脱に控へてあつたが、御談儀の聲もかすかに聞きとれない。と、突然、此の入道は大聲に獨語したのであつた。

「あゝあ、穢土位くやしい處はないぞ。極樂にはこんな差別はあるまいものを。談義の御聲も聞えるどころか。」

無遠慮なこの言葉に、兼實公も驚いて、その何人かを上人に問ひ、心よく伺候を許されたのであつたが、飽くまで不敵な彼は、一言の色題にも及ばず、ムズと許り座をしめて聴聞したといふ。

上洛して後、暫くは何處に住つたものか、明らかではない。恐らくは吉水の庵に水を汲み薪を拾つたものかも知れぬ。東國へも時折

下つてゐたらしい。分る限りの入門後の略譜を記せば、――

建久六年八月十日（五八歳）、鎌倉下著、將軍御前に厭欣の旨趣を申し、兵法の用意、干戈の故實等を語り、聞く者をして感歎せしめ、即日武州に下向。翌七年（又は八年？）二月、吉水歸參、同九年三月、西郊栗生野に草庵を結んで閑居。建仁二年の頃（六五歳）には、また熊谷に在留。元久元年五月頃（六七歳）には、鳥羽に暫住。翌二年夏、西山の草庵を幸阿彌陀佛に付屬して歸郷。

かやうに、往來しばしであつたが、彼の一團な性格と信仰の程が、此の間に前代未聞の語り草を殘すに至つてゐる。それは彼が行住座臥ともに、固く、不背西方の信念を守り、戀西と自ら稱してゐたことから來てゐる。

彼が關東下向の折は、鞍を逆さに置かせて後向に逆馬に乗り、口には常に六字の名號を稱へつつ、馬の口を曳せて下つたのであつた。到る處の驛路驛路の佳人、旅人どもの飽氣にとられた見送り顔、そして喧しい噂話のさまも、手にとる如く想はれるではないか。

淨土にも豪の者とや沙汰あらん

西にむかひてうしろ見せねば

と、彼も一首を詠んだ。

西方を欣ふ至烈な信火の送りだけが、そこにはあつた。關東武者の生一本な行者の心根だけがあつた。西に向く騎士！これぞ永

く彼の頭上に輝くべき稱呼ではあつた。

三 淨土を欣ぶもの

かやうにして、彼の生活は、今や、一定の方向を得た。西方の淨土こそが、彼の憧憬の的となつた。

永年の聴聞と専修とに依り、信心も決定して、淨土往生の願と確心は愈々強くなつて來た。「やらうやらじは彌陀のはからひ」とは詠んだが、今ではどうしてもそれ丈では満足出來なかつた。

元久元年五月十三日といへば、直實は六十七歳。京の鳥羽に暫し留つて、上品上生の往生の願偈を立てた。その願偈の文中には蓮生上品上生にむまれん。さらぬ程ならば、下八品にはむまるまじ。」と記し、また若し蓮生が迎接せられぬやうなら、佛の誓願もみな破れて妄語の罪を得給ふならん、とすら言つてゐる。そして此の願もし容れらるべくんば示現を給へと願つて、しばしば夢に上品上生の有様を感じた。或時なども、眩ゆいばかりの金色の一きは望の長い蓮花の上に、唯一人のぼつてふはりと端座すると見て夢覺めた事もあつた。と、その夢の記に記してゐる。

このやうにして、上人の門下に加つて、法力房と稱した初めには、曲つた事の嫌ひな性格の儘に、よく犯人を捕へては、力にまかせて桎梏をはめたり、からき綱目にあはせたりしたものであつたが、いまは、かやうに種々の靈感に充ちた無碍の淨土願望者となり

はてた。先の西に背かざるものとしての戀西は、いまや、蓮の夢に感涙を催す蓮生房と老熟した。そして、ただ此の上は、臨終に當つて端相を現じて淨土信仰の貴さを人々に示させ給へと希ふのみであつた。

その頃から、しきりと、往生の期の近いことを覺えた彼は、そこで、元久二年夏、栗生野の草庵を幸阿に付興して、師の上人より授かつた迎接の彌陀像を護持して武州へ下つた。

建永元年と年更まつて、益々直實は死期を確信するやうになつた。いまは、遺誡も記し、上人へも此の程からの確信の程を書狀してその御教誡をも頂き、心遣す何ものもなかつた。その八月、蓮生は「明年二月八日、往生すべし。申す所もし不審あらん人は、來つて見るべし。」と、熊谷から半里ほど離れた村岡の市に、高札を出さしめた。

いよいよ、當日。遠近から人々は老いも若きも集つて、末代までの語り草ぞと、熊谷の草庵さして群集した。蓮生は未明に沐浴して、禮盤上に上つて高聲念佛して絶えなかつたが、やがて、ハタと念佛を止めて、眼を見開いた。スハコそ奇瑞！と人々は固唾をのんだが、蓮生は聲も涼しく「今日の往生は延ばした。來る九月四日、必ず本意を遂げよう。その日にやつて來るやうに。」と申した。人々の中には蔑り歸るものもあつたが、直實は心中深く期することがあつて、家人を言ひなだめた。彼の歸郷する前年あたりより、

上人の身邊も次第に騒然たるものがあつた。念佛停止の運動も南都北嶺の手で行はれ、七箇條の御制文を書かれたこともあつた。昨、後鳥羽院熊野臨幸の後、御留守の女官ら出家の事があつて、還幸の後住蓮安樂二人は逆鱗にふれて捕へられたと聞く。上人の身の末も案じられるであらう……。

この事あつた翌日、都では安樂は六條河原に斬首され、弟子の科に依て上人も、二月廿八日土佐遠流と定つたのである。しかし上人は流刑を天恩と拜謝して配所を化益され、やがてその八月勅免の宣旨は下つた。直實も今は心安く己れが身の終りを見つむればよかつた。

愈々、再び豫告の日となつた。八月の末、聊か病んだが、いまは身心とも安穩に何のわだかまりも見えなかつた。人々は亦た群集した。九月四日後夜、蓮生は沐浴して凡ての用意を調へた。やがて巳尅、上人付與の來迎像を飾つて、端座合掌し、稱名裡に種々の瑞相を示しつつ、大往生を遂げた。事の次第は、遺言に依て聖覺法印まで、直ちに知らせられた。

まことに、それは、浮世のことは思ひ定めた坂東武者の、淨土を望んだ一圖の健けさであつた。上人も、常に信心堅固の行人の證には、彼を思ひ出されて、「坂東の阿彌陀ほとけ」と歎ぜられたといふ。その往生の様子も、やがて、攝津の勝尾寺で知られ、深く有難がられたといふことである。

(註) 法然上人諸傳をもととし、源平盛衰記、平家物語、平治物語、東鑑、西山光明寺縁起その他を斟酌して補つた。冗らに長くして「一谷嫩軍記」などの面白味を眞似得なかつたことを詫びる。

しんぼうが大事

ある海岸町に氣が短く、慌て者で、その上氣一本の若者があつた。長い間海に入つて沈香を採集し漸くにして一車ばかり集めこれを市場に賣り出してみたが、どうしたものか賣れない、客が付かない。

その隣りの炭屋は毎日客が來、面白いやうによく賣れた。若者はそれを見てゐると腹が立ち、炭屋の子供までが憎らしくなつた。

いつそ骨折つてとつた沈香を炭にして賣つてみたら、さう思ひ付いた彼は皆焼いて炭にしてしまつた。そして賣り出した矢張また、く間に賣れてしまつた。

然しその價は一片の沈香にも及ばなかつた。そこへ丁度隣國の金持から、全部買ひとらうと云ふ注文があつた。が既に後の祭りであつた。

若者はいまにして自分の愚を知つたと云ふ。



日本精神の基礎

眞 野 正 順

(一)

このごろの我國社會の動向は、これを一括して言ふならば、「日本精神」の時代と名けることが出來やう。あの滿洲事變以來勃興して來た「日本本來の姿に還れ」といふ主張は、從來の我々の浮ついた生活に對して確かに意味深い警策であり、その主張の中には確かに傾聴せねばならぬ多くの點を含んでゐると思ふ。

從來のやうに、たゞ西洋文化の後に追隨ばかりしてゐる事は確かに誤つてもゐたし、また危険でもあつた。いま夫れを改めて、我が三千年の光輝ある歴史を尊重し、其中の粹をぬき精を集めて、こゝに新らたに輝かしい東洋獨目の文化を建設し、さうして更には夫れによつて全世界までも指導して行かうとすることは、確かに我々の輝かしい責任であるに相違ない。

然しながら、それならば、この「日本精神」といふものは一體どう云ふものなのであらうか。

從來の西洋追隨を止めて、いま改めて夫れに歸ると云ふならば、それは如何なる意味に於て、西洋のそれとその生活態度を異にしてゐるのであるか。また將來それを以て西洋文化に代つて世界を指導して行かうと云ふのならば、それは、どういふ勝れた價値を歐米其他の精神に對して持つてゐるのか。かう云ふことは、「日本精神」を主張する限り、先づ鮮明になつてをらねばならぬ筈である。然るにかゝる事は、既にこの辭が高まつ來てから可成の時日を経てゐるにも係らず、どうも未だ明かになつてゐないやうである。

論をなす者曰く「日本民族は、本來、清明にして直く、人情篤くして快活であり、義に殺くして然も驚くべき同化力に富める民族である。この勝れた特質が、將來より善く發揮されねばならぬ」と。

まことに同感である。また曰く「わが國は開闢以來、世界に比類なき皇室を中心として上下一體一分の隙もなき麗はしき社會を形づくつてゐる。此事から總ゆる將來の社會問題は解決されてゆかねばならぬ」と。また同感である。或は復た「我國は古來東洋の全文化を悉くよく吸収し理解し保存して來た。然も現代に於て、先進歐米の文化を最もよく吸収し理解し運用してをること、我國の右に出づる國はない。このやうに古今東西に渉る人類全文化を悉く一國に集注してゐる民族こそ、やがて次期の新世界文化を創造するものでなければならぬ」と。

かゝる主張はことごとく同感である。然しながら、靜かに考へて見るに、これ等のこと、暫らくこと皇室に于る事を除いて云ふならば、むしろそれ等はこの民族の素質を云ひ、若しくは歴史的なる狀況を云つてをるに過ぎないではないか。勿論、新たなる人類文化を創造するほどの民族は、その素質ならびに歴史的狀況に於て他に勝れてをることは、資格として必要な條件であらう。然しながら、たゞ素質や過去現在の狀況だけが、如何に勝れてゐたとしても、それだけでは、新たなる文化を世界に向つてひらくことは出来ない。なぜならば、かゝる素質や狀況は新文化創始のための、云はゞ、素材たるに過ぎないからである。新たに文化がひらかれる爲めに大切なものは、新たにして且つより眞實なる生活原理である。かの素材の

如きものは、たゞそれだけならば、それを運用してゆく將來の思想如何によつては、歪められ變化せしめられて終ふ恐れがある。現にいま我國に於て、日本精神の「回復」の必要が聲高く叫ばれてゐるのは、嘗ての其輝かしい民族の素質が、或種の西洋思想によつて、或程度まで汚濁され歪曲されて來たことが感ぜられて來たからではないか。單なる素質や歴史的狀況だけでは駄目である。それよりも大切なのはかゝる素材を愈々磨き上げ愈々立派な姿に組み上げてゆく生活原理である。

この事は、しばらく眼を轉じて、わが民族のやがて伸び行くべき其行先に、思ひを潜めるならば更によく領かれて來ることであらう。將來わが同胞の努力いよく積んで實質的に諸民族の指導となつて來たとき、たゞ「我れは優秀なる素質と歴史を持てる民族なり」として是等に臨んでをればそれで済むのであらうか。かゝることは寧ろ暴者の態度である。眞によく彼等の信服する指導者となり得るためには、我々の掲ぐるところの生活原理が、萬人自ら是に伏すべき公明なる眞理にして、然も、それに隨うて生きる時には、彼れもまた我れと同じ域に達し得るところのものでなければならぬ。光輝あるわが民族の歴史を尊重するのはよい。然しながら、たゞ夫れの善き歴史的經過の結果のみに執着してゐるだけでは駄目である。さうでなくて、寧ろ、かゝる麗しき結實を今日までに作り出して來た

ところの輝ける生活原理を歴史の中から掘り出して來ねばならぬ。そして夫れを更によく磨き上げる事によつて一方いよく我民族の伸び行く方向を誤りなからしむると共に、他方、それが眞理によつて他民族の人々をも心より信服せしめ、之れを導いて我と共に新たな文化の中の人とならせて行くのでなければならぬ。

即ち、其の「日本精神」は單にそれが、日本にあつた精神でなく、日本の歴史に内在してそれを導いて來たところの——萬民悉くこれに従ふべきところの——眞實なる公道でなければならぬ。

それならば、かゝる我民族が眞に以て依所とすべき生活原理は如何にして見出すことが出来るか。その爲には、人は先づ靜かにこの東洋に古くから持存する「人生の見方」に思ひを潜め、それを味ひ返して見る事が必要であらう。なぜならば、我國の精神は、むしろ東洋古來の精神の集りから結晶したものと信ぜられるからである。日本精神の基調と其意義を知るためには、先づ思ひをこゝにひそめねばならぬ。

さうして、それがどんな意味に於て西洋の人生の見方と異り、またどんな勝れた價值をもつてゐるかを知ることが先づ大切である。

(二)

よく、西洋は物質文明に勝れ、東洋は精神文化に勝れると云ふ。

これは事實であらう。西洋の物質文明が我々に勝れてゐたからこそ明治以來我國は一生懸命になつて、これを學んでその勝れたものを取返すに務めて來たのである。

それならば、何故西洋は物質文明にあのやうな勝れた進歩をしたのであらうか。考へて見ると、彼等は、この外界の事物の眞相をよく見たからであると言へやう。外界の事物の眞相をよく見たからこそ、眞によくそれを利用して人間の使用に便し、立派な文明を形づくる事が出來たのである。あの西洋の誇とする科學がその代表である。それならば、科學はどうして事物の眞相を見るに成功したのかと、考へて見ると、それは見る人間の感情や要求を抜きにして、事物其物に就てありのままに見極めたからである。たとへば、こゝに雷が鳴るとする。その音を聞いて原始人はまづ恐れる。そして恐ろしさの餘り雲の中に鬼がゐる太鼓を叩いてゐるのだと想像して之に祈る。然るに、科學は、かやうな恐ろしさの感情などを打捨て雷鳴と云ふ事實そのものに就て忠實に追及し研究してゆく。さうして遂に、電氣と云ふやうなものに到達して避雷針を立てる。つまり一方は自分の主觀的感情によつて物を歪めて見る。他方は、主觀を捨て、たゞ事物そのものについて恐れず追及して正しく其物を見る。この事が勝れてをつた爲に、西洋人は、よく事物の眞相を見極め、これを利用してあの立派な物質文明を作り出したのである。



『お父さん！ 早くお家へ歸ろうよ！』

然し、このやうに外的事物に就ては、その真相を見る事に成功した西洋は、今度は内に省みて、この自己そのものを見る事に、やはり同様な態度を維持して行つたかと云ふとこれは遂に出来ないで失敗してゐる。外物を見るにあれほど冷静に科學的であつた西洋も、

自己そのものを見るに當つては全く自己の感情に囚はれ非科學的になつてゐる。

それならば何故西洋では自己の真相を掴む事が出来なかつたかと云ふと、人間が自ら人間そのものの真相を見ると云ふことは、仲々辛い事だからである。事實、人生をありのまゝに偽りなく見るならばこの自己と云ふものは何處とも知れぬところから、フツとこの生命をうけ、やがてまた五十年の後に、フツと消え去つてゆく。何處から來たかと質ねても見ても、そこに茫漠

たる闇がひろがつてゐるばかり、それなら死んだら何處に行くのかと質ねて見ても、そこに黒暗々たる深淵が口をあけてゐるばかりである。不可知なる闇から出てまた不可知なる闇の中に入つてゆく。人の一生は、たとへば暗空の上に浮んだ絨月の瞬きの如きものである。何時如何なる處で自分は死に中に吞まれてしまふかも知れない。極めて危うい存在である。

これは私共人間存在の疑ふべからざる事實であるが、思つて見るだけでも忌な氣がして來る。こんな事を考へれば、人生のすべては忽ち味氣なく灰色になつてしまふ。それ故、人はなるだけ、それを考へないやうにしてゐる。即ち自己の真相をなるだけ見ないやうにしてゐる。自分の后と前に迫る黒暗々たる深淵は見ないやうにわざとそれを覆ひ隠し、わざと忘れて生きてゐる。つまり、あの絨月の兩端の闇に接してゐるところは覆ひ隠して、たゞ中央の輝いた處ばかり残してそこだけ眺めてゐるやうなもの、それが普通我々の人生觀である。

然し、このやうに人生を其全體の真相に於て見ずして、たゞこゝに現に輝いてゐる生命だけに限つて眺めてゐると、人生とは、たゞこの自己を中心とした生命慾を出来るだけ満足さしてゆけばよいのだ、と云ふ考へとなる。自分の周圍のものはすべて、たゞこの自分の生命慾を満足さしてゆくために利用し驅使してゆくに限る。さう

してこの短い生命の間に出来るだけの慾望を満足させるのが肝要だと云ふやうな考へとなつて来る。この自己中心の人生觀、それは、今日我々の普通に懷くところのものであるが、それはやがて、同じく人間の眞相を見るに怯懦なりしかの西洋の人々の陥ちて行つた人生觀でもあつた。

されば、彼等の信ずる處によると、萬物は悉くたゞ人間の使用の爲にのみ存してをる。それを利用し驅使する事によつて出來得るかぎり自己の慾望を満足さしてゆくことそれが人間の權利でもありまた人生の意義でもある。かゝる考方は、既に古く基督教の中に胚胎し、近く盛んに科學によつて自然力を利用しつゝある事の中にも横はつておる。

然しこのやうに、自己の感情によつて蔽ひ隠すところのある人生の見方が、眞實なものでないことは云ふ迄もない。従て、かゝる眞實ならざるものゝ上に建てられた生活原理がまた不完全でありやがて破綻を増し來ることはまた自然であらう。さしものに莊麗なる近代西洋文化の危機は既にその本土に於て告げられてをるのであるが、靜かに顧みて見るならば、近世文化社會の上に頻りに惹起されつゝあるところの悲劇の根は、多くまたかゝる自我中心の人生觀から醸し出されてゐるのが確められるのである。

是れに反して、古來東洋の思索家は、むしろこの思ふも陰鬱なる

人間の眞相に勇敢に正面してゆく。さうして、その時感ぜられる氣持や感情に拘泥せず、眞正面から人生の眞相そのものに直面し、惻然と事なく忠實にこれを追及し、深くその眞相に徹底することに依つて、眞實動きなき生活原理を樹立し來つんとする。云はゞ東洋は人生に對しては甚だ科學的であつたのである。

こゝに興味ある對象が現はれる。西洋は外物に就てはよく科學的であり得たのであるが、人生に對しては、むしろ非科學的たるを免れなかつた。是に反して、東洋は古來、外物に對しては、非科學的なる域を脱し難かつたが、人間其物を見るに就ては極めて科學的にその眞實相を見た。さうしてこゝにこそ、東洋が精神文化に於て遙かに西洋に優越せる原因が横はつてゐたのである。

(三)

それならば、このやうに、人生をその偽りなき眞實相に於て見更にそれに深く徹底して行つたならば、どう云ふ原理が呼び出されてくるであらうか。

まづ人は、自分の存在は、かの暗室にかゝる纖月の如き危き存在に過ぎぬことを、はつきりと見極めるならば、この危き存在の中に形づくつてゐる自我と云ふものを中心として、生きてゆく事が眞實の生活でない事を次第に悟つて來るであらう。自我を中心とすると



『どうしたの？ 轡なんぞはめて？』
『だって仕方がないよ、今アイス最中を二
つ買ひにやるところだもの！』

き、人はたゞ果てしなき欲望と絶えざる不安の中にのみ生きねばならぬ。然しながら、かく惱みつゝあるのは實は假りなるものを永久とし、眞ならぬものを眞としてゐる故である。眞に生きるためにはかゝる危くしてかつ假のものたる「我れ」を捨て、たゞ生命そのものに於て生きねばならぬ。ほんとうには、たゞこゝに輝ける生命の流れのみがあるだけであつて「我」はないのである。

人はこの假のものなる「我」を守るために却て日々の生命を浪費してゐる。然し、本當のものは「我」でなくて、この生ける生命である。

この生命を本當によく生かすこと、そこに本當の喜びがありまたかつ、それが本當の人生の目的なのである。

それならば、この

やうに我を捨て、たゞ生命そのものに成り切る時には、どう云ふ事になつて来るか。

この時、人は、先づ第一にわが生命は自己なるものが支へてゐるのではなく、實は世間の様々な力が寄り集まつて支へてゐたのである事に氣がついて来るであらう。佛陀はこれを縁起と名づけられた。様々の力によつて縁起起つてゐるからである。さうだとしたならば、我を眞に生かす道は、この「我」なるものを中心として一切のものをそれに引つけてゆくとその欲望に驅られて行く事の中には存しない。むしろ、さまざまの縁の上にこの生命を生かしてゆく事になければならぬ。自己は無い。有るものはこの自己を圍んでゐる様々の縁である。されば、一步進んで云へば、むしろ、かゝる様々の縁に成り切りそれを生かす事こそ、眞に生きる道でなければならぬ。

この事は第二に、己れは常にこの自己に死する事によつて却てよく生かると云ふ事に氣づかされる。人が本當に生きた時は常に我を忘れる。事業の難關に際して、これを切り破つてゆく時には人は一切をこれに賭け一切を忘れて、裸一貫の心地となして無二無三に進んでゆく、その我を空に去つた一心白熱の時に、俄然生命のすばらしい火花は開けて難關は見事に切りひらかれてゆく。大事の前には先づ心を静めて無念無想とならねばならぬと云ふ事もこの消息を傳

へたものに過ぎぬ。我を忘し去つてたゞ生命の一念になつた時、人はその全力を現はす事が出来る。くどくしく説くにも及ぶまい。古人は既に「己れを守るものは却て死し、己れを捨つるものは却て生く」と道破せられてゐる。眞實の生命は常にこの「死んで生きる」道にあることは、何程か深い人生経験をした者には、たゞちにうなづかれる事であらう。

(四)

かゝる自己を忘し去つて、生命そのもの、純なる姿に還り、その純なる本來のまゝに生きてゆく道。それは東洋古來の多くの思索と鍛錬とが積重ねられて次第に磨き出されて來たものであつて、特に佛教の關與するところが多い。あの無我を説き、無常を説き、縁起を説く、その言葉の指してゐるところは、常にこの眞實生命の道に外ならなかつた。假のかたちに過ぎぬところの「我」を捨て、眞の生命の姿なる縁起の中に己れを見出し、然も、世の常あるものなき流動を諦観して絶えず過去に死して新らしく飛躍して止まぬ。かゝる生命の道を佛教はひたすら説いて止まぬのである。

さうして、かく眞に生きることによつて建立されてゆくところの淨き世界。それが即ちかの「淨土」であつて、やがてまた佛教徒の生活理想となるところのものであつた。かゝる淨土を常に念じ、絶

えず、自我から脱落しつゝ崇く高揚して止まぬ生活、それがまた日本に於ける佛教徒の生活基調であつたのである。

○

顧ればわが民族の勝れたる特長の一つ一つはまたかゝる生活原理を基調として其上に生ひ立つてゐるのである。ひたすら淨くかつ明るく、然も柔軟に一切のものを受容し同化して止まぬ傾向の中にも、また自他を忘れて上下一體隙間なき緊密なる社會を形づくつてゆく事にも、更にはまた、常に己れを空うして、ひたすらたゞ眞理を求め、遂に古今東西の文化をこの東海の孤島に集め得た事の中にもかゝる特質を支ふるものとしてかの生活原理が根底に横はつてゐたのである。

○

「日本精神」の意識が勃興すると共に「佛教復興」の聲をきくに至つた事は意味深きことである。日本が、今やその輝しき過去を分析してその精髓をとつて新たな人類文化を創始せんためには、久しくその内面から育て導いて來た佛教の生活原理にまで掘り下げて來ることが必要である。

諧誌傳記

山中峯太郎

小島一話

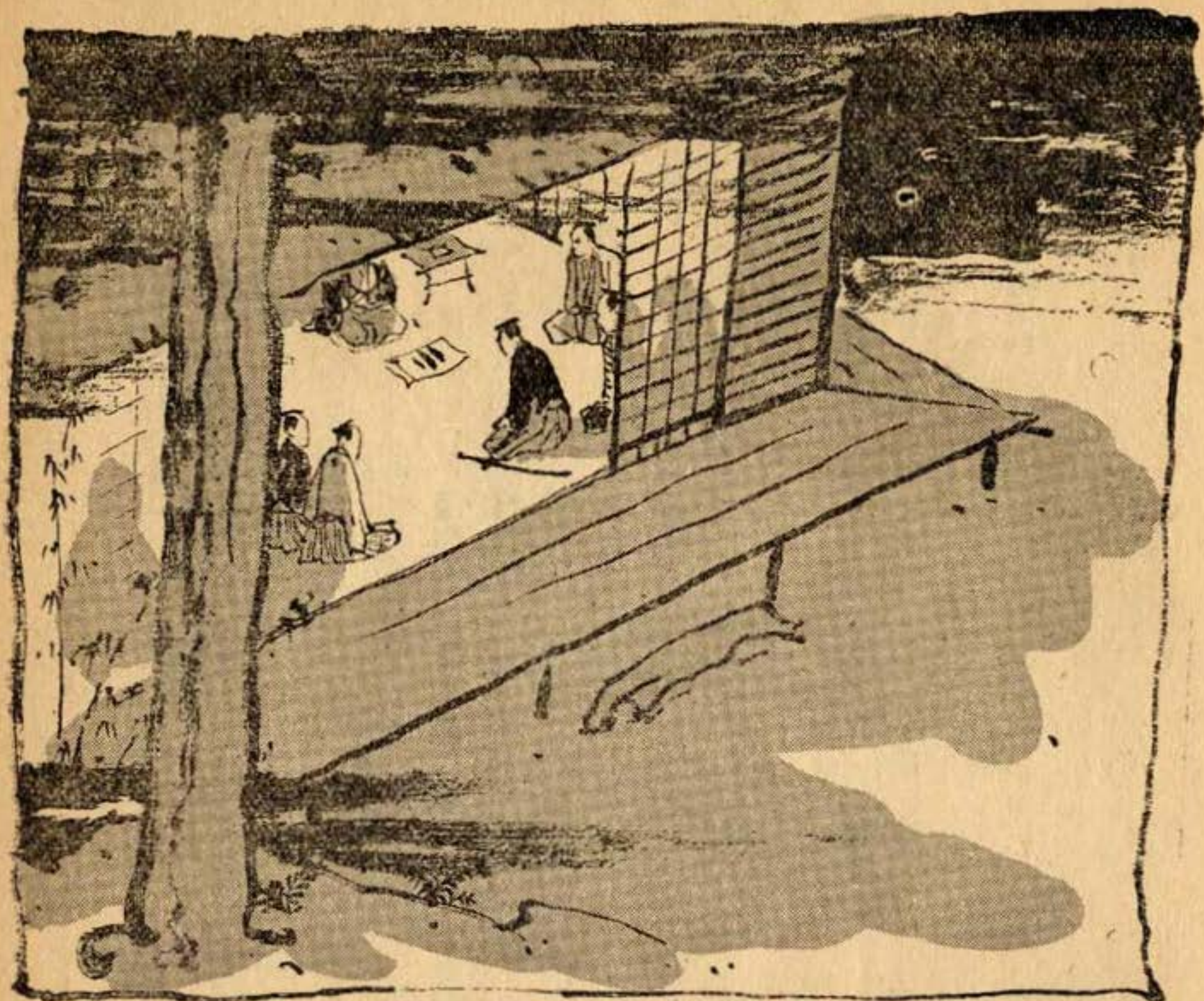
獨身醫西師の生涯



細くても一本は一本

『ウ、ム、弱つたな？ これアだんく小さくなるぜ……』
小野順吉は獨語を言つた。俯いて、膝の上を見てゐる。膝に乗つてゐるのは、白い奉書の紙包だ。紅白の水引が解いたまゝになつてゐる。紙包の中に、鯉節が三本並んでゐる。その中の一本が、ズツと小さくなつてゐるのだ。
『いや早や、かなり小さくなりやがツたナ』

順吉は獨語を言つた。
船の中である。合客が多勢、順吉の廻りに、ゴロ／＼してゐる。皆、行儀がわるい。旅の耻は搔捨て、といふ風體だ。順吉だけが、キチンと座つてゐる。しかも、袴を穿いてゐる。小刀を差し、大刀を左脇に置き、羽織まで着てゐる。が、木綿羽織の色褪せて、紋の綾目も汚れてゐる。袴も小倉で相當に古い。その膝の上に、今の奉書と紙と鯉節が載つてゐるのだ。
順吉の横の方で、商人らしい中年の男が、寝そべつて話し



てる。緒い顔の男だ。

『どうも、かう三日も四日も、海が荒れ續けるなんて、風が悪いんでせうかな？ 波が悪いんでせうかな？』

『さうだんなア、風やろか？ 波やろか？』

大阪辯で相槌を打つたのは、生白い若い男だ。これも商人らしい。無地の柔物に角帯を締めて、肱枕になつてゐる。片手で煙草入を拔出しながら、

『なア、貴方はん！』と、前の男に續けてゐる、『なんぼ何かてこの港の中やツたら、引くり返つても助かりますやろかい、さう思ふたら安心だツせ、なア、貴方！』

『さあ、……？』と、緒い顔の男は臆病らしく、緒いながらに蒼ざめてゐる、『何しろ私や、泳ぎを知りませんでな』
『泳げへんかて、あんた、港の中やもん、舟が何ほでも助けに來ますわいな』と、大阪辯は、樂觀してゐる。

『いや、助けに來る前に、沈んだら大變ですからな、貴方御覽なさい、錨を下してゐると言ふのに、かう揺れてるのは、一體、これは、風が悪いんでせうかな？ 波が悪いんでせうかな？』

『さいな、風が腹を立てよツた故に波も怒つてまんねナ、さうだツせ』

『な、なるほど、風と波とは、すると、夫婦みたいなもので……』

『さうく！ 今この土佐の海で、風と波が夫婦喧嘩を遺つてまんねナ。一方が怒つたら一方も憤つきよる、どツちも悪いんや、てんと埒があきまへんわ！』

こちらは順吉、鯨節をまだ見つめてる。横の話が、耳に入ると、ニヤリと笑つた。——全く埒があかない、海の荒模様だ。土佐の高知の港を出て二十四里凄じ暴風に逢つて、この甲の浦へ、やつと先づ、舟は避難してる、もう四日すぎた、が風と波の夫婦喧嘩は、まだ荒れてる、だから、見ろ、鯨節が、だんく小さくなつてくる……

『弱つたな！ これあ』
順吉はまた同じ獨語を言つた。すると、生白い男の囁きがポソ／＼と聞える。

『ちよつと見なはれ！ あの若いお侍はんかて、今さきから「弱つたア／＼」言ふてやはりまッせ。なア、十農工商、恐い時は誰かて恐うおまんねや』

順吉がグツと振向いた。十九歳の血氣さかりである。

『オイ、町人！』

『……ヘエ』

生白いのがギョツとなると、急に起上つて兩手をついた。

『わ、私でおまッか？ ヘエ』

『其方だ。今何と申したか、もう一度言つてみる！』

『ヘエ、勘忍しとくなはれ、別にその何でおます、悪氣で言ふたんや、おまへん故に、あゝもし、貴方はんも詫まッとくなはれ！』

緒い顔の男も傍に起上つてる。これもビタリと兩手をついた。

『ウヘエ、その全く何で、手前どもが何とも、波風といふものは恐ろしいもんだと、ヘエ、生れが臆病な人間でございまして、この所は一つ、どうぞ私に免じて御勘辨を、ヘエ……』

『もし、私も勘忍しとくなはれ、お願いします故に、どうぞなア、貴方はん！』

緒いのと白いのが四本の手をついて、ひた謝りに、どちらも泣面になつた。

『ウ、ム、詫びるとあらば、許して遣はす！』と、若氣で憤つた順吉、蟲が収まると、淡白に言ひ出した。『己が「弱つた」と申しましたのは、風波の爲ではないぞ、鯨節が小さくなり、見る、見る、この鯨節だ！』と、膝の上から、わざ／＼掴み

上げて、二人に鯨節を見せながら、自分もそれを眺めて、いきなり相談し初めた。

『どうだ？ これでも一本で通らうか？』

『へ、エ、……』

『細うおまんナア』

二人は四本の手を前についたまゝ、緒と白の顔を並べて、鯨節を、恭々しく見上げてゐる。

『どうだ、一本で通るか？ 誰が見ても、一本で通るか？』

『エ、それは、一本は一本でございすな、やはり一本で、ね、お前さんも然う思ふだらう』と、緒い顔が白いのを振向くと、

『へエ、それア、貴方はん、お言ひやすとほりだんな、一本でおますナア』

『ウム、さうか、一本か』と、順吉はニコリと笑ふと、『一本に見えるのであれば、まづ己も安心だ』

緒いのと白いのがチラリと顔を見合せた。——いかに小さい鯨節だ。おまけに何だか、ギザ／＼が付いてゐる、鼠が囁じつた様だ、だが、一本は一本だ。細くて小さいが、何しろ一本だ。

それをまた紙の上に置きながら、明るい顔になつた順吉、

『ウン、もう好し！ 手を上げろ、其方たちに用はない』

『ウへエ、有難う存じます』

『ほんまに有難いことで、……』

——ヤレ／＼まあ鯨節で助かつた！ と、漸く両手を上げて

見ると、二人はまた顔を見合せた。……自分で囁じりだしてゐる、今の小さな鯨節を、お侍が片手で握りしめて、前を向いたまゝ、ボリ／＼と旨さうに囁じりだしてゐる、——小さくなる筈ぢやねエか、と緒い方が眼顔で囁くと、

おまへんか、囁じつたら小さうなるに極つてゐるがナ、と、白い方も眼で同意しながら、二人とも一時に瞬きした、

つて／＼！ 怪體でも黙つて！ ——また怒りよる故になア

氣の短い奴ぢや！ と頻りに瞬きしながら、ゴソ／＼と隅の方へ、二人とも匍つて逃げだした、と、

『客人——風の向きが變つたアで、今から舟を出すよウ！』天井の上から足音と一緒に、船頭の銅羅聲が、風に干断れて、

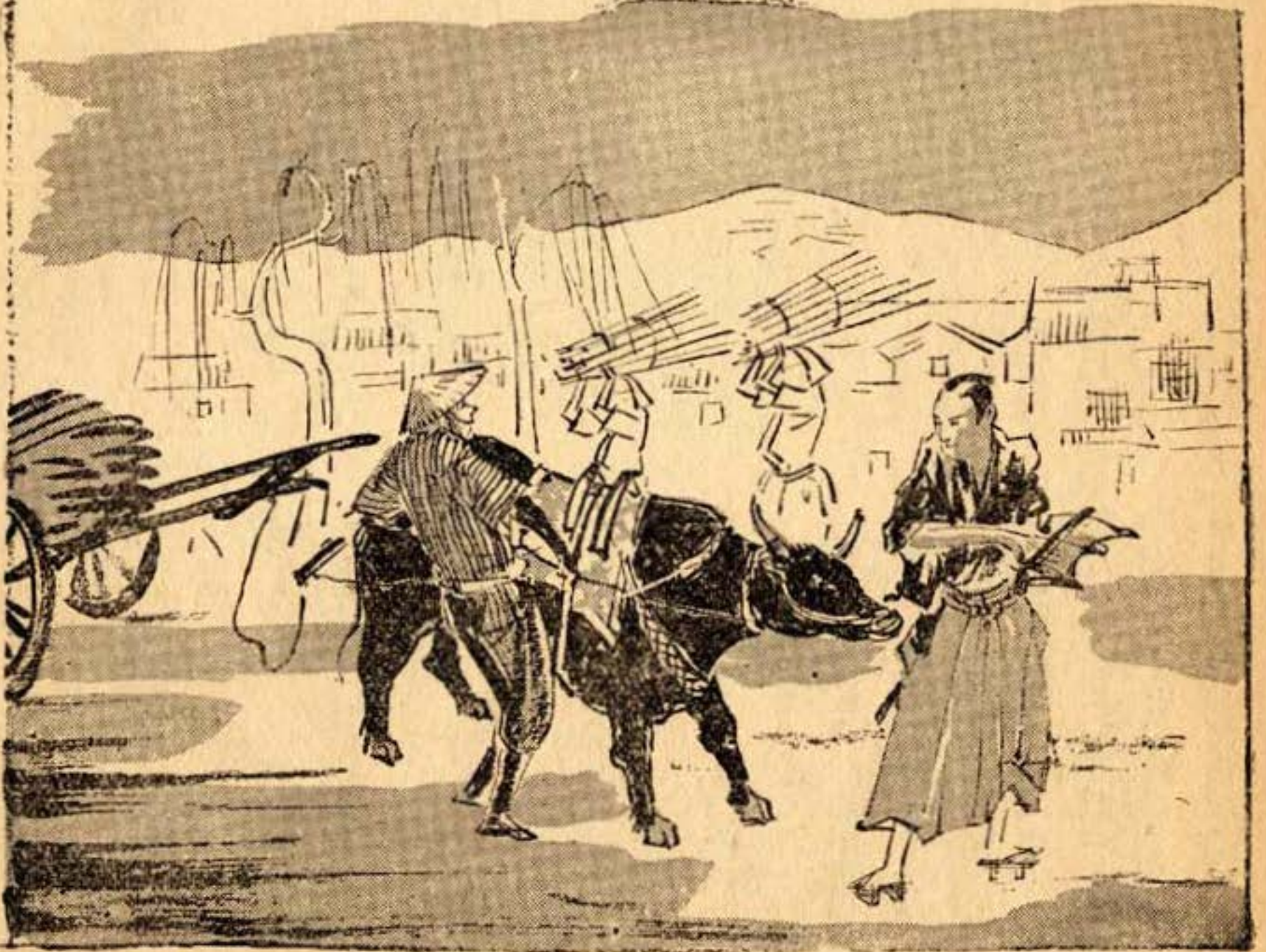
『三百石の阿波丸だア！ これから大阪へ一走り、揺れても追風、心配はいらねエぜよウ！……』

と、聞くと、順吉、天井を振仰いで、鯨節を囁じりながらニヤ／＼笑ひだした。

帆を上げた阿波丸は、甲の浦の港内から、葛島の影を、取舵に揺れながら東の沖へ廻つて行つた。

入門試験

窓の障子を開け放つと、山々の峰が方々に、三十六も見える。仍つて以て、『三十六峰外史』とも號す、といふ頼山陽先生、今日も朝から、書齋の窓を開いて、京洛の遠近の山々を眺めてゐる。先生の御機嫌が好いと、門人たちも、今から『莊子』の講義を拜聴すべく明るい顔になつてゐる、そこへ、一人の門人に案内されて、ドス／＼と入つてきた若者、阿波丸に乗つてゐた小野順吉である。一世に名高い山陽先生の前に、ハツと



畏まつて座ると、
『初めまして御意を得ます。高知藩の郷士、小野順吉、……』
提げてきた奉書の紙包を、恭々しく膝の前に置いた。
『あゝ小野氏か、豫て御尊父の書面にて承知いたしてをるが、

……』
山陽先生、ジロリと順吉を見するた。眼が鋭い。頬骨隆く秀で、眉が迫つてゐる。傍へ寄り付けないほど烈しい氣魄が閃いて
『ハツ、……』と、順吉は兩手をついた。初対面の一瞬、完全に押へられた。
『高知を何時發足されたかの』『ハツ、その、十二日前に、便船に乗りましてございます』『十二日前、すると、途中、大阪にでも逗留されたかの?』

——入門の試験らしい。と順吉、顔ぢうに冷汗を流した。

『いえ、大阪へ上陸いたし、直ちに先生の御許へ直ちに、只今到着、一夜も逗留いたしませぬ』

『しかし、日数が十二日は如何いたした？』

『ハッ、それは、土佐と阿波との國境、甲の浦の港に便船が前後四日の間、避難いたしまして』

『ほう、海が荒れたと見ゆるの』

『實にそれは、凄じい暴風でございました、ハッ』

『左様か、良き經驗を積まれたことぢや』

『父も、「毎年海が荒れる時分ぢやぞ」と、申してをりましたが、……え、是れは「頼先生の御手許へ届けよ」と、その、

「些少の品で恐縮至極」と、父が、ハッ、お收めを願上げます。……』

十九歳の順吉、父から言はれてきた口上を、千斷れく思出したながら、奉書水引の紙包を恐るく前に押し出した。

山陽先生が初めて疊の上を見た。

『御尊父よりか、何かの？』

『ハッ、國の名産、鯨節にございます』

『ほう、それは珍重、遠路の持参、忝けない。早速に芳志を頂かう』

『……』順吉はモジ／＼した。

『さぞかし美事な物であらうが、實は山陽、土佐の鯨節は初めてぢや』

『ハッ』と、順吉、額の冷汗が眼に浸みこんで、グイと手の甲に拭つた。

『失禮ぢやが、これにて一見いたしたい。謂ゆる百聞は一見に如かず、各々も初めての人は、土佐の鯨節を、篤と見らるゝが好からう』

『ハ、ッ』ハッ『拜見いたします』『なか／＼巨大な物と聞及んでをりますが』夏目氏、も少し横へ寄らッしやい、我輩も初めて拜見するんぢやから』

門人達が皆、土佐の鯨節は初めてらしい。順吉の兩方へ、ゾロ／＼と袴の膝頭を突出してきた。

順吉の手が、顫へだした。ワナ／＼と水引を解く、いよいよ紙包を開きながら、眼を瞑つてしまった。

山陽先生を初め一同の眼の前へ、現れた土佐鯨三本、中の二本は美事な物だ。いかにもデツブリと鯨々してゐて、しかも、化石してる様に見える。ところが、上に乗つて一本だけ、見るからに貧弱だ。長さ僅かに二寸餘り、チヨコナンと斜になつてゐる。

『ほう、……?』と、山陽先生、貧弱な方を、ジツと見ると、解せない顔つきで、『小野氏上に乗つてゐるのは、鯉の子かの?』

『いえ、その、……』と、今さきから眼を瞑つたまゝの順吉、顫へながら答へた、『子ではございませぬ、やはり、親でございます、いや、親でございました』『は、あ、と言ふと?』

さすがに碩學博識の山陽先生も、難解な鯉節に直面して、顔を傾げた。門人連も五六人は腕を組んだ。すると、順吉、いきなり兩眼を見開いて、今は冷汗を拭ふに暇なく、

『先生!』十疊の部屋ちうに必死の聲で一喝した。

『何かの?』山陽先生、いきなり怒鳴られて、眉がグツと逆に吊上つた。

『申し上げます。父が『頼先生に、失禮ながら、鯉節三本いかにも輕少とは存すれど、微祿の郷士、平に御容赦を頂けよ、眞に寸志、汗顔の至り』と、私に申しまして、……』

『うむ、それで?』

『されば私、三本を缺かしては猶ほ先生に不禮と、斯く持参いたしました』

『いかにもの、持参いたしてをる』

『然るに、便船阿波丸が甲の浦に避難いたし、この順吉の懷

中、旅費の他に持合せがございませぬ。食事の代に差支へまして、これなる鯉節を、嘯じりましてございます』

『嘯じつて空腹を凌ぎましたが、まだ確かに合計は三本、小さくても是れ即ち一本は一本と存じます』

『うむ、いかにもの』父の寸志、平にお收めを願上げます』

門人連が、ザワ／＼しだした。或る者は嗤ひ、或る者は、

不禮千萬! 嘯じり餘りを先生の前に差出すとは、と、肩を怒らして順吉を睨み据ゑる、騒然たる一同を、

『各々靜かに!』鶴の一聲でビタリと制へた山陽先生、順吉を眺めて、しみ／＼と言ひ出した。

『あゝ小野氏! 其許が父の言に背て忤らず、これなる三本の持参を、山陽は悉けなく頂戴いたす。然も其許の淡白にして朴直なる、敢て人を偽らず、近來の會心事ぢや。今日より

此の家塾に入られい! 悦んで塾生の一人に加へ申さう』蒼くなつて緊張してた順吉、一時に感激すると、

『有難う存じます』と、言つたきり、バラ／＼と涙を下した。門人たちはシーンとなつた。鯉節の上に點々と順吉の涙が

落ちて行く。が、今は誰も嗤はず、誰も怒らない。山陽先生、親しく筆を執ると、白木の門人札を取上げて、

『小野順吉』の四字を揮つた。墨痕淋漓と躍つて、先生自身

の眉も明るく舒びてゐる。

大いに賑ふ若先生

順吉入門の試験は、まさしく優等以上で通過した。

頼山陽先生の門下に刻苦精勵して、學識大いに進

むとまた一方に京都の名醫として誰知らぬ者も

ない小石元瑞先生に就き、精しく醫學を修め

た。これも拔群の成績、若年ながら一人前

以上の學者となつて、今は故郷へ錦を着

て歸れる、押しも押されもしない新進

の秀才小野順吉、だが、山陽先生最

初の眼識に違はず、淡泊朴直の一

本調子だけは、あくまでも生來

の本領を失はない。鴨川の水

に洗はれながら、垢くさい装

をして、どこへ行くにも書物を

讀みつゝ歩いてゐる。駕籠が來よ

うが、美しい京の女性が前に現

れようが、眞直に歩いて行く順

吉、讀書中だから顔も上げない。



皆向ふから避けて行く。京洛の賑しい街も、順吉には研學の道場なのだ、時に牛車と衝突すると、

『退けッ！』一喝したまゝ、讀書中だ。何に衝突つたのか、本人には分らない。牛の方で驚いて避けて行く。

かうして順吉の勉強中に、故郷の土佐から早飛脚がきた。

父の慶藏が病氣の知らせである。元より孝心の深い順吉、倉皇として京都を出發した。

土佐の高知から十里三十丁ある安藝町、こゝが順吉の故郷だ。今の三菱の富を積んだ開祖・岩崎彌太郎も、この安藝町の生れで、順吉の近い親戚に當つてゐる。懐しい故郷へ歸つてきた順吉、懐しさも、着てきた學者としての錦も、父の病氣の悲しさに、何もかもなく路を急いで家へ着いた。習ひ修めてきた醫術、それを父の病床へ早速に施したが、天壽は如何ともすべからず、父の慶藏は順吉の歸省と成人を悦びつゝ、永へに眼を閉じた。

『残念だ。何とも残念だ！ あゝ己の醫術も、お父さんの命を延ばすことが出来ないとは！……残念だ！』と、限りない悲歎に沈んだ順吉、悲しみの底からムラ／＼と發奮した。『己は名醫にならう！ 一世の名醫になつて萬人の病苦を救ふのが、お父さんへ何よりの供養になる筈、……さうだ！』

己は本當の醫者にならう！』

思立つと直ぐ實行する順吉、お父さんの葬式を送る途中も醫學の書物を讀みながら行つた。歸つて來ると、忽ち醫者を開業した。時に年二十三歳、まだ／＼若先生である。

若先生だが、何しろ京都で修業してきた、新進の小野先生なのだ。その上に、診察が眞剣で親切、薬も惜まらず遣ふが、診察代も薬料も一向に請求しない。そこで門前に病人が押寄せて來だした。大流行である。ところが、病人にとつて、一つ困ることには、若先生、時々弱音を吐いて驚かせる。

『オイ、この病氣の因が、己に解らんよ。閉口だ。薬を飲むなら遣つても好いが、効かんかも知れないぜ、どうだ？』

『どうだツて、先生から病人にお訊ねになつては困ります。』

何とか一つ効くお薬を願ひたいもんで』

『だから、効く薬が之と解れば調合してやるがね』

『へエ、それぢやア、どうも困りますな、何とかして頂かな』

くちや』

『いかにも困る。病氣の因が解らんから薬も解らん、閉口だ』

『しますと、一體、私は何うしたら宜しいんで？』

『さうだな、五六日、家へ歸つて寝とれ！』

『へエ、お薬は頂きませんで？』

『さうだよ、五六日して重くなつたら、呼びに來い』

『へゝエ、重くなるまで待つてますんで？』

『左様。重くなつたら因が解る。さうしたら効く藥を遣るよ』

順吉先生、およそ此の調子である。病人も一度は驚かされる。が、先生の氣象が解つてくると、反つて信用を増して、

『小野先生は親身になつて治して下さる、お若いが然し何とも有難い方だぜ』

『さうだ、解らん所は解らんと仰しやる。あすこが私は

氣に入つてゐるんだ』なか／＼評判が好い。若先生の門前、ま

す／＼繁昌してくる。ところが、こゝに、弘法も筆の過り、

さしにも熱心で卒直な順吉先生も、遂に一度、誤診を遣つ

た。その病人が亡くなつて、自分の誤診と判つた時、

『だめだ！ 己は駄目だ！』と、順吉先生も身悶えして悔む

と、悔む餘りに書齋へ獨り閉籠つてしまつた。

『待つてくれ。當分、診察はしないぞ』

診察を斷つて、書齋の机の上に、大きな紙を廣げると、家

にある弟も召使も中に入れずに、食事もせず、茶も飲まず、

たゞ何か吃々と書き初めた。

一日すぎた。弟の篤治が心配して、ソツと書齋を覗いて見

ると、兄の順吉先生、まだ何か一心に書いてる。

『兄さん！ 何をしてゐるんだ？』『うゝむ、篤治か、まあ入れ』

やつと許されて、書齋へ入りながら、兄の後から机の上を

見ると、『な、何だい、これア？』

弟の篤治、呆れて立竦んだ。順吉先生は筆を置くと、大

きな溜息をついた。『あゝア、篤治、この繪は、どうだ？』

『何だ、これア、どうした繪なんだい、幽霊の繪かしら？』

『うむ、やつと出來た。幽霊に見えるだらう？』

『だけど、下で手を上げてゐる人間は、誰なんだ？』

『己だよ、己れに見えないか？』

『變だなア！ 何だツて、兄さんが幽霊に、手を上げてゐるん

だい？ おやつ、匙が飛んでるぢやないか、幽霊の胸の所に』

『うん、己が匙を投出してゐる所だ、この幽霊に襲はれてね』

『へゝエ、すると。幽霊退治の繪ぢやなくツて、兄さんの方

が降参してゐる所かい？』

『うん、どうも仕方がない。經師屋を呼んでくれ、これを表

装させるんだ』『變だなア、この幽霊は一體、何なんだ？』

すると、順吉先生、俄かに度しく聲を低めて、

『これは、己の誤診で死んだ患者だ。さぞかし、己を怨んで

るだらうと思つてね、……』と、さう言ふと、繪の前に項だ

れてしまつた。

幽霊の繪から此の方、長い間に一度の誤診も無い。患者の崇拜すること、土佐ちうに噴々たる名聲が廣がつた。

『小野先生の診断は神さまの様だ！』

と、だから、順吉先生の忙しいこと、まるで寸暇がない。

その上、既に一家を成してゐるのだし、岩崎家を初め親類の者が、頻りに縁談を勧めに来る。

『貴方も今は立派な先生になつたのだ。小野先生といへば、もう知らぬ者が無い。で、こゝに是非、小野先生に貰つて頂きたいといふ、それア器量といひ家柄といひ、全く申分のない……』

と、言ひかけると、皆まで聞かない中途から、順吉先生、フツと顔をそむける。

『だめだよ、女房は研究の邪魔だ』

『いや、邪魔だと言つて、持つてみなけれア、女房の味は解るまいぢやないか。決して邪魔にならない伶俐な花嫁を一つ、……』

『だめだよ、按摩の代用にもなるまい』

『どうも貴方は醫者に似合はない事を、……女房は按摩の代りどころぢやない、それア重寶なものだから、とにかく一つ私に任して貰ひたいものだ、何しろ器量といひ家柄といひ：

……』

『煩いな、そんなに言ふなら……』

『好し、任してくれるか』と、乗出すと、

『己が死んだら周旋してくれ』

まるで取り付きやうがなく、親切な親類も遂には憤つて呆れて歸つてしまふ。弟の篤治の方は、早くに結婚して、これも醫者になり、高知へ出て南奉公人町に開業してる。同じく評判が好くて、藩主山内公の御典醫に召出され、家運隆々その上に最う、男の子が生れてる。『春彌』と柔しい名がつけてあるが、九つの腕白さかり、ところで、お父さんの篤治先生は、醫術も旨いが酒も旨い方である。大酒は飲まない代りに、酔ふと極つて義太夫の『熊谷陣屋』を唱ひ出す。時々春彌を連れて、泊りがけに兄の順吉を訪ねて来る。元より氣が合つてる兄弟仲なので、今日も駕籠の中で徳利を傾け、チビリ／＼と遣りながら安藝町へ揺られてきた。兄の家の前へ着けさせると、垂れを掲げてヨロ／＼と出てくる。春彌も一緒に緒に出て来ると、ホツと息をついた。駕籠の中でお父さんが酒臭く、やつと我慢してきたのだ。すると、徳利を提げたまゝのお父さん、盃は懷へ入つてる。

『花の盛りの敦盛を、ツン／＼テン、……よう、兄貴の所も

大繁昌だな、ツン／＼デ、ン』

上機嫌で唱ひながら、春彌を後に連れて、兄の書齋へズン／＼通る。

『ハムア、まだ、幽霊に退治られの繪が立てゝあるな、春彌見ろ／＼！ 今日には良く見て行け、これが伯父さんの立志の繪だ』

『幽霊が化けて出たの！ お父さん』

『化けて出たから幽霊だ。伯父さんは、この幽霊で偉くなつた。ゲープ、花の盛りの敦盤を、ツン／＼テン』

何が何だか解らなくて、春彌がボンヤリしてると、診察をすませた伯父さんが、汚い装で出て来る。

『よう、篤治、春彌もきたか。遊んで行け』

『やア兄さん、近頃は何うだ？』

『うん、變つた患者が來なくて面白くない。高知には變つたのが、あるかな？』

『これといふのも無いものだね、何か一つ堀出物をやつて、兄さんに見て貰ひたいんだが、ゲープ、その中に何か珍物が見つかるとしたらうよ』

醫者と醫者が骨董の話でもしてる様に聞える。すると、

『いや、篤治、己はお前に見せたいものがあるぜ』

『ハムア、何だらう？』

『長崎から漸つと手に入れたが、電氣摩擦の機械だ』

『それア一つ、是非ともお眼に掛りたい。春彌も來い。何處にゐられるな、電氣摩擦先生は？』

當時に於ては最新の治療機械、診察所に恭々しく置かれてる。順吉と篤治の兄弟兩先生、診察所へ來て機械の前に立つと、忽ち細心の研究を初めた。篤治も『熊谷陣屋』の騒ぎではない。果は實驗することになつて、

『春彌、暫くジツと爲とれ。好い氣持になる筈だからな』

腕白さかりの春彌も、このお父さんには敵はない。妙な機械で全身を撫でられて、ブル／＼顫へだした。ふるへながら何だか操ぐつたい氣持になると、

『どうか、春彌、どんな具合だ？』

『ウゝン、ボカ／＼してきたよ、僕、體ぢうが』

『さうか、兄さん、これア血行を良くして、按摩の代りに重寶らしいな』

『うん、己も然う思つてる。女房よりも間に合ふだらう』

『お父さん、もう好いよ、僕』と、春彌はまだ顫へてる。

『好うし、今度はお父さんが掛つてみる。お母さんよりも間に合ふ機械だぞ』

篤治先生、電氣摩擦に掛かりながら、好い氣持になると、

ウツラ／＼眠り初めた。



涼味たゞよふ

念佛群像

大野法道

齋藤實盛の 亡靈を救ふ

— 西行上人 —

江戸の石濱に保元寺といふ古刹があつた。
足利尊氏の亂に兵火にかゝつて焼けたまゝ、
荒れ果てゝ狐狸の住む哀れな有様であつた。
永享の頃、西行上人はたま／＼この廢墟の前
に立つたのである。

「此荒れはてた様子はどうした事であら

う。多くの立派な墓石は残つてゐるが、香
花の見るかげもないではないか。はて、之
は鎌倉權太夫景通の五輪塔じやないか、之
こそ藤原朝臣四辻有理卿の碑ではないか。
こゝに氣のついたのも何かの縁、こゝに居
を構へて念佛し、これらの亡靈を慰めるこ
とにしやう」
と倒れた石碑を起し、傾けるを繕つて香花を
供へ、さゝやかな小屋を建て、毎日に念佛を
怠らなかつた。

ある夜のこゝ、あたりは靜かに更けて蟲の

聲さへ聞えぬ頃、一人の老翁が影の浮き出た
やうに草庵に入つて來た。やがて念佛が終る
と音もなく歸つてゆく。いかにも仔細ありげ
で西行は不思議に思つてゐたが、毎夜々々時
をたがへず訪れて來るのであつた。

この由を聞いた寺衆は、

「それは變なことで御座ります。今夜は一
つその後を附けて、どこから來るのか目届
けて參りませう」

とその時になるのを待ち構へてゐた。老人は
いつものやうにやつて來た。歸りゆくあとを
つけて行くと朽ち果てた大門の柱の影で、か
き消すやうに姿が見えなくなつてしまつた。

翌朝となつて、姿が見えなくなつたといふ
場所を能く見ると、そこには墓石らしいもの
が埋まつてゐるやうだつた。

「之を一つ掘り出してみよう」
と土を掘りのけて見ると、意外に大きい墓石
だつた。

洗ひ淨めて見直せば、それこそ齋藤實盛の

墓であつた。

西行上人は幼い頃、千葉の館で讀みなれた平家物語の一節が、熱い同情の涙と、ともに浮んできた。

「武藏の國の住人長井の別當實盛は、存する旨ありければ、味方の勢は落ちゆくとも只一騎返し合せ、返し合せ防ぎ戦ふ……」といふ第七卷に出る話である。老武者と人に侮づられるのが口惜しく、白髪を黒く染めて戦つた實盛は、手塚太郎光盛に打負かされて首級をあげられたが、木曾義仲はその髪を黒いのを怪しんで、洗はせてみれば全くの白髪であつたといふ、人間の心に湧くあはれな姿を永久に人の世に残した物語を思ひ出し、古

武士の純情に感激して、新たに「篠原院徳山覺道眞阿大居士」と法名を授け、厚く回向をたむけて念佛を唱へてゐた。

西行上人はもと下總の千葉家の出身で、世世源氏に仕へた血統であつたが、佛門に入つて念佛する身には怨親平等の天地があつたの

である。その後の夢に、くだんの老人喜び顔にて顯はれ、永く寺門を護ることを告げるのであつた。

上人はそれから保元寺の堂宇を完備し名を法源寺と改めて念佛怠らなかつたが、後に増上寺の第二代となり、その法流はいよく榮えゆくのであつた。今では法源寺はもとの名の保元寺と稱し淺草橋場一丁目に存在してゐる。



藝州嚴島の光明院

— 以八上人 —

天文八年といへば、室町幕府の威光は地に墜ちて、群雄が頭を上げやうとし、世は流亂に陥つて險惡な空氣に蔽はれてゐた時である。この年に以八上人は奥州岩城に生れた。僧となつて或は大澤の圓通寺に、或は千葉生實の大巖寺に學んで教學を究めたが、一舉萬里の行脚に心膽を鍊らうと企てたのである。出發にあたつて生家の兄弟達に書き遺した文の一節、

佛法修行は、いかにも攝心五十年も三十年も開ふに工夫思案するが第一なり。世間をば打つする心持ちにて思案一片に心をなすべく候。たとひ悟道得法するとても、修行なくして打つてば自利を失ふべく候。其用心肝要に候。……今どきの佛法のあつかひは一向外道の法にて候。よくよく經論を見て能々身に當つるころにて、ひき受て思案候はゞ、佛祖の内證にかなふべく候。

と。明確に時流の失當を衝いて、誤りなく進

む道を知つてゐたのである。

ある時、或る禪寺を訪れたことがあつた。

何しろボロ／＼の衣を着て、乞食のやうな風

彩をしてゐるので、寺の和尚は、早速に庭を

掃かせたり、水を汲ませたりする。以八上人

は平氣でハイ／＼と言ひ付けられるまゝに、

何でも心よく働いてゐる。

今日は風呂を沸かせと言はれて、念佛しな

がら水を汲み入れて焚いてゐる。程よく沸い

た頃、和尚はザンブと浴槽にはいり、良い氣

持で居ると、頻りに念佛の聲が聞えてくる。

「お前は良う念佛を申すな、淨土宗か」

「いかにもその通り」

「それなら尋ねるが、昔、善導大師は念佛

申す度に、口から佛が飛び出したといふ。

お前もその者なら、わしの前で一つ佛を出

して見ろ」

詰め寄せる要求に、閉口するかと思ひの外

「和尚さんは仲々面白い注文をなさる。仰

せとあらば出しもしやうが、その前にお前

さんをお願いがある。それは外でもないが
昔、達磨大師は川を渡る時、蘆に乗られた
さうなが、お前さんが蘆に乗つて川を渡つ
て見せて頂きたい。如何で御座るかな」
と、さら／＼と言ひ放つた。乞食坊主だと思
つたのは飛んでもない間違ひだつた。



改めて話し合つてみれば、どうして／＼和
尚などの、及びもつかぬ深い體驗を持つてゐ

る以八上人であつたのに驚いたのであつた。
後に筑後の善導寺に止まつて、ありし日の
聖光上人の教化を偲び、勤行怠りなかつたが
その寺の檀越の人から嚴島の小河氏を紹介
され、來て見れば聞きしにまさる勝景にこゝ
を住地と定め、小河氏はその高德に歸依して
神社の東の岡に草庵を建て、寄進した。時の
人は岡の庵と言ふてゐたが、それが後の光明
院である。

安藝の宮島まはれば七里

浦は七浦七あびす

の歌にうかび出る絶勝の眺望、そこから立ち
のぼる紫の霞は、今も尚ほ、佛名唱和の聖
音を抱へて天地の間にたなびいてゐる。

わが身を忘れ
て人を救ふ

— 吞龍上人 —

徳川家康がこの世を去つた元和二年の春、

武州岩槻村に少年の源次兵衛が、國禁となつてゐる鶴を撃ち取つた事件があつた。

少年の父、百姓の松澤五兵衛は打續く凶作に借財が重なつて遂に重い病に臥すことゝなつたゝめに、その病には鶴の生血が特效あると聞いた伴が、父をおもふ一心から此大罪を犯したのであつた。

捕まれば死罪である、少年は夜陰に乘じて館林の城下に匿れたが、詮議が喧しいのでそこにも居れず、更に新田へ逃げのびた。



全く窮してしまつた少年が、大光院に案内を乞ふたのは、この寺の開山吞龍上人が畫の説法を終つて休んでゐる時であつた。この寺は上人の師匠である觀智國師が、家康から命じられて、上人を推薦し、新田の義重の廟跡に建てられたものである。

「誤つたことをしたものだ。もし捕へられたら残る父親をどうするのだ。がまあ良い。窮鳥懷に入るとき、わが肉を割いて救はれた釋尊の慈悲を思へば、助けねばなるまい。そなたの親を思ふ心に感じて、わしがり受けた。」

と、後ろの山の中腹にある崖の中へ隠して置いて、イクラ役人が尋ねに來ても知らぬ存ぜぬで取合はなかつた。

上人は裏山へひそかに食料を運んでやつてゐたが、閑老連署の嚴重な問責に、少年の髪を剃つて僧とし、暗夜に紛れて寺をつれ出した。追ひかけて來る役人を後にして、二人は逃れ／＼て長平山を越え、赤城山の麓の三夜澤に身を忍ばせることゝなつた。五年の月日

がそこで過ぎたのである。

少年は毎日／＼老いて病む父を忘れることが出来なかつた。上人は見るに見かねて、少年をつれて岩槻へやつて來た、そして明け暮れ慕ふ父親に會はせてやつた。父親の源五兵衛が一言禮を述べたいと、少年の脊に負はれて出て來た時に、上人は獨り村はづれの地藏堂の椽で、たゞ少年の歸り遅しと待つてゐたのであつたが、源五兵衛の感謝は言葉の外であつた。そして病み衰へた身はつひに、上人の十聲の念佛を最後として安らかに死んで行つたのである。

豫てこうもあらうかと待つてゐた捕手は、上人と少年を取り圍んだ。上人はたゞ念佛を申してゐた。そこへ疾風の如く走りよつた武者一騎、吞龍上人に恩免の御沙汰があつたと傳へるのであつた。

家康の薨去の後、五年の喪が終つたこの年、老病に臥す觀智國師は、親しく將軍秀忠の見舞を受けたが、時を移さず、愛弟子の吞龍上人の恩免を願つたのであつた。



聖者を描ける文學

中 里 介 山

どうも凡て大きすぎるものは刺戟が少ない。我々は斯うして今地球の上に立つて居りますけれども、地球は一秒間に何千里と進んで居るものなさうですが、我々は更に進んで居るものではない。もう少し小さく船にして見たところで一萬噸級以上の船になりますと——私はそれより大きな船に乗つたことはあり

どありませんけれど昔流行のガタ馬車なんとなふものに乗ると、單に刺戟ばかりでなく苦痛を感じる程の目に合される。さう云ふ意味で大きなもの程刺戟が少ないものでありまして、小さなもの程刺戟が鮮かであり強いと云ふ事が言ひ得ると思ひます。それでは刺戟の強いものは必ず小さいもので刺戟のないもの程大きなものと云ふと、大きくして且つ刺戟の鋭いものもあるのでありますから一概には言へませんが、さう云ふ意味に於て私は法然上人の偉大さを有ゆる偉人の中に於て見る事が出来るのであります。最近私は洵にお書きまして世に公になつて居りますが、洵にお恥しい事ではありますが上人の偉大なる所以、一つには日本に於ける眞に宗教の創立者として唯一人としての法然上人を記して世に示したいといふ精神でございました。單に傳記を書いて著作業者として世に出すと云ふ意味からでなく、心から上人の偉大を仰慕讃仰するものがあればこそであり、これを書くに

至りましたのは一朝一夕の思出ではない。随分久しいことではありますが、何故に法然上人が偉大であるか、また私が如何にして法然上人の偉大なる所以を感じ得るに至りしやと云ふ事を申上げて見たいのでありますが、何分時間の掛る事でありまして、それは諸先生の方が専門家でございますから、我々が駄辯を弄する必要は無い。たゞ私が書きました法然上人の傳記と申しますのは、日本に於ける唯一の宗教創立者——日本に於て偉大なる一宗教を創立した人は法然上人の外に無い——

行誠上人自畫讃(一)

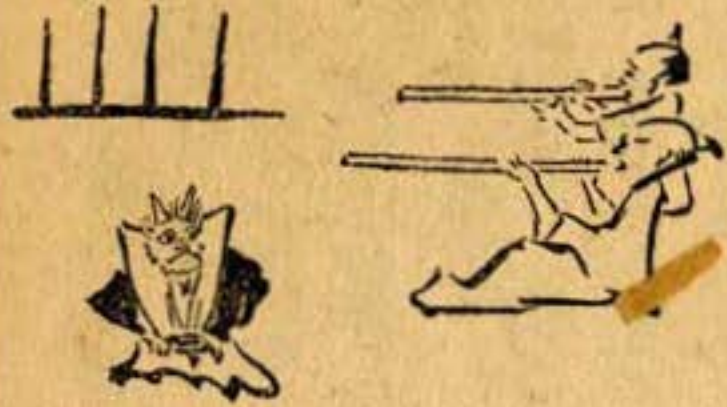
おそろしき

地獄のそこの

鬼とても

おのが吹き出す

ものとしらずに



といふことを云ひたかつたのであります。

さて「聖者を描く文藝」と一口に申しましても、文藝と云ふ範圍は實に廣いのであります。思想、感情を發表する文字は大抵文藝と見て宜しい。聖者を描いた文藝と云へば純粹の傳記も文藝と見ていゝでせうし、又近頃流行りつゝある傳記と小説の合の子みたやうな傳記文藝といふのも文藝でありますが、此處では文學を小説と限定致しまして、つまり「聖者を描く小説」と云ふ事に限定してお話致して見たいと思ひます。斯う申しましても私は學者でも何でもありませんから知識は極めて淺い者なのでございます。小説を書くから小説位は澤山讀んで居るか云ふと、小説も殆んど讀まない。若い時には少し讀みまして、近頃は讀んで見ても、彼の小説がいゝと云ふから讀まうと少し讀んで見るとどうも讀めない。或る人が、明治大正文學全集と云ふ圓本が出てゐましたね、あれを寄贈して呉れた人があつた。私共の家に小圖書館がありまして、その圖書館に寄贈して呉れたのであり

ますが、私は寄贈して呉れたものはみんな讀んでしまふ事にして居るので、右によつて私は現代文學も讀む事が出来ました。それでこの人は斯う云ふ人だ、この作家は斯う云ふ特色を持つてゐると云ふやうな事は殆んど解つた。そこで私は現代と云ひましても明治大正以來の小説家で傑出した人は私の見た目では尾崎紅葉と、女では樋口一葉女史、近頃で夏目漱石、二葉亭四迷、それから現代では島崎藤村、斯ういふ人は、その他にも澤山あります。斯ういふ人は、その他にも澤山あります。斯ういふ人は、その他にも澤山あります。斯ういふ人は、その他にも澤山あります。

その他のものは、殆んど忘れてしまつて居ります。現代のものでは誰方がどんな小説を描いて居られるか知らない。青年時代に讀んだものゝ中からお話しようと思ひます、それに致しまして一通りは調べてお話をすればよいのですが、私は近頃非常に俗務多忙で——調べる暇を得ませんものでございますから、青年時代に讀んだものゝ中からうろ覚えを呼起して——と申しますと青春潑勝たる皆さんから古いと言はれるかも知れませんが、此方

では頓着ありません。

小説の中で聖者を描いた小説は、これは日本にはない。東洋には餘りないのであります。東洋は藝術を卑しめ、殊に小説を卑しむ風習もございましたが、西洋では藝術と云ふ事が非常に發達して居り尊ばれまして、プラトールも戯曲の形式で哲學論を書いて居るやうであります。日本では、東洋では非常に文學、殊に小説を読むことも書くことも卑下して居りました。小説と云へば男女間の情事とか、悪事陰謀の事とか、怪力亂神とか、さう云ふやうな事ばかり書いて興味を誘發する。紫式部があれ程のものを書いて居るが、矢張り地獄に墮ちたと云ふやうな事であり、又馬琴も大人に見せるものぢやない、婦女童蒙の爲と云ふやうな申譯を絶えずして居るのであります。そこで東洋殊に日本の小説に聖者を描いた小説と云ふのはほとんど無い。ありましたら教えて頂きたいが、馬琴は道義觀の強い人でありますから、馬琴著作の中で八犬傳は八ツの徳に人間を表象して居るやうな書

き方をして居りますが、聖者として完全に尊い大人格を出して居ると云ふ事は無い。八犬傳の中で、大法師と云ふ人が、元は仲々立派な武士でありましたが、それが法師になつて、終ひの締めくくりをするやうな結構になつて、居ると思ひましたが、假りにそれを聖者として見ますと、日本では馬琴の、大法師位のものぢやないかと思はれるのであります。それですからどうも日本の小説ではその點は擲み處がない。明治以來文學が廣がりました、世の中も一變して参りましたが、どうも今の最も著名な作を見ましても、小説の中に聖者として表現されてゐる人物は殆んどないと言つて宜しいと思ひます。

然し西洋には大いにある。これは我々の極めて僅かな讀書の範圍内に於きましても可なり念頭に浮んで来る。その中で、主なるものを少々擧げて見ようと思ひますが、最も有名な最も著るしいものは、ビクトル・ユーゴーの——この六月に五十年祭がありました、このユーゴーの作に「レ・ミゼラブル」があ

る。ユーゴーは日本人に「レ・ミゼラブル」を以て一番聞えて居るのでありますけれども、あの人は玄人の批評に依ると文學の中で詩が一番優秀で、その次はドラマで、小説は三番目とか四番目とか云ふことであります。が、その小説にしてあれだけのものでありますから歴史上の偉人に相違ない。「ミゼラブル」が必ずしもユーゴーの小説の代表作とは云へない、「ミゼラブル」の前後にもユーゴー作の小説は澤山あり、あれ以上の傑作と稱すべきものも多いが、その人口に喁炙せる點に於ては「ミゼラブル」に及ぶものは無い。その巻頭にミリエルと云ふ僧正の事を書いて居ります。ミリエル僧正は非常に高德な人でありまして、それを小説ではなく、あそこでは寧ろ傳記として書いて居ります。ミリエル僧正を實在の人として、少なくとも實在を骨子として書いたものであると云ふ事が判る。ミリエル僧正はその生涯を見ましてもまさに聖者と稱すべき人格者である。目又、あゝ云ふ人は實際にあると思ひます。明治初年以來日本

に来てゐたキリスト教のウキリヤム監督と云ふ人が居りましたが、このウキリヤム氏の行状の如きはミリエル僧正に彷彿たるものがある、あゝ云ふ人は實在すると思ふ。それを諄々と傳記的に書いて居りますが、彼のミリエル僧正の高徳あつて、ジャンバルジャンの兇惡が生きる。あゝいふ風に聖惡共に寫すといふことは普通の作者の出来ることでは無い。ユーゴーの作中にも純粹に聖者を描いてミリエルの如く明確なものはありませんまい。それではシエクスピアーはどうか。恐らく

行誠上人自畫讃 (二)

酒はもとくめども

つきぬものなれど

かね金山と

一相談をしろ



純粹に聖者を描いたと云ふものはないのではなないか、もう一遍讀み直して見ないと斷言は出来ないが、眞正面から聖者を描いたものは、出来ないうに思ひます。有ゆる人間がシエクスピアーの作中に居ると云ふ事でもありますけれども、眞正面から聖者を描いたものはないと思ひます。其處で、ラスキンなども云つてゐる、シエクスピアーは女を描くのは上手だが、男を描かせると、あんまり優れた男性といふものが無い。女は立派な女を描くと云ふ事を評して居ります。

次にトルストイを見ますと、トルストイは現代に最近の文豪でありまして、この人の偉さは歴史的に餘程大きなものだと思つてゐるが、單に文學的のみでなく宗教的に偉いと思つて居りますが、トルストイは寧ろ聖者を描く文學者と云ふよりも、トルストイそれ自身が聖者であると云つていゝと思ひます。その二十代、三十代の時には世間的に交渉があり、有ゆる人生の矛盾も罪惡も経験してゐると思ひますが、——その晩年に至りますと、

晩年程神々しくなつて、トルストイそのものが聖者の一人となつて居ります。聖者そのものであると云ふことが晩年のトルストイには言へると思ふのであります。而してその晩年の教訓的小話、これぞトルストイの作中の寶玉だと思つて居ります。藝術的、文學的には「アンナ・カレーニナ」「戦争と平和」等と云ふ最高の作品がありますけれども、宗教的に見て、人格的に見て、あの晩年の小品は良いと思ひまして、そのほとんど總てが聖者が描ける聖者として現はれてゐると見てよろしいと存じます。それとは別に、「神父セルギー」と云ふやうなのが、遺稿に現はれて居りますけれど、トルストイの死んだのは八十三歳の時でありますから、晩年の作品でありませうが、修道院の高僧「神父セルギー」を取材して書いて居りますけれども、この高僧はユーゴーの描いたミリエル僧正のやうな高僧と違ふ。例へばその修道院生活に入りながら、高僧の位置にありながら色慾に絶えず悩んで、さうして遂に自分の指を切つたりしてこれを

斷滅しようとしてゐる。これは現代的なものでありまして、血も肉も通つてゐる聖者を現はしてゐるもの、文學の方面のトルストイの特色であり、合せて現代文學の一つの特色であります。其處でトルストイはあの年になつても、八十にもなつてあゝした情慾の世界が判る。それ故に情慾に對しての精神的苦しみがある。其處に我々が矛盾を感じるのであり恐しさを感ずる。八十にもなつて愛慾の世界があつて判ると云ふ力には、これは道徳といふものを離れて偉いものだと思ふを得ないのであります。併し前に擧げた教訓小話に到ると、この境地を全く解脱してゐる、人間トルストイを離れて聖者トルストイを見ることが出来ます。

それから、この頃は餘り騒がれませんが、やはり近代の名作である、ポーランドの文豪シエンキエーイツチの「クオーヴァヂス」と云ふ小説がある。ネロのキリスト教徒迫害時代のことが書いてある。活動寫眞にも出て居りまして往々見ることが出来ますけれども、

この作はユーゴーやトルストイとは少し違つた解りいゝ小説でありまして、その中の色々の人物の情緒纏綿たる處を取り合せて居りますけれども、その中に雲中の電光のやうな聖者の姿が隠見して来る。どう云ふ聖者であるかと云ふと、ポーロと云ふキリスト教の聖者が點出してある。あの書き方はいゝと思ふ。聖者を無理に出さないで點出して居ります。ポーロと云ふ人はキリストの弟子中での異彩であつて、タルソといふ處の天幕職工で、傳道をして居りますが實に素朴な野趣満々たる使徒であります。それが例へばネロ皇帝の非常に豪華華麗を極めた行列の見物の中へちよつと點出されてゐる。さうすると、雙方の對象が甚だ生きて来る。それからペテロを出してゐるが、あまりに烈しい迫害からのがれ、同志を捨てゝ去らうとして羅馬の街道を進むと、その前に白衣のキリストの姿が現はれてバツタリ行き會ふ。驚きひれふして「主よ、いつこに行き給ふクオーヴァヂス」といふ。基督が「汝がわが愛子を捨てゝのがれんと

するが故に、余は再び十字架に釘けられんが爲に羅馬に行かんとする也」といふ。その一節と云ふものは何時讀んでも感激せざるを得ない。他の處は忘れてしまつても、この一節だけは繰返し繰返して讀んで感激に堪へない次第である。どうも聖者を描くには、聖者を眞向きにしていけないやうです。大きな物は刺戟がなくて、大きな人間を描く事は難しいやうに、聖者といふ我々凡人を脱してゐる處の人格を描く事は餘程難しいのであります。法然上人を日本でも劇としては露出的に表現するといふやうな事は至難なことでありまゝ。日本の宗教的人格としては、文覺上人を程度と思ひます。文覺上人と法然上人と何方が偉いとか大きいとかと云ふ事ではなく、法然上人の如きはそのまゝで小説や劇で現はせる處のものぢやない。もし、それをしようと思へば周圍を描いておのづからその内容を浮き上らせるといふ手段方法にするより外無からうかと思ふのであります。さて餘り大きいと忘れるといふことは前に

もありましたけれど、十圓二十圓の財を人から恵まれても感泣する人が多年親から受けた大恩を忘れてしまつて、親不孝をすると云ふ倒態現象はよく世俗に有り勝ちでございませう。忘れられると云ふ事は、そのものゝ大きさを暗示すると云へない事も無いけれど、人間としては恩は恩として忘れしめないやうにしなければならぬ。例へば親鸞上人の如きは色々の形で藝術化されて居りますやうで、所謂大衆的に大に宣傳もされ理解もされてゐるにかゝらず、更にその親なり、師匠であ

行誠上人自畫讃 (三)



なす時のゑんまが
ほとは義理わるし
地獄でほとけ

恩をおもへば

り、更にそれより大いなる處の法然上人に就ては一般的には認識が屈いて居らない。あゝいふ宗教的大人格に就て日本國民一般として自己認識が足りない過ぎる點はある。この點は從來日本人の缺陷でありまして、たとへば十三世紀以前、歐羅巴平原は蠻族の馬場でありました際に、日本に於ては聖德太子の「憲法」がある。なほその前後にわたつて「萬葉集」の如き最上の文藝を持つてゐる。斯ういふ事の自覺に於ても日本人は足りない過ぎた。近頃は日本精神と云ふことが喧しく謂はれて大分日本精神に目覺めて來ましたことは結構であります、其の骨髓を得るの日まではまだ相當に時間があるだらうと思ひます。「法然上人讃仰會」と云ふものが生れましたのも、日本人に此の自覺を喚び起させる大きな使命の存するものと思ひます。日蓮上人、弘法大師と云ふ名は、子供まで知つてゐるが、法然上人と云ふ名は、さまで通俗的でない。それをよく導くために先覺者が斯ういふ會を作られたといふ事は、日本文化のために

喜ぶべきことでありまして、我々の如きも一兵卒として出来るだけの事は働きたいと感じてゐるのであります。或る時、私は歌舞伎座に参りまして、一寸立見をした事があるのであります、その時歌舞伎十八番か何かのうち「解脱」といふ芝居であつたと覚えて居りますが、文覺上人が向ふから出て來て、景清の亡靈に向つて言はれる臺詞が「我は文覺上人なるぞ」と自分で名乗りを揚げた、上人とは敬稱である、それを自分で用うると云ふ事はどうも――すべて高德の人物を現はすに此の調子では困る。私は前に「黒谷夜話」と云ふのを書きましたけれど、あの源平兩家争闘時代のあの烈しい潮流のうちに有らゆる思想と人物が現はれて居りまして、それが到底欣求淨土厭離穢土といふ方向に流れ、遂に南無阿彌陀佛に歸一してゐるのであります。人格的には法然上人で統一されてゐる時代なのであります。有ゆる事件人物が纏綿として居ります、それを描いて行けば、おのづから欣求淨土厭離穢土の觀念が現はれ、法然上人

といふ人格が浮き出さなければならぬ、私はそれをしようと思つて「黒谷夜話」を書いて見たのでありました。

右にいふやうな次第で日本の文學には聖者を現はす文學と云ふものがまだ本當にありません。今のやうな文學では一寸したものは出来ても、決して大きなものを求める事は出来ない。官能的の描寫を描くことは相當上手でも、全人格を暴露し得る書き手が無い。文學に於ては大人物を描くことのみが大文學では無い、下らない人物を描いても人生の秘奥を示すことは出来る筈ですけれども、それを示すにはそれだけの頭と腹と腕が無ければならない、まして英雄や聖者をやです。

(昭和十年六月七日、大正大學に於ての講演)

愚者と言へども自らその愚を知らば遂ひに善惡を得るに至るべし。愚人にして自ら智と稱せば、これを愚中の甚だしきものなりと云ふ。

(法句經)

◆法然上人鑽仰會規約抜粹

●會員

○どなたでも會員になれます。

○入會申込書と會費年額金一圓とをお送り下されば會員になれます。

○會員には雜誌「淨土」と會報「法然鑽仰」とが配布されます。

○會員は其他いろ／＼な本會の特典が受けられます。

●支部

○どこでも會員五名以上集つたら本會支部を作つて下さい。

○支部の責任者と所在地と會員名を書いて送つて下さればすぐ本部に登録します。

○支部は本會の活動の素となる細胞です。

○支部では信仰座談會、研究會等を開き本部から講師の派遣が得られます。

●どんな事業をするのか

刊行物

△面白くて知らず／＼に信仰が得られる
大衆雜誌「淨土」月刊

(一部金拾錢 會員一ヶ年金壹圓)

△機關誌「法然鑽仰」月刊

(一部金五錢 會員無代配布)

出版物

文藝家の手になる大衆讀物「法然上人」。
學者の手になる平易な「法然上人の信仰」。
其他有益な刊行物。

催物

「法然上人劇」大劇場にて華々しく上演。
各地に於ける「大講演會」。
「法然上人鑽仰大展覽會」。
着實眞劬な「信仰座談會」。
「研究會」等、其他機宜に應じて大日本の淨土化に全力をそゝぎます。

子もい

お使ひ

三郎君は球投げに夢中だ。金ちやんはうまく受取る。三郎君と二人で、もう二十回位ひ投げ合つたのに二人とも一つも落さない。こいつは調子が良いぞ！

『三郎君！一寸煙草を買つて来て呉れ給へ、バットを二つだよ。』

三郎君の家の二階に住んでゐる書生さんの中村さんが、突然うしろから、聲をかけた。三郎君は球を受けて、『あゝ、良いよ、』と云つてからお金を受取つた。中村さんはまた直ぐ家へ入つた。三郎君はそのお金を傍のゴミ箱の上に置いてまた球投げた。こんなに二人ともうまくなつてゐる時に止められるものか。

『もう少し離れてやろうよ』

二人はまた少し距離を遠くした。こん度は少し力を入れなけりや。金ちやんは仲々肩が良いぞ、負けるものか。あんまり力を入れたので、二人とも汗でびしょ／＼になつて仕舞つた。とう／＼三郎君の球が見當をはづして、金ちや



んの頭の上を高く越えて、遠くの方へすつ飛んだ。

『御免！ 々々！』

と云ひながら、金ちやんと二人で球を追ひかけた。元の處へ歸つて來た時には二人とも少し疲れた。

『アッ！ そうだ。中村さんの煙草』

三郎君は慌てゝゴミ箱の上のお金を取ると、

『少しまつてゝね』と云ひ乍ら向ふの煙草屋へかけ出した。バットを二つ持つて中村さんの部屋へ上つて行つた。中村さんはお客さんとお話をしてゐる。

『随分早かつたね！』

煙草を受取りながら、中村さんはぶつきら棒にかう云つた。三郎君はおやッ！と思つた。早かつたかしら、だつて金ちやんとあれから十分位ひ球を投げてゐた。それから煙草を買つて、早いのかしら。中村さんの顔を見たが、すましてお客さんと話してゐる。

三郎君は下へ降りて行き乍ら不思議な氣がした。早いつて、本當なのかしら？ どう云ふ譯なのだらう？

外へ出て金ちやんの顔を見た時やつと氣が付いた。——あゝ、そう

だ。中村さんは僕が遅かつたものだから、故意とあんなことを云つたんだ。なんだ、それなら遅いと云へば良いぢやないか。……

三郎君は胸に急に何かうんとこさ詰め込まれたやうな氣持になつた。

金ちやんはものも云はずに、眞面目くさつた顔をしてゐる彼を不思議そうに見てゐる。

三郎君はそれから中村さんが嫌ひになつた。(大木三太郎)

試験

『君に聞いて置くが、君は僕を愛してゐるんですか、それとも僕の財産を愛してゐるんですか？』

『どうしたの、急にそんなことを云ひ出して？ 私に對する信頼を失つたの？』

『いや、財産を失つたんだ。』

諸國綺談

編輯部

與次翁と三狐

往昔洛西の妙心寺の邊に與次と言ふ老翁がゐた。

此の翁は久しく鰥寡しで、世渡り上手ではな
いが正直で素朴を貴み、心の欲するまゝに暮し
てゐた。

又其の頃宗丹と云ふ老狐がおつて、その住み
家は解らないが、妙にこの與次と馴れ親しんで
年久しい間共に船に乗つて遊んでおつた。

この狐は千年の齡を経ておると云ふが、博學
多才に藝能を兼ねる珍らしいものであつた。だ
が昔の源平の合戦などは能く様子を知つてゐ
た。

或る時與次がその合戦の大略を見せて呉れと
宗丹に云つた所、その老狐の申すに、

『それは他易いことだが、曇天の日でなければ
具合が悪い。殊に餘人に見せることは禁物、只
翁一人に限つてお見せしよう』と。

そこで翁は頻りにその日の來るのを待ち受け
てゐたが、霜月下旬に至つて、天氣朦朧として
併も雨のない日に出逢つた。

今宵こそ豫て待ちたる日だと見えて、忽然と
して宗丹が現はれ來つて、

『此の夜、我が術を見せるに最上の時である。

いで一の谷の合戦の様をお見せ申さう』と軒外
に出ると等しく、敵味方の軍勢現はれ、或ひは
打ち合ひ、或ひは組合ひ、分捕高名鑿劍の音凄



本當と知つたら

船がヨーロッパから禁酒國ア
メリカの埠頭に着いた。一人の
男が一本の瓶を手に持つて税
關吏の前におづ／＼立つてゐ
る。税關吏は烏散臭さうにその
瓶を見てゐる。

『これは唯の酢酸なんですすよ。』
とつぶやいた。『ふう？』と税
關は云つて、その瓶を取ると
ぐつと一息にのんだ。ところが
矢張りそうだった。

うれしのあまり

『オールドミスの山田さんが、
男つぶりの好い金満家に結婚
を申込まれた時、直ぐ返事しな
かつたんだつて？』
『そんなことあるかしら！』

まじく、矢の飛ぶこと雨の如くであつた。翁こ
れが爲めに大いに膽を冷した。やがて宗丹が元
の座に復すると、又元の如くに寂然としてゐ
る。興次は大いにその妙術を嘆稱して、宗丹に
向つてその勞を謝した。

宗丹が重ねて云ふに、

「予に斷金の友がある。大和源九郎と今一人は
おたつ狐である。近い中に連れて来て翁に會は
せてやる。だが決して人に洩し給ふな」

と堅く約して分れた。

約束の日になると、約を守つて三狐が入つて
來た。源九郎と云ふは優美の男子、威あつて猛
からず、おたつと云ふは毛繕西施を欺く美婦で
ある。各々座定まつて、互ひに禮終り、宗丹が
おたつに向つて琴を所望すると敢て辭せず一曲
を奏した。妙手妙音凡ならず、又源九郎は三絃
を取つて長歌端歌兩三曲、おの／＼堪能の達人
である。

翁は無能の木訥、低頭平伏只感に打たれて聞
いてゐた。曲終つて暫し雜談に時を移したが、
禮儀正しきこと君子の如くだ。これから翁は愈

愈三狐を敬つて世の薄情な交りを避け雪月花共
に此の三狐を友として餘年を樂んだと云ふ話で
ある。

頼まぬ使者

近江國三州竹林院の僧正、或る時泉水の邊り
で狐共の遊ぶのを眺めておつたが、その狐は玉
石を好むと見えて鶏卵の如き石を弄んでゐ
た。と、四五人の若侍が竊に後に廻り、急に大
聲を發して罵つたものだから、狐共は驚いて彼
の玉を捨て、逃げ去つた。そこで、拾ひ上げて
見ると、如何にも圓く白い美玉である。夜に入
つてこれを見ると、その光り具合が正しく世に
謂ふ狐火である。されば得難いものと大に珍重
して秘藏して置いた。

ところが、それから毎夜狐が僧正の居間の戸
を叩いて「玉を返し給へ」と泣く。僧正は彼の
侍を呼んで、玉を返してやれと云つたが、こ
れは末代の寶だからと云つて容易に返さない。
狐の方は毎晩根氣よくやつて來ては玉を返して
呉れと云ふ。そこで僧正は嚴重に侍に申渡し

「でもね、意識を回復したら
直ぐ承諾したんですつて。」

祝へ誕生日

乞食「奥さん、二日も飯を戴
けぬ憐な者で御座います。すみ
ませんが、お菓子が御座いまし
たら恵んで下さいまし。」

女「お菓子だつて？ パンで

澤山じゃないか。」

乞食「普段はそうで御座います
が、相傳今日は私の誕生日な
んでして」

商賣商賣

店員「いまお客様がこの純
毛で縮まないプレザークートつ
て云ふのは本當に縮まないのか
つてお尋ねなんですが」

支配人「その服は良く合ふの
かね」

店員「いや、少しだぶ付いて
ゐるんです」

支配人「じゃ、縮むつて云ひ
なさい！」

たので、侍も今は是非なく、残念とは思ひ乍らも玉を僧正に渡した。その夜又来て戸を叩いて玉を乞ふので、僧正が玉を持つて外に出て見るに、定かには見えないが、老人體のものがそこに佇んでゐる。僧正が玉を渡すと、手から手に受取つて押載いて一禮して立去つた。

その後七八年を経て僧正が八十歳に及ばれた時、病を得た。醫師の手當ても十分に盡したが、老衰のことゝて全快は覺束ないと思はれた時、僧正の生國奥州白河にゐた舎弟、その外親戚七八人が寺へ来て云ふに『去る幾日かの日に御使ひを戴き驚いて夜に日を繼いで上つて來た』と云ふ。皆の者は使ひと云ふも心當りのないことであるから、奇體なことゝ誰れ彼と吟味して見たが、寺から使ひを出した覺へは一かうにない。

白河の人々が云ふには『先月某日確かに御使者があつて、名も某と名乗り、供人も五六人引連れての御口上、この度の僧正の御病氣は全快覺束なし、來月某日頃には遷化するべければ夫より以前にと存じて罷り上りました。血脈故、名残り惜しくも思はれませうと存じ、誰々

を伴ひ参りました、と云ふて、拙者の家にそのお使ひの方々御一泊あつてお歸りになられた。それだのに當寺より御使ひを差出された覺えがないと云ふは、誠に不思議である。』と云ふて僧正に對面、故郷の物語、並びにこの度の使ひの怪しきことなど残りなく語つた。

やがて僧正にはその翌日、即ち前に使者の告げた遷化の日に當つて、懇に暇乞をなして入寂し給ふた。思ふにこれは七年以前僧正が玉を狐に返した恩報じになしたものであらうと云はれてゐる。

不思議な志の餅

文政十年の夏大阪のある人が來て、今日は不思議な志の餅を買つたと云ふ。何事かと尋ねると猫の百回忌だと云ふ。その來歴を問ふに、昔或る家に一人の娘があつた。年十六歳の時家に飼つておつた雄猫が娘に付き纏ふて少しも離れない。父親はこれに心付いて大いに腹を立てて、年來飼置いた恩を知らず、娘に見入つたと見える、殺して仕舞つた方がよいであらうな

八月の行事

一日 八朔△日清戦争宣戰布告記念日

七月十五日の豐島沖の海戰で日清間事實上の砲火を交へたが宣戰の詔勅が下されたはこの日

六日 慶長十六年この日、切支丹宗が徳川幕府によつて禁止さる。事實上この禁止が如何に困難であつたかはこの後の歴史が語つてゐる。

八日 立秋△畫僧雪舟没す。

雪舟を知らない人は先ずない。雪舟と云つて早川雪舟ではない。永正三年周防山口の雲谷寺に没した。山水を描かしては無双の畫僧

十日 西鶴忌△精靈迎へ六波羅珍皇寺(星下り(大阪中山寺)盆會(大阪天王寺))

どと竊に語り合つてゐたのを、いつの間にかこの猫が聞いたのであろう。或る夜主人の枕元に來て人語をなして言ふに、

「私が娘殿に見入つたとお疑ひなされおられるのは如何にも残念でございます。決して左様なことでは御座いませぬ。この家の藏に年經た大鼠がおります。この鼠がお娘御に見入りました故、暫くも私が附添つておりませねば忽ち變事が起るであらうと存じましてのこととでございます。すれば、御疑念は御晴し下さい。だが、その鼠は私一匹にては中々叶ひませぬ故、安治川何丁目何某と云ふ家にブチと申す大猫が飼はれてをります。この猫をお借り下されば私と二匹にて彼の鼠を平げ申しませう」と云ふかと思へば夢が覺めた。

あまりの不思議に家内に語り、翌日早く起きて安治川に至り、その家を探ねると直ぐ解つた。その家の主人に會つて、我が家の飼猫の告げた事柄を話してその猫を暫くお借りしたいと云へば、最安きこと、連れて參られよと快く貸して呉れたので連れ歸つた。

その夜二匹の猫を藏に入れると暫くして恐ろし物音がして、又静かになつた。家中の者が寄つて戸を明けて見れば猫と鼠と三匹取組み合つて片息になつてゐるので、先づ鼠の止めを刺し、よく／＼見ると大きな猫程もある大鼠であつた。さて残りの二匹の猫には人參など飲ませて元氣の回復を計つたが、次第に弱り終ひには二匹とも死んだ。依つて鼠は川へ流し猫は寺へ惡に葬つたと云ふ。

モモングワア

ムサ、ビといふ獸は一名鳥野食といふ。大きな毛色とも鼯鼠に等しく、肉翅ありて爪あり、これを張らば翼となり、收むれば足の如く蝙蝠に似たり、面長く髪あり、尾は七寸許りにてよく果實を喰ふ。手を以て物を握ること鼠の如し。晝は深山に隠れ、夜出で、夜行の人の炬火を限つてこれを消す。その烟花を吹消す所より、妖怪なりとて人之を恐る。今は訛りてモモガ又はモモングワアと呼ぶ。小兒を怖す言葉はこれより始まりしなり。

元祿六年西鶴没す。一代男
その他好色物、武家物、町
人物を描いて徳川時代の小説
に一生面を開いた。

十三日 全國中等學校優勝野
球大會、朝日新聞主催で甲子
園に開かれる。またフアンが
いそがしくなる。

十五日 放生會△常濟大師忌
△八幡祭△那破翁生る。

解らないものである。あんな
赤ん坊がヨロツバを引つか
き廻した

十八日 豐國祭(京都)長田
神社祭

廿三日 一遍上人忌△樺太廳
始政記念日

一遍上人は時宗の開祖、諸國
を遊行して融通念佛を説く正
應三年入寂。

廿四日 處暑△廿六夜待△ヴェル
ダンの激戦(一九一六年)

卅一日 大正天皇御誕生日△
軍神橋中佐忌

中村辨康

(愛知縣 關晶子)

します。(巢鴨 一學生)

(問) 無靈魂主義の佛教ではなにが未來往生をし、死者に對しての何に回向するのでせうか、明確なる御返事をお願い致

(答) 佛教が無靈魂を説くものである事には異存ありませんが、それも一般人が間違つて考へて居るやうな個在的な靈魂、例へばフハフハ飛んで歩くと云ふやうな謬想の靈魂を訂正せんが爲に云つて居るのです。その反對に無靈魂と云へば直ぐ何にもないと獨斷するやうな謬想をも否定するものです。有無の二邊に捉はれて居るものが徒らに理窟を振り廻す其の小賢しい小癡な態度に對する一大痛棒として一應無靈魂を喰はすのが佛教の特徴でもあるのです。然し佛教ではまた他面に業力と云ふものを肯定致します。淨土の法門ではこの業力に縛られ

信 仰 相 談

て「我」と執し「我所有」と執してぬきさが出來ずに居る者を如來への大執着に變へしめて自由を與へるのが即ち念佛なのです。だから御經には一執持名號一心不亂其人臨命終時即得往生阿彌陀佛國」とも云つて居ます。理窟より何より先づ以て念佛して信仰に入つて見るのが早手廻しです。貴君のやうな宗教學生は法然上人の「學匠骨になりて念佛や失はんずらん」と云ふ状態にならないやう御注意が肝要です。また回向と云ふものも自分が本當に信仰に入つて自分本心の満足し得る諸經や念佛が出來ななくては畢竟形式丈でナンセンスかも知れません。願以此功德の此功德と云ふ自覺なくして回向は出來ない筈だからです。だが少くとも諸經や念佛に依て心が清まり且つ幾分でも信仰増進が自覺され得るなら回向は出來る譯です。先づ第一には十方法界に回向し、次には志士者の菩提の増進に資せんと回向するのです。無と云へば無に提はれ有と云へば有に提はれる理窟つばい無信仰の人には理窟で反省を促したとて、理窟は元來不完全なものですから、直

ぐ更に理窟で押し返へして來るでせう。だからそんな人には寧ろ早く理窟を捨て、實踐に入るやうに回向をして上げる方がよいのですが、中々感じがにぶいから御分りにはならないかも知れません。兎に角一心に念佛して下さい。念佛の信仰に入つたら直ぐ疑問は解消しますから衷心より御すゝめします。

(問) 私の御父様は家運の挽回に一生を盡くして遂に宗教も知らずにあの世に逝かれました。私達は涙乍らに出來る丈の御葬式もし御回向もして居るのですが、之れで果して救はれて居るでせうか。御教へ下さいまし。(駿河、一女性)

(答) 誠に御氣の毒でした。一生涯を御家の爲めに盡されて、御亡くなりになつたのですから、死しても亦た銘すべきものがありませう。然し御信仰に入つて居られなかつたのですから、一遍の御葬式一遍の御法事丈で直ちに佛果を得られるか何うかは疑問だと存じます。一體回向と云ふ事は、普通に御經なり御念佛なりを死者に手向けると云ふのでなく、御經を讀み御念佛して自

分の信仰が僅へ僅かであつても増進した其功德を自分のものとせず全部を捧げて志す死者に廻らし向けると云ふ處から一回向」と云ふ言葉も出來て居るのです。此故に御經を讀み、御念佛をして自分の心に確認し得た功德がなくては振り向けやうにも振向けられないのです。隨て回向する人としては本當に眞誠に至誠を籠めなくてはなりません。だから單に御寺の御住職にのみ委せず、其場合は遺族も親戚も心を併せて各自の信仰を養ひそれを全部集めて回向なさるのが本當であり、且つ法事其物の効果を多からしむる所以でもあります。かくして行けば御父様の御菩提も必ず御増進なさることと存じます。

「信仰相談」への御質問を歓迎します。但し次の事項を御守り下さい。

(係)

- (一) 質問は端書に認め、表に「信仰相談」と朱書すること。
- (二) 紙上匿名は差支へなきも、御住所御姓名を名記すること。
- (三) 信仰上の眞面目な質問であること。不眞面目なものは一切採りませぬ。



人間學の立場から

三 木 清

私が生れた地方は眞宗の盛んな所で、私の家も眞宗である。亡母は熱心な信者で殆ど毎晩佛壇の前で讀經してゐたので、私も子供の頃、いつのまにかそれらの經文を暗誦できるやうになつた。そんな次第で學生時代にも親鸞上人の書かれたものは特に愛讀し、また近角師の歎異鈔講義など屢々聽聞したことがある。後年私が『パスカルに於ける人間の研究』といふ書物を出したとき、親鸞の教に似たところが多いいといふ批評を、二三眞宗の學者から聞かされたが、多分それは私が上人のものを讀んで得たものがそのうちにおのづから現はれたのであらう。そのやうな批評に刺戟されて、當時私は親鸞の人間學といつたものを詳しく調べて書いてみたいと考へたこともある。今日も私が哲學

のうち人間學に特別に深い關心を有するといふことは、子供の頃からの淨土教的思想の影響によるのであらう。そのやうな關係で法然上人に對しても、淨土の法門を我が國において初めて眞に宣明された方として、かねて景仰してゐる。『歎異鈔』の中に「たとひ法然上人に賺されまゐらせて念佛して地獄に墮ちたりとも、更に後悔すべからず候」とあるのは、他力の信念を語るものであらうが、さう云はれてゐる法然上人は、よほど偉い人であつたに相違ない。私が他力の信仰に心をひかれるのは、何よりもそれが人間の現實を深く理解した上で立てられたものであるためである。廣く佛教といふうちには、勿論種々の高遠な形而上學的思想が含まれてをり、哲學の研究者としてそれにも興

味を持たないわけではないが、しかし私が特に心をひかれるのは、それが深い人間理解を有するといふことである。

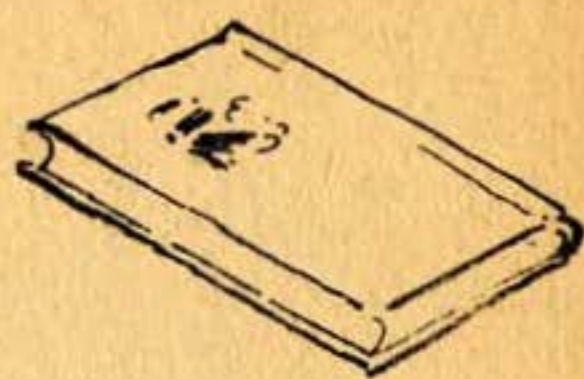
そしてこの點において淨土教の思想はとりわけすぐれてゐるのではないかと私には思はれるのである。佛教に達するために人間論から出發したのがその特色ではないかと思はれる。法然上人が「ここに我等如きはすでに戒定慧の三學の器にあらず」と云ひ「十惡の法然房、愚痴の法然房が念佛して往生せんと云ふなり」と申されたのは、人間性のどんな底を見究めての言葉である。凡入報土の思想の根柢には人間の現實の深い洞察がなければならぬ。

今日人間についての科學的研究は非常に進歩した。またその學問も人類學、生理學、心理學、社會學等、いろいろ分化してゐる。これら多種多様の知識はもとより我々にとつて決して無益ではないであらう。しかし我々が自分自身の生活を省みるとき、如何にそれらの知識が一面的で、抽象的であるかを考へずにはゐられない。現代哲學において現實の人間の具體的な研究を目差す人間學といふものが起つたのもそのためである。このとき佛書を開くならば、如何にそれが深く我々の現實を見究めてゐるかに驚かれ、畏

れられるのである。「苦惱の時にあつては、外面的なる事物に關する學問は、人間についての學問の無知から私を慰めぬであらう」とパスカルは云つた。宗教は單に何を爲すべきかを教へるものではない。それは人間が現に如何にあるかを理解せしめる。現に如何にあるかといふことから何を爲すべきかが従つて來るといふのではない。何を爲すべきかを離れては現に如何にあるかも本當には理解できないといふのが人間の存在である。信仰を除いては人間についての知識は完全であることができないのである。

宗教の眞理性を證明するために學者は種々の議論をしてゐる。しかし私には宗教の眞理性は、それが人間の現實を何物にもまさつてよく理解させるといふことによつて示されてゐると思はれる。そのやうに具體的に、眞實に人間を理解させるものが他にあるか。もし宗教が人間の存在を最もよく理解させるものとすれば、宗教は眞理でなければならぬ。

日本佛教史上、佛教徒の眼を人間の問題に向けさせ、人間論と宗教とを内面的に結合した偉大な思想家として、私は法然上人を景仰してゐる。



お經を聞いて

高村光太郎

私は世にいふ信心家ではない。亡父は並々ならぬ觀音の信者で、しばしば、亡父自身
が火中から救ひまゐらせたといふ元本所五百羅漢寺にあつた松雲元覺禪師作るところの
聖觀音木像の前に立つて合掌默念してゐる姿を見かけた。私は佛像の前に立つて合掌默
禱する念を持たない。亡父は觀音像を製作する事に無上の歡喜を持つてゐたが、私は佛
像を曾て作らず、又今日でも作らぬ。自分が心から禮拜する事の出来ぬ佛を敢て刻むの
は佛に對する冒瀆としか思へぬからである。佛像の形相をただ藝術上の技術で作るだけ
ならば勿論私にも出来る。藝術的價值はおのづから其處に生れも爲ようが、佛は恐らく
そんな價值を喜びたまはぬであらう。私が心身を傾倒するのは自然そのものになり、觸
目の自然が包むその奥所こそ私の祭壇なのである。私は飽くまでも人間を作り、自然を
描く。

さういふ私が昨年父を失ひ、引いて寺院との縁を多く持った。お寺に坐つてお經をし
ばしば聴いた。私の家は淨土宗なのでそのお經を一番多く聞いた。其外亡父は天台、眞
言、曹洞、法相等の諸宗の大徳から追善の供養をうけた。従つて私もそれぞれのお經を
きいた。亡父に對する私の哀惜の念と、死別に對する私の自然諦觀とは、私自身にとつ

達人の境地

徳川三代將軍家光の時世のこと。或時將軍が申
樂の巨匠觀世大夫に舞を命じた。丁度その席上に
神陰流の達人柳生但馬守の姿を見出したので、

「どうだ但馬、觀世の所作によく目をつけてゐ
て、もし彼の心に透間が出来て、こゝなら斬れ
る、といふところがあつたら余に知らしてくれ。」
かう家光公が話かけた。そこで但馬守は觀世大
夫の舞を始めから終りまで熱心に見物してゐた。
済んで、

「どうだつた？」の問ひに、但馬守は謹ん答へ
た。

「最初から心を配つて拜見してゐたのですが、な
か／＼私如きに覗ひどころを與へてくれぬやうで
す。たゞしかし舞の中、大臣柱の方で隈をとる時
になつて太夫に少しばかり隙が出来たと思ひま
す。あの所で斬れば斬りすてられたと信ずるので

ては寺院と何の關係も無い事であつたが、信心深かつた亡父が斯ういふお經をあげられてさぞ満足であらうといふやうな氣はした。私は元來人は死んで自然の元素に加へるといふ一事のみで實に清淨な、肩の軽くなるやうな歡喜を感じる者であるが、さすがに父が死んだ時はまだそこらに見えない父が居るやうな氣がして、お寺のお經を父もきいてゐると思ひたかつた。それでも正にいふとお寺に坐つてゐる私にとつては、お經全體が音樂となつて耳に入り、法要の儀式が造形的の美となつて眼に映るのであつた。坊さんの列の後ろの親族席といふのに坐つて袈裟の皺襞の美しさ、讀經する坊さんの合唱の美しさに打たれないわけにゆかなかつた。法要の時のお經は死者に對してよりも生き残つた者等に對して多くの意味がある様に思はれる。お經全體としての音樂は不思議な魅力を以て人の傷心を和らげ、死生の執着心から人を脱却せしめ、更に人の生命力と宇宙に充滿する自然力との微妙な融合を悟人せしめ、自他の對立から人を開放して魂の擴大を自覺せしめる絶對境に人を導き入れる。それ故向うにゐる佛にむやみにお辭儀する禪宗のお經よりも、ひたすら佛の懷に抱かれてしまふやうな淨土宗のお經の方が私には快かつた。お辭儀するうちには自分の存在がまだあるが抱かれてしまふと何にも無くなる。……の時に臨んで心顛倒せず心錯亂せず云々の例の文句をきき、おしまひに念佛專念の南無阿彌陀佛の無限の繰返しをきいてゐると、いつのまにか自分でも南無阿彌陀佛を口の中で繰返しながら、ひろびろとした世界へ出てしまふ。さうして妙に勇氣が出て来る。生命のある限り專念に生き切つて爽やかに死なうといふ氣が自然に湧き起る。私のやうな無信心者でも此のお經の功德には感謝せずに居られなかつた。

高村光太郎氏は有名な彫刻家高村光雲先生の息、詩境に活躍せられておることとは既に人の知る處である。

す。」

一方、觀世太夫は樂屋に入つてから、弟子に向ひ「けふ見物の中に唯一人、ちつと自分の所作を睨むやうにしながら見てゐた男があつたが、あれは誰だか知つてゐるか？」と訪ねた。

「はい、あれこそ名高い柳生殿です。」

答へる弟子の肩に手をかけながら、師匠はしみじみ語つた。

「さうか、但馬守だつたのか。自分の所作を目もはなさず見つめていらしたわけが分つた。隈どりのところで少し氣がぬけて自分でもはつとしたが、そのときにつこり笑はれたので暫しどうにも顔が上らなかつた。果して劍術の達人だつた……」

後で家光公はこのことを聞き、大いに感心したさうである。

……

……

主 往 生 繪 會 日

記 住 幻 統



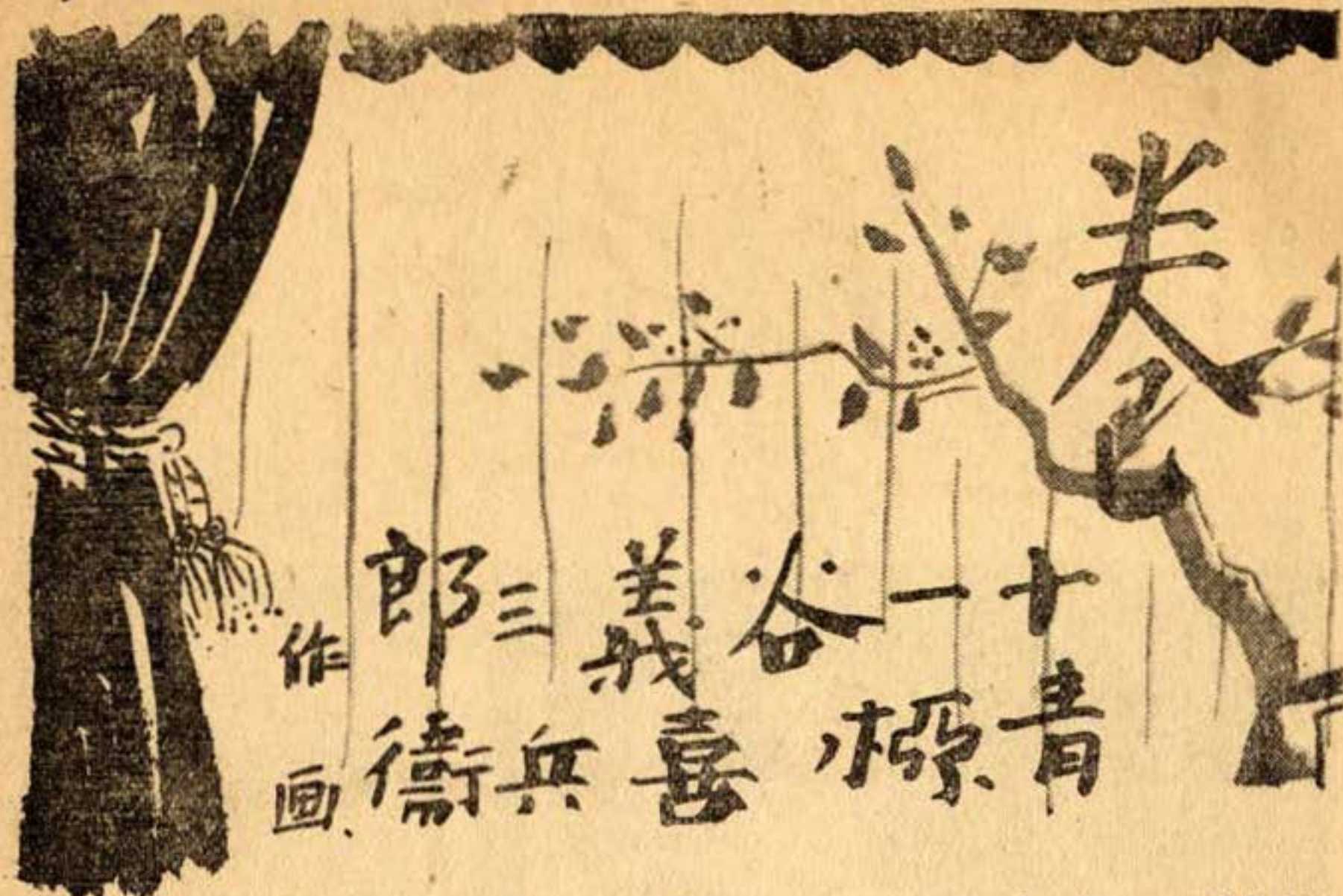
幻 住 記 (續)

小間物屋の惡魔が、無意識に連翹の花びらを撈り潰しながら、白んだ唇で世にも不思議な懺悔話をつづける——

——商人の事件以來、さまざまな人間がわたしの所へまゐりましたことは既に御承知のとほりです。その中にいゝ男が一人ありました。惡魔のわたしにとつてまことに好都合な男です。それは他でもありません。妻の臨終の際に招じ入れた懺悔僧です。それが来て、わたしに禮拜堂を建てるからこれ／＼の金高を喜捨しろと云ふ。喜捨など、云ふことは出来ないが、一時御用立するなら、御相談に乗らう。但し、それには利息も何も要らない。その代り向う半とし経つたら間違ひなく御返済願ひたい。もし御返済願へぬ節は、貴僧が聴問されたある死者の懺悔ばなしを、拙者の希望する時と處において、拙者にお打明け願ひたい。この條件さえ御承知ならば、なほ半年お待ち致さう……

坊さんが快承引いたしました。わたしも即座にそれだけの金を用立てました。さうしてその金に依つて、禮拜堂は出来あがつた。半年経つた。むろん、金は戻つて来ない。

ある日、わたしは、この懺悔僧と娘を連れて、北へ三十里ばかり離れたA市へ赴きました。さう……ある年の早春でした。連翹の花の咲くころでした。そのA市の、かねて調べあげてある、或る街の葡萄酒屋のまへで、



辻馬車を停め、坊さんと娘をそこに残しておいて、わたし一人、見世へは入つてゆきました。

わたしは先づ主人に面會しました。主人は軍人あがりらしく、肩幅のひろい、ぎごちない口をきく男でした。いや、場合が場合だけに、相手がわたしであつたがために、一層、さうした印象を残す態度をとつたものと思はれます。わたしを威嚇して、誤魔化さうとしたのです。

「馬鹿な！ さ、眼を醒ました、うちの極上ワインだ。ぐつと遣りたまへ。」さう云つて、盃を押しつけました。

「いや、乾盃は、あとのことにしませう。……ところで、あなたが否定なさるのは當りまへだ。誰だつて、他人の家内を墓穴から盗み出して、太陽の下で同棲しとるなど、白狀出来るものぢやない。」

「馬鹿！ き、君は、氣でも違つたか！ 教會へ行つて訊くがい。市役所へいつて調べるがい。僕の家内は、神の御名において、法の名において、立派に僕の家内だ！……」

「左様、それは、承知でまいりました。結婚式が、あの、彼女が慕へはいつた年の秋に外國でとり行はれたことも、彼女が、外國のある百姓の養女に仕立てられたことも……」

主人が蒼くなつて喚いて、戸口を指さしました。わたしはちつと椅子に凭つたまゝ、冷然とわらひ返しました。主人は、齒をむき出して、大跨に部屋を出たが、ちきにはたばたと、とつて返しました。その手に短銃を握り

しめてゐた。その腕に女がとり
 絶つてゐた——主人の亂暴を制
 めやうと、走りかゝつた女のか
 らだを、そのまゝ自暴に曳き摺
 つて、ふたゝび、わたしの前に
 現れたのです。

女は喪服のやうな黒いびろろ
 どの着物の、胸に黄金の小さな
 十字架の首飾りを垂れてゐまし
 た。それが、わたしを見るな
 り、ふいと立ち悚んで、小さな
 叫び聲を洩らしたが、おきに、
 おどろくほど膝の据わつた態度
 で、主人を振り返り

「どなたさまですか？」
 少し噎れた聲で、そう訊いたも
 のです。

「知らん！ おまへ、知つとる
 か？ 知るまい……！」

主人が、ひつつつた聲で、吐



き出すやうに云ふ。

女がうなづきました。

これあとも一筋縄ではいか
 ないと、わたしは見えてとりまし
 た。以前のわたしならもう矢も
 楯もたらぬところです。それが
 幸か不幸か、悪魔の修業を積み
 ました。わたしは、主人にわら
 ひながら云つたのです——

「御主人、まことに恐縮です
 が、ちよいとの間、奥さんを拜
 借いたします。いや誤解なすつ
 ちや困ります。わるいことは決
 していたしません。論より證
 據、ついそこで御見物願ひたい
 のです。いえ、なに、それほ



ど改まつて吹聴することもないんですが、わたしはカレツヂ時代から芝居が好きでして……」

「ヘン、どんな芝居をうたうと云ふのか、打てるものなら打つてみる！」

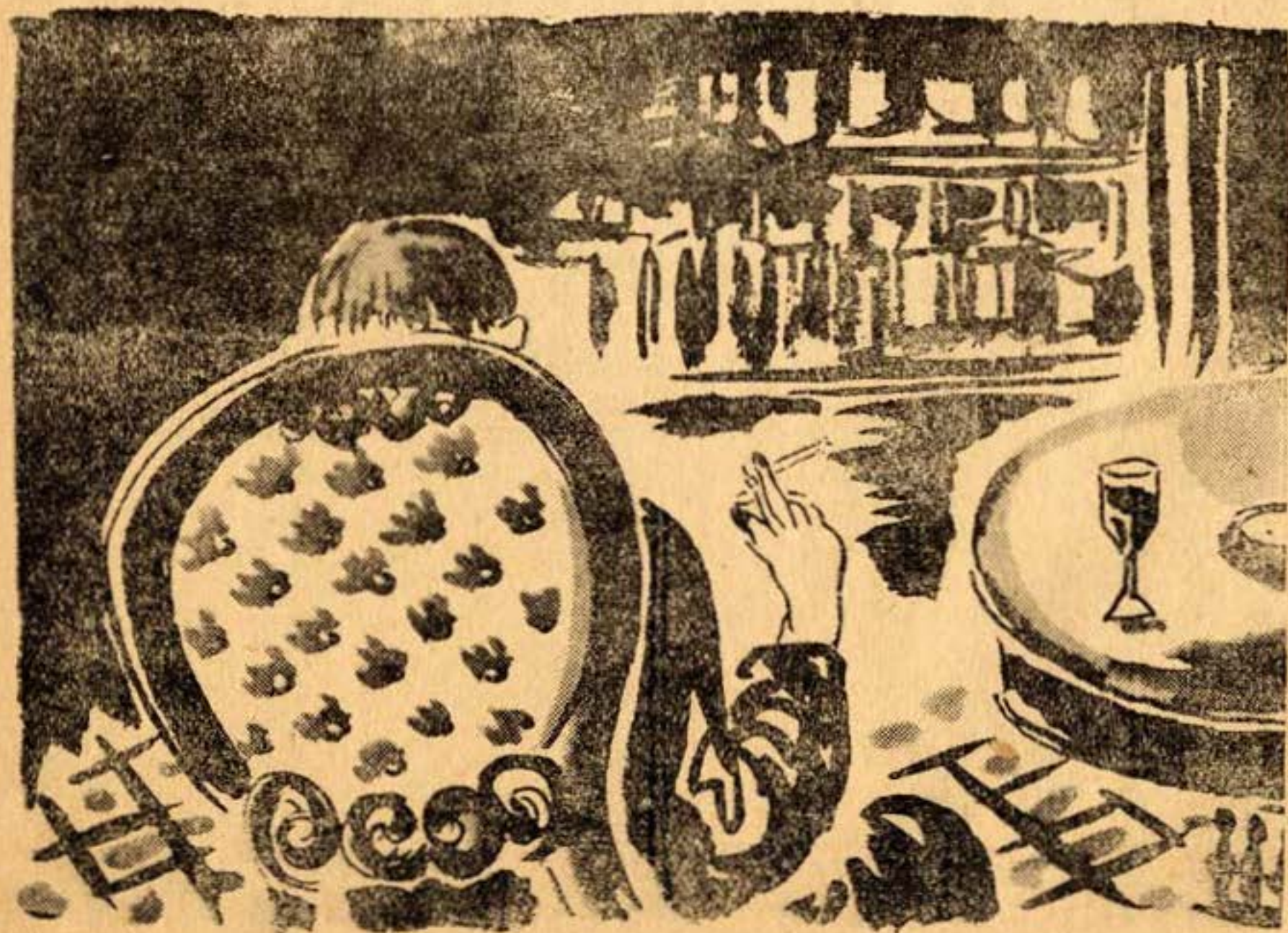
「いや、ありがたう。なアに、喜劇ですよ。」

それからわたしは、銅鐵のやうな意志で、わたしのうちに突きあげてくる激情をおさへながら、これでもか／＼と針のある言葉を、仕草を、女に投げつけました。あの、わたし達の幸福な結婚生活時代の、懐かしい言葉です。懐かしい動作です。

……ソフィ、いゝお天気だね、足の魚の目はどう？ はやく醫者に診て貰ふ方がいゝよ。なんだか、それだけ、おまへの美しさに疵がついてる氣がして、僕、心配なんだ。

(彼女はよく「魚の目」の苦痛を訴えたものなんです。)

……ソフィ、おまへ、ベッドに大變な忘れものをしてゐたね。おまへの好きな連翹の花の枝に、おまへの、美しい髪の毛が、ほら、このとほり、脱けおちてゐたぢアないか。ごらんよ。おまへのどのやうな一部分でも、僕には寶石なんだからね、かうして大事に紙に包んで、僕はうちぶとこに入れて持つて來たよ。ごらん。



わたしは衣囊からその紙包をより出して、その、柩に残つてゐた彼女の金髪を、指さきで撮んで彼女の眼のまへへ差出しました。硬ばつた彼女の頬がひくひくと動きました。主人が血走つた眼をわたしに据ゑて、短銃を苛々とひねくり廻しました。

……ねえ、ソフイ、おまへの好きなシモンズさんが見えたよ。お茶でも入れて、ゆつくりお話し。でも、おまへ、あんまり僕のこととは云はないでお呉れ。僕が好きだとか、僕がほんとに親切だとか……いくら、おまへ、シモンズさんが懺悔僧だからつて、ちつとは遠慮しなくちやア氣の毒だよ。僕もさうだけれど、おまへも、すいぶん正直過ぎやしないかね。そんなことを云ひながら、わたしはその窓の外に待たせてある辻馬車へ合圖をしました。例の懺悔僧がは入つて來ました。

「さ、シモンズさん、約束を果していただきませう。お判りの筈ですね。あなたが、臨終の床で聽かれたことを、神の名にかけて、ありのまゝに、こゝで話して下さい。あなたが立會はれたその死者が、こゝにゐる筈です……」

わたしは、坊さんの腕を掴んで、法官のやうに冷厳な調子で、言葉だけはそのやうに穩に申しました。女がほとんど

絶望的な眸をいつばいに坊さんに注ぎました。こまかい戦慄がその手に流れてをりました。と——坊さんが、醜もないほどろたへた聲で叫びました——

「おゝ幽霊だ！ 幽霊だ！」
聲と共に踵を返して、部屋を飛び出さうとする。

「シモンズさん！」

わたしは彼の腕をひき戻して、女の前へつきやりました。彼は土氣いろになつた額にたらたらと冷汗をながし、機械的に唇をうごかして、何かわけの判らぬことを口走りました。女が、ちきに落つきをとり戻して、その彼に蔑むやうな視線を注ぎます。

「へん、大變な道化方だなア！」

と主人が、嚙みつくやうに申しました。

「シモンズさん！ 約束ですぞ！」

もう一度わたしの促す聲に、漸く坊さんが話し出しました——

「夫人！ 僕はこの眼ではつきりと見ました。蠟燭の光が蒼ざめたお顔にゆらめいてゐた、云ひ様もない苦患のあとがそのお顔に刻まれてゐた。斷末魔のひとゝきの喘ぎ……いや、左様な肉體の惱みでは無うて、最後のきはまで背負ふて來た

魂の重荷に、ひしやげてゆく、何とも苦しうな顔であつた。優しい貞女であり、美しい淑女であつたあの夫人に、いぞ見たこともない表情であつた。あゝお傷はしい、天國の障りを除いて進ぜやう……僕は神を念じながら、ちつとそのお眼を覗いた。眼は魂の門ぢや。虚空に去り得ぬ魂が、そこにたゆたふてゐた——わたしは所天を欺きました、と切ない聲が夫人の唇を洩れる——わたしには戀人がございました。許婚の仲でございました。四年前に出征いたしました。一年待つたが歸りませぬ。聽けばその一隊は戦地で全滅したさうでございます。わたしは所天と結婚いたしました。所天は親切な、正直な、善い人でございました。わたしは幸福な女であるべき筈でした。その幸福がわたしには辛かつたのでございます。わたしはあの戦死した戀人のまぼろしを追ふばかり暮しました。わたしが所天に見せた笑顔は、すべてその戀人に捧げたものでございます。わたしは所天のそばに、うしろに、まへに、いつもその幻の影を見てゐたのでございます。わたしは所天に濟まないと考へました。所天が氣の毒でなりません。さうして自分の罪の深さを顧みました。しかしどうすることも出来なかつたのでございます。はい、いま死んでゆくわたしの胸はその罪の深いよ

ろこびに充されてゐるのでございます。この世にお別れをして、戀人のそばへ参ることの出来るよろこびに……あゝ師父さま、わたしはきつと地獄へ墮ちるのでございませう、どふぞこの惨めな女を祝福して下さいませ……」

懺悔僧は眼をはんぶん瞑つて、一氣にそこまで申しました。血走つた眼をひろごらして、歪んだ假面のやうなわらひを見せて凝立してゐた女が、大きく蹠めいて、主人の坐つてゐる卓子へ屈みかゝりながら、おほかた速く追ひ出せと云ふ心算りだつたでせう、聲はなくて、ぱくりと口を開いて、爪のさきまで蒼ざめた手を、わたしどもの方へあげました。

折から、恐る／＼見ひらいた懺悔僧の眸が魅入られたやうに、女の姿態へ凝注します。その視線に、ふいと寒氣だつた主人の手が、無意識に短銃のうへへおよぎました。

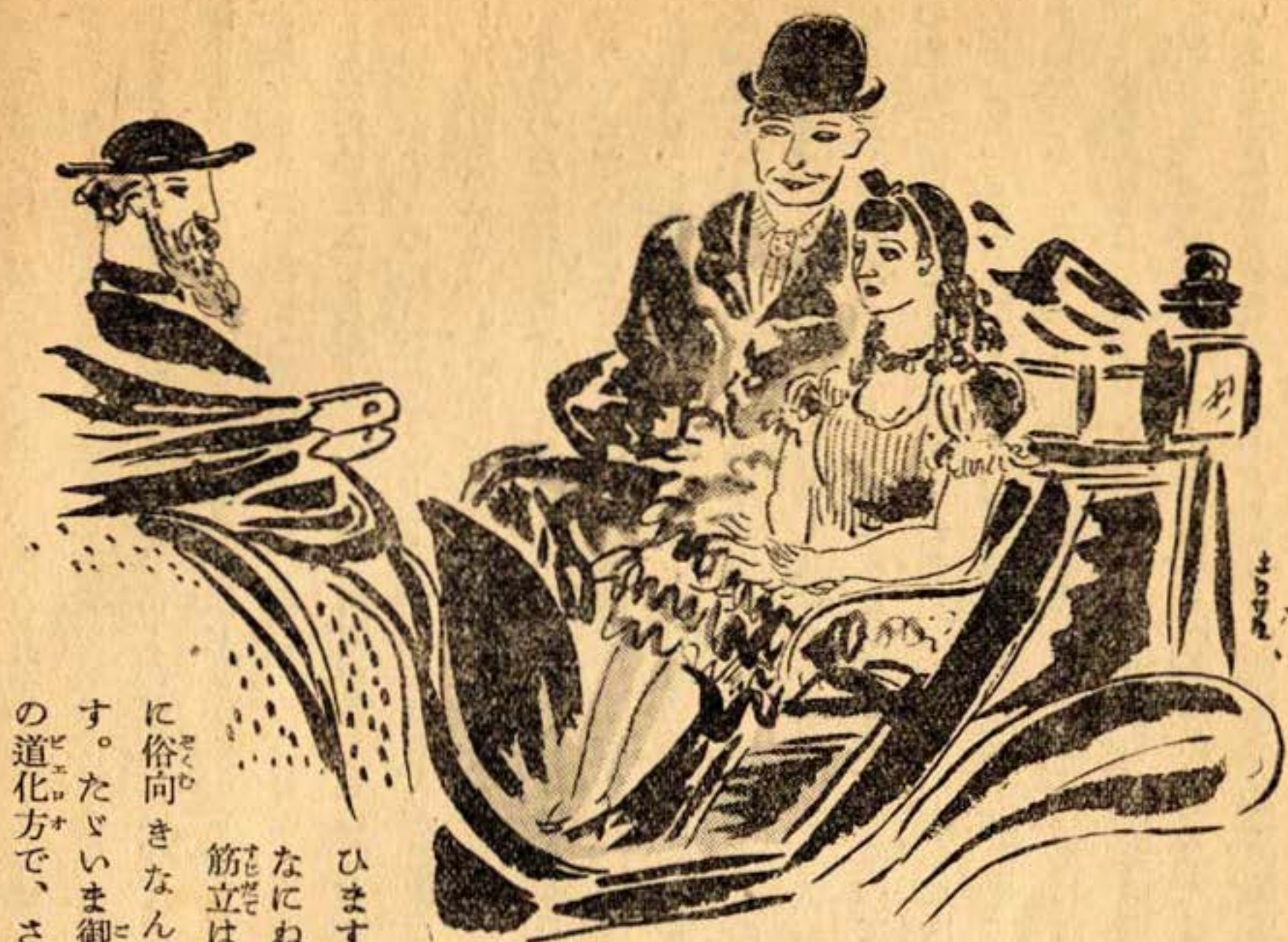
「よろしい。」

とわたしは坊さんの肩を叩きました。

「幽霊だ！ 幽霊だ……」

坊さんが、また、上つた聲で叫びます。それをそつと引つ張つて扉の外へ連れ出して、おいちど、わたしは彼らの方に向いて云つたのです——

「さ、いよいよ人氣美形の登場だ、御主人、ひとつ拍手を願



ひます。
なにね、
筋立は實
に俗向きなん
す。たゞいま御覽
の道化方で、さん

さ擦ぐつておいたあとが、ちよいと愁嘆場と云ふわけなん
す。ははは、とんだ喜劇で恐縮です。」

わざと叮嚀にお辭儀をしました。とたん、仔鹿の革の靴音
を、そつと忍ばせて、含羞みながらこの部屋へすべり込んで
來た娘が、わたしの手に縋つて、お父さん！ と低聲で呼ん
だのです。

女が悍然と此方を見る。その顔に、一瞬、血が甦りまし
た。微笑が溢れました。ヘン！ 母性愛といふやつですかね

……

娘が、わたしの手を振りきつて、いつさんにその女の胸へ
飛び込みました——

「母さん！ 母さん！ 母さん、てば！」

いや、大變な騒ぎです。どちらからともなく頬摺りをする
やら、揺すぶるやら……もう、戀人も冀もありません、所天
も冀もありません、微笑ふやら、泣くやら、夢我夢中で、は
てはしつかと抱きしめて、そこの椅子へ崩れこんでしまつた
のです……

「御主人、」

さすがにわたしの聲が震へました！
「何とか、大向うの御挨拶を願ひたい……」

例の葡萄酒の洋盃が、主人の齒に觸れて、カチカチと音をたてました——

やがてわれに返つた女が、慌てゝ娘をつつ放し、なほ縋り寄る手を、そのまゝ拂ひも得せず、たうとう顔を蔽ふて泣き出しました……

お話はこれで終ひです。え？ 一體、どうした譯だと仰言るんですか？——嘘のやうな話なんです。まるで小説みたい……さうです、女が、あるとき、泣くだけ泣いたあとで、話したところに依ると——

……坊さんのシモンズさんに懺悔をしてしまふと、妻はいよいよ死の世界へは入りました。愛着とか戀慕とか、さうした、云はゞ色のついた慾念——いまがいまであのやうに彼女を支配してゐたそれが、ふつと薄れて、何と云ふか、無色の精神だけが、不思議にはつきりと生きてゐた——と申します。さうしてその精神が、一所懸命に生命に、退潮してゆく命にかちりついてゐたと申します。そのうちに、自分が、無くなつてしまつた。いつさい判らなくなつたのです。さうしてどれ位時が経つたか、彼女は、忽然として、何ともよろこびの充ちわたつた平和を意識した、とたん——御臨終です、と云ふ醫者の聲が聴え、わたしの娘をはじめ、家族一同の咽

びあげる聲が耳に入つたさうです——そのとき、何か云はうとしたが、舌が上顎にくつついてしまひ、手足はなにやら眼に見えぬ鎖で、不可抗的に繋がれてゐるやうな氣持ちだつた……女中が來てお化粧をする、着換へをさせる、胸に黄金の十字架の垂れた眞珠の首飾りをかける、すべて前回にお話申しあげたとほりで、それをいちいち、妻は知つてゐたのです。やがて葬儀屋が來て彼女のからだを狭い棺の中へ移しました。さうして棺の蓋が閉される。蓋に釘をうち込む音が、おそろしくはつきりと彼女の耳朵にとゞろいた。彼女は名狀し難い恐怖と絶望に襲はれ、その金槌の一打ごとに、眞闇な影のやうな戦慄が五體の芯を走つたと云ふ。もちろん叫ぶことも溜息をつくことも出来ない。せめてその溜息でもつけたらどんなに助かつたらう——いや、胸苦しいほど狭い棺の中だ。なんとも強大な壓迫と、その壓迫に對して死身で反動してゐる、さう云う感覺だけが、彼女のうちに生きてをつたと云ふ……そのうちに棺が墓地にはこばれる。さうしていよいよ墓穴の底へおろされる。その降下するとき、棺のそちちが穴の側面に觸れてこつこつと鈍い音を立てた、それを彼女は、やはり、はつきりと聴いたと申します。いや、そればかりではない。その棺が穴の底に達したとき、棺をはなれて手

繰りあげられる綱の氣配もわかつたと云ふ。それから、聴きおぼえのある聲が、地上で彼女の婦徳を讃え、彼女の死を哀しんだ。さうしたものの音や聲の一語々々に、彼女の、氷のやうな絶望感が、火のやうな焦燥感が、頂點に達した……坊さんの説教が終ると、彼女のまはりに土と石の落ちかぶさる音がとどろく——あゝもうこれで、地上の世界とは永遠におわかれた。とさう思つて、さう、不思議なほど冷靜に考へた。はやく窒息したい、ほんとうに死んでしまひたい、この何とも知れず眼をあけてゐる精神が、一刻もはやく眠ればいい、と、そればかり希つたと云ひます……だが、彼女は失望しました彼女の肺は空氣を必要としなかつた。彼女の心臓は、血液を必要としなかつた。それで彼女は、生きてゐたのです。しらしらとした精神に、なにか重苦しい苦痛を感じながら、生きてゐたのです。時間は——さあ、それはどれ位経つたかわからない、とにかく、さう、とにかくだ、彼女は、なにかしら、音が近づいて来るのを知つたのです。棺が掘り出されつゝあることを知つたのです。さうして遂に、それが、地上に擔ぎあげられ、蓋がこち明けられ、冷い空氣が鼻のさきを流れてゐることを知つたのです……

……眞闇で見えない、眼はあいてゐた、筋肉は硬かつた——夜であらうと思つたと云ひますが……。彼女は誰かの膝

に抱き起され、その頬に、その誰かの頬が、何度も何度も觸れたと云ふ。無機物に觸れるやうに觸れたと云ふ。そのうちに——ソフイ！ソフイ！と遠々しい呼びごえが聴こえたと云ふ。時間と空間とを遙に距てた、しかしつい心臓のまそばにある聲だつたと云ふ。

「なアに？ チアーリー。」

彼女の唇から、さうした言葉が洩れたのです。彼女はその誰かの劇しい抱擁のなかに、蘇生しました。早春の墓地の星づく夜——彼女は龍騎兵の軍服を着た男の胸に抱かれてゐたのです……

チアーリーはその軍人の名です。四年前に戦死を傳へられた彼女の許婚者が、實は捕虜となつて生存してをり。あたかも彼女の葬式の當日に、町へ歸つて來たのです——それがすなはち、いまさき申しあげたA市の葡萄酒屋の主人であることは、いまさら申しあげるまでもありません……

×

——女ですか？ 女はどうした？ と仰言るんですか？……はい、女はもういちど死にました。自分で自分を葬りましたいえ、自殺したわけではありません、生きた屍となつて、尼寺の奥へ隠れてしまつたのです……

小間物屋の悪魔の懺悔は以上で終つた。悪魔は焰のやうな眼をして彼を裏切つた妻に對する呪ひの言葉を吐いたが、そのなかにこんな意味の言葉があつた、わざと上來の記述には除いておいたが、この「往生繪卷」のどこかで、作者は改めてそれに觸れたいと思ふから、こゝに書き添へておくことにする——

——わたしはこの不貞の妻に對する復讐の牙を磨きながら人間の死に就て研究した。いつたい人が死ねば心臓の活動が停ると云ふ。脈をしらべるとわかるが、それだけでは不完全だ、心臓へ細い針を突きさせばいゝと云ふ。ほんとうに死んだものなら、その針が固定してうごかないと云ふ。妻に出逢したら、わたしは、お前は死んだのだ！ とさう云つて針を胸に突き刺してやらうと思つた。

——わたしはまた、屍體は火傷をしても、火膨れがしないと云ふことを知つた。もしも妻に出逢したら、わたしの知り盡してゐる彼女の五體に燒ゴテをあてゝ、死んだかゝ！ と、さう澄まして、科學者のやうに云つてやらうと思つた。

——屍體は電氣を感じないと云ふ。死んでゆく肉體がその感應を失ふ順序は先づ心臓の左室、次に腸胃、次に膀胱、次に右の心室それから食道、それから眼の虹彩、お終ひに胴の筋肉と耳朶——わたしは、妻の生き身を解剖臺の上に載せて

右の順序に従つて、まだ死なんかこれでもかと、電力に依る拷問をしてやらうと思つた。

——屍體に擦り疵を負はしても脳漿液は滲み出ないと云ふ。これあまた面白い。彼女の全身の皮膚を擦り剥いて、その試験をしてやらうと思つた。

いや、ならべ立てればきりが無い、眼を蔽ふて次の場面を繰りひろげやうと、作者もうす。
(幻住記おはり)



往生と云ふこと

一枚起請文講義(四)

中 村 辨 康

(へ) 生くるいのち

如何に死すべきか

或る人が「人間は如何に生きやうかと考へるよりも、何に依て死なうかと考へる方が、本當の自分を生かす事だ」と云つて居たが、一寸面白い見方だと思ふ。

如何に生きやうかと云ふ事は、要するに利己的な個人主義に根據が置かれて居る。

即ち自力主義に立脚して居るのである。

然し自力と云ふものが、本當に有るであらうか。

朝起きてから再び寝て翌朝起る迄の二十四時間。

何處に一つ本當の自力があつたであらうか。

グッスリ寝て朝バツチリ眼が醒めた。窓からは太陽の光線がさし、雀がチュウチュウ

鳴き、電車がゴーゴー云ふ。

グッスリ寝かして貰つたからこそ眼が醒めたのである。若しも神経衰弱に罹かつて居たら、或は何か心配事でもあつたら、眠らうとしても眠られはしない。御茶やコー

凡ては他力

順逆兩様の構へ

ヒ一に浮かされてさへ満足には眠られないのである。

起き出でて顔を洗ひ御飯を頂き夫れ夫れの業務につく。何處に純粹な自力があつたであらうか。皆な天地社會の御蔭に依て居るではないか。私達の生活から空氣一つ水一つを取り去れば、もう働くことも、生きる事さへも出来はしないのである。

いくら自分の頭で、腕で、資本で、大いに働いて居るのだ、人様にたよつては居ないと豪語して居ても、世間様から信用を失つたら商賣する事も出来はしない。またいくら誠意でやるつもりで居ても、人里離れたところでは何うしやうもない。凡ては天地自然國家社會等のあらゆる御蔭なしには何事も出来ないのである。

かくの如く私達は全く一切の御蔭に依て生かされて居る。

よきに付け惡しきに付け私達は私達を「よりよく生かさしめん」とする力に依て生かされてゐるのである。

考へて見れば人間生活ほど妙なものは無い。好いがよいにならず惡いがわるいにならない。萬事は塞翁が馬である。

順境の場合餘り御調子に乗過ぎるとけつまづく。其反對に逆境の場合餘りに悲觀し過ぎると元も子も無なつて仕舞ふ。だから順境の時はグツと引締め、逆境の時はジツと堪へて反省すべきを反省し、靜かに捲土重來の祕策を練るべきである。物窮すれば通ず」で何かしら道は開けて來るものである。

「生きる命」と「死ぬ命」

ゴム毬と云ふものは、此方からぶつかれば弾むし、向ふから押して来ればへこむ。然し壓迫さへなくなれば直ぐ元のやうにふくらむ。それを自ら小刀で切つたり穴をあけたりしたら、もう物の役にはたゝないやうになる。之と同じやうに順逆兩様、向ふ様次第で何のやうにも處置して行くのが本當である。なまじ自切根性を出すから下手な麻胡付きを仕出かすに至るのである。

然かも一生麻胡付き通して、皆な墓場へ墓場へと急いで居るのだから珍妙である。かくの如くして皆なあたらし人生を臺なしにして居るのが私達の現状なのである。決して笑ひ事ではない。これで「正しく生きた」と云ひ得られるであらうか。こんな事では死んだとて録な事はあるまい。生きて居る間でさへ録な生き方をしなかつたのだから、死んだとて録な事がありやう筈がない。

生くるなら正しく生きなければならぬ。正しく生き得て初めて正しく死し得るからである。

況して私達のいのちは刻々に減つて行くのである。何時迄も若い若いと思つて居る内に、直ぐ半白の老翁老嫗と化して仕舞ふ。それで居て一刻一刻、年を取つて行くのに氣が付かないのである。かくの如くしてアツと云ふ間に五十になり六十になる。云ひ換へて見れば私達は私達の命を殺して居るのである。即ち私達の命は刻々に死んで行くのである。

往生とは

だから之を如何に正しく死せしめたかと云ふ事が、如何に正しく生き得たかと云ふ事にもなるのである。正しく生きて初めて「生くる命」たり得るのである。若し正しく生き得なかつたら、それは「死しつゝある命」に過ぎないではないか。

「往生」と云ふ言葉は「往く」と云ふ字と「生きる」とか「生れる」とか云ふ字との合成語である。

「往く」とは現在から將來への行動である。

「生きる」とは現在であり「生れる」とは未來への働きである。

だから「往生」とは現在から未來への生活行動に外ならない。

現在が本當に生きずして、未來がよりよく生きられる筈がない。

それは何時から初まつてもよい。此肉體の死の直前に於ける瞬間でもよいとさへ云はれて居るが、然しそれは最少限度のものであつて、極めて稀れな人生事實であるから、出来るならそんなきわどい藝當をしたくないものである。若い時からシツカリした信念を得て正しく生きて行きたいものである。

だからこそ法然上人は云うて居られる。

「極樂につとめて早く出で立たば、身の終りには參りつきなん」と。

信仰の事實

念佛の信仰に依れば、信仰に入つた瞬間から一息一息を正しく生かさうと努め初め

阿彌陀様を忘れた
浄土

るに至るであらう。無論今迄の習慣があり情性があるから、理想通りには行かない。然し無信仰時代の生活に比較すれば丸で人柄が違つたやうに一變して居るのである。それは心の根柢が置きかへられたからである。随て生活態度が豹變したやうに全く變つて仕舞ふのである。

入信當時は感情が高潮して居るから、宛かも聖者になつたかのやうな氣持で、スツカリ生れ變つたやうに清い状態が持續されるものであるが、段々感情が靜まるにつれて、眞面目な反省も起り、尙ほ一層の向上も望まれて来る。つまり理想の世界が現實に於てあくがれの的になるからである。

是れ即ち「往生極樂」への願ひを明瞭に意識したのである。

(ト) 浄土への往生とは

先頃浄土が有るか無いかと云ふ事が大分世間の取沙汰になつた事があつた。

何うも可笑しな話で愚にも付かない事に、世間はよくまあ騒ぎ立てたものである。

浄土の主人公たる阿彌陀様をそつちのけにして居る處が、抑も御互ひに無信仰を證明して居るのではあるまいか。浄土の有る無しより阿彌陀様が信じられてゐるか何うかを検討して見る必要があらう。

云ふ迄もなく浄土とは阿彌陀佛の極樂浄土のことである。だから阿彌陀佛が信じられたら、浄土も信じられて居る筈である。

身と心と世界と

念々の往生

涅槃の種類

極端に云へば阿彌陀佛の御心が淨土であり、阿彌陀佛の御身體が淨土である。御經には「虚無の身、無極の體」とも云つて居る。

私達の身體のやうな身體ではない。

「虚無」とは虚空に均しい無邊無量を意味して居る。「無極」とは極限なき無碍無量を意味して居る。だからこそ阿彌陀、即ち「無量」と名付けられて居るのである。

既に無量であり、無邊であり、無碍である。

して見れば淨土は其儘阿彌陀佛であり、阿彌陀佛身は其儘淨土であるべきである。

だから今私達が「南無阿彌陀佛」と一心に阿彌陀佛に南無する時、私達の心は阿

彌陀佛の中に融込んで居るのである。即ち私達がハツキリ意識すると否とに拘らず、

其刹那に於ては一分の往生が出来て居るのである。一念一念が往生して居るからこそ

其人の信仰が安定して居るのでもある。

支那の善導大師は「此界一人念佛名、西方便有一蓮生」とも云つて居られる。つま

り私達が本氣で念佛する時、淨土では其心が楚々たる蓮の如き清らかさを以て咲き出

でつゝ薫ると云ふ意味である。

聖道門と云ふ聖者たらんことを目的とする教では、其の理想の世界を「涅槃」と云

つて居る。涅槃とは煩惱の無くなつた自由の世界のことであり、無量壽の世界の異名

である。之に「有餘涅槃」と「無餘涅槃」との別がある。「有餘」とは餘りが有ると書

涅槃よりも往生

いてあるやうに、此肉身や不完全な精神作用が残つて居てまだ完全な自由の状態ではないと云ふことであり、また「無餘」とは邪魔なものの無くなつた完全な自由の状態を云ふのである。随て釋尊の御逝去を「入涅槃」と云つて完全な涅槃の世界に入れたものとして居る。之は小乗教で云ふ處のもので、大乘教では少し意味が違つては居るが、少くとも原始的にはかうした事が云はれて居たのである。

かくの如く聖道門の教でさへ完全な理想的な「涅槃」の世界を未來に於いて居る。之は畢竟人間と云ふ現實の姿を知つて居たからである。

それが現實を離れた理論を考へ出されてからは、「無住所涅槃」と云ふ「涅槃にも住せず」さればと云つて「生死の世界にも住せざる」嫌やに悟り切つた變手古な境界を作り上げてしまつたが、是は法然上人の深い反省に依て人間の中から取り捨てられた思想である。自分丈がさう思つて居たとて、社會生活は中々思ふやうには行かないからである。

理想としては許され得ても、人間生活の事實としては、實現不可能であるか、或は無反省の自惚れに過ぎないか、若しくはインチキな山師に悪用されるかに終るものである。

そんな浮付いたそして人間の生々しい生活を見つめた方が實際的である。現實に即した信仰の世界を見つめた方が實際的である。

軌道に乗つた生活

事實、私達は信仰に依て今迄の生活を改心しても、永い習慣から中々眞實なものにはなり得ないものである。

だからせめて一念丈宛でもよいから時々「南無」の信仰に依て、眞實さの中に浸り得る事が出来れば、「有餘の身」としてはそれで満足して居てよいではあるまいか。

今迄無軌道で居たやくざな私達が、一度信仰に入れば、其心の根本基調が置き替へられるのだから、云はゞ丁度軌道に乗つたやうなものである。時々停車場に滞留するとか、若しくはトンネルをくぐる事があらうとも、念佛と云ふ石炭さへ焚けば進行は続けられ、そしてスルスルと軌道の上を眞直ぐに滑ることが出来るのである。此姿は「有餘」的な往生であらう。まだ本當のものではないであらうが、一度軌道に乗つた以上、それが墮落に依て脱線しない限り、そして念佛と云ふ石炭が供給されて居る限り、私達の汽車は永遠に進むのみである。唯だ阿彌陀佛の永遠の命の中へ眞直に進むのみである。之を往生と云つて何うして悪いであらうか。そして永遠に往生して行く方法が此外にあり得るであらうか。それを假りに肉體存続中の姿を「信仰」と名付け、肉體の終滅後を「往生」と云つたとて、名前などはさう大した問題ではないではないか。

今之を假りに涅槃の使ひ分けに做つて「有餘往生」、「無餘往生」と名づけるのも一寸面白いと思ふ。

信仰こそ一切を解
く鍵

だから法然上人は此の『一枚起請文』に於て、
「唯だ南無阿彌陀佛と申して疑ひなく往生するぞと思ひ取りて申す外には別の子細
候はず」

と、別の子細などは何うでもよいと云ひ切つて居られるのである。其上、外の處では、
「生けらば念佛の功を積み、死なば浄土へ参りなん、とてもかくても此身には、思ひ
煩らふ事ぞなきと思ひぬれば、死生共に煩ひなし」

と、生死の區別をさへ問題にして居られない。それは要するに信仰である。信仰に
入つて初めて味ひ得られる問題である。信仰なき者の知り得ない永遠の命である。信
仰があつても無くても刻々に過ぎ行く人生である。

然し人生が本當に幸福であるか、不幸であるかは、唯だ「往生」し得る確信を以て進む
か、若しくは「往死」の状態のまゝにくだらなく人生を空費して行くかの二筋道である。
人があゝ云つた、かう云つたで、ぐらつくやうな信仰は信仰ではない。畢竟念佛が
足りないからである。本當の「南無」の経験がないからである。一度本當の「南無」が
出来さへすれば、浄土の問題も往生の問題もハッキリして来る。誰に尋ねる必要もな
い。

一切解決である。

(正誤) 浄土六月號七十三頁

五種正行の圖中、四、稱名正行一の斜線
は誤りに付き御消し下さい。

(第四回終り)

芭蕉の辭世

蟲の音の弱りそめた庭を、さつきから幾度か時雨が通つた。枕頭の行燈に灯影がゆれて壁にうつる人達の影が淋しい。

これは浪速の花屋の裏座敷である。渡り鳥のやうに長い旅から旅を重ねて來た芭蕉は、明日をも知れぬ其の身を病床に横たへてゐる。

京からわざ／＼走せつけた去來は思ひ定めたかのやうに、「昔から名ある宗師で、大期に辭世のない者は殆んど無いやうに思ひます。あなたの御病氣は無論本服いたしますことゝは思ひますけれども、また大期に臨んでおいでなさることも否めません。どうか御辭世の一句をお残し下さいませ。」

ませ。」

と、くもり勝ちな聲を押しかくして言ひ終ると、師の頭をじつと見つめた。衰へ果てた翁は靜かに口を開いて、

「昨日の發句は今日の辭世、今日の發句は明日の辭世、わたしが生涯いひ捨てた句は一句として辭世でないものはない。もし芭蕉の辭世はと問ふ人があつたなら、この年頃言ひ捨てた句のいづれなりとも辭世だと云つて示して下さい。說法從來、常示寂滅相。これは釋尊の辭世で、亦一代の佛教この二句よりなかつたのである。」

と、言つた。それは鐵枯れた聲ではあつたが、言葉には一種の力が籠つてゐた。

折から時雨はまた板庇をたたいた。その音を聞きつけた芭蕉は、

蕉は、

「初しぐれぢやなあ……。わたしはこのしぐれを聞きながら死ぬかなあ……。」と靜かに言つた。

旅に病んで夢の枯野をかけめぐら

傍にゐた惟然は急いでその言葉をかきつけた。やがて芭蕉は再び口を開いた。

「これは辭世ではない。いや辭世でないこともない。病中の心ではあるけれども、しかし、生死の大事を前におきながら……生涯好みの風流とは言へ……これも亦妄執の一つといふものか……」

ざらりと並んだ弟子達の顔をしながら、うるんだ眼には寂しい笑ひをうかべてゐた。夜明け方の微かな光りは寒さうに障子に動いてゐた。

作さゞれば

食はず

唐の大智禪師は九十に垂んとする老齡に及びながらなほ五百人の雲水と共に同じく作務を勵んだ。お止めになつて下さいと頼んだが一向肯き入れない。そこで作務の時禪師が用ひられる幕を隠しておいた。禪師は仕方なく方丈に引つこまれた。

食事の時になつた。ところが禪師は出て來られない。

「何故おいでになりませぬか。」

「今日は作務をしなかつたら、わしは食事を頂かぬ。一日作さゞれば一日食はず」

禪師はかう答へて、到頭その日一日、食事をしなかつたと云ふことである。

編輯後記

○本號の類振れ、内容ともに、堂々たるもの、どの一流雑誌にも決して引けはとらないと云ふ自信を以て、讀者に提供することが出来る來ます。

○巻頭の望月博士は云ふ迄もなく我が佛教學界の泰斗、大辭典編集のお忙しい中を特に本誌のために御執筆下さいましたことを深く感謝いたします。

中里介山氏の名講演はまた佛敎文學の行く手を差し示した大文字です。

○三木清氏は哲學者として哲學界の既に一方の雄、得意の人間學の立場から法然上人偉仰の念を説かれた文章は平易にして何人の胸にも迫るものがある。

○小説は特に本誌には山中峯太郎氏を埒し來つて、明朗な諧謔を

弄していたゞいた。全文掲載の筈の處、紙面の都合で後半を次號に譲りました。來月號は更に興味ある場面が展開します。

往生繪卷の『幻住記』は今月を以て終り、更に引續いて十一谷氏の麗筆をわすらはしたいと思つてをります。

○隨筆には特に二人の詩人、佐藤惣之助氏、高村光太郎氏をわすらはした。高村氏は有名な故光雲翁の息。

○その他大野法道師、中村辨康師、眞野正順師、鶴田湛泉師等、敎界錚々の類振れは斷じて他の追随を許さぬ本誌獨特のものであります。

○三號の關を突破して四號を素晴らしい元氣を持つて迎へた本誌、市場に於ける飛ぶやうな賣行き、讀者の熱烈な聲援と相俟つて、誌界をあつと云はせるやうな活躍を見せようと編輯子は目下夜の目

も寝ずに考へてゐます。

○佐藤春夫氏の黒谷法然上人傳は毎回非常な好評を博しておりますが、今回は著者の御都合により一回だけ休載することになりました。非常に残念であります。來月號よりは、例の通り讀みつけて頂く筈で御座います。

法然上人鑽仰會とは

日本文化の母胎は法然上人

の思想と人格である。法然上人

人を知らずして、日本精神を

語ることはできない。日本を

語らんとするものは吾等と協

同せよ、お申込み次第趣意書

を無代進呈。會費は一ヶ年一

圓で『淨土』と月刊新聞『法

然鑽仰』が毎月講讀できる。

淨土 八月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便認可

昭和十年七月二十日印刷納本
昭和十年八月一日發行

(定價金十錢)

品川區南品川四丁目三七八

編輯兼 佐藤 賢順

發行人 東京市本所區千歲町二ノ一八
印刷人 赤尾 光雄

東京市牛込區市ヶ谷加賀町二ノ三
印刷所 大日本印刷株式會社

發行所 法然上人鑽仰會
東京市芝區芝公園明照會館内
振替東京八二一八七番

「淨土」購讀規定

一部 定價 金十錢
(送料一錢)

一ヶ年 金一圓
(送料不要)

右の一ヶ年金壹圓は法然上人鑽仰會の會費です。入會申込みと同時に一圓御納めになれば、『淨土』及び月刊新聞『法然鑽仰』が一ヶ年間購讀できます。その他種々な特典が得られます。

大正大學教授 大野 法道 著

法然上人

定價拾五錢

(送料二錢)

四六判七十頁

總ふり假名付

美麗なる繪畫表付

不拔なる信仰への道！それは巨人法然上人が説き且つ行つた道である。そしてこの道こそ現代日本を率いて立つべき日本精神へと通じてゐるのだ！！

法然上人に關する文獻は古來少しとしなかつたが、いづれも難解に過ぎるか、浩瀚に失するかして、萬人に適する文字を得なかつた恨みがある。篤學の著者が研磨してもものしたるこの簡潔にして要を得たる一本は讀者をして直接上人に接するの思ひあらしめ、その嫻々たる餘韻は讀む者を法悦の彼方にひき込まずにはおかぬ。

再版出來！！ 施本、贈答用
として、最適當なもの！

發行所

法然上人鑽仰會

東京市芝區芝公園明照會館内
電話芝(43)一三五二・八四〇
振替東京八二一八七番

之ぞ斷然優秀の

消炎鎮痛貼布藥

- 一、皮膚に貼つたまゝ入浴差支へなし
- 一、貼り換へず共一晝夜藥効を持續す
- 一、綺麗故不快の貼りアトを残さず
- 一、藥臭もなく悪性のかぶれも起さず
- 一、何れへ貼つても柔軟伸縮自由自在
- 一、ロートエキスを含む最新の威力



佳人の膏藥

ママプラスター



愛讀者御優待

御住所氏名明記の上大木合名會社宛御
申込下されば本誌讀者に限り見本贈呈

適應症

神經痛 肩の凝
リウマチスの痛む所
運動に因る筋肉並關節痛
勞働に因る筋肉並關節痛
打撲 捻挫 挫傷 胸痛
手足首背腰の痛む所
乳腺炎 齒痛 靴擦
疳氣 腫物 蟻傷

大木五臟圓本舖

大木合名會社

東京市神田區鍛冶町三番
電話神田代表壹壹〇五番

各藥店にあり

十錢
二十錢
五十錢
一圓

昭和十年六月廿日第三種郵便物認可(毎月一回一日發行)
昭和十年七月廿日印刷納本
昭和十年八月一日發行

淨土 第一卷 第四號

定價金十錢(送料一錢)